

柳橋物語

山本周五郎

青空文庫

前篇

一

青みを帯びた皮の、
まだ玉虫色に光っている、
活きのいいみこ

とな秋鱈あきあじだった。皮をひき三枚におろして、塩で緊めて、そぎ身に作つて、鉢に盛つた上から針しようがを散らして、酢をかけた。……見るまに肉がちりちりと縮んでゆくようだ、心ははずむように楽しい、つまには、青じそを刻もうか、それとも蓼酢たてずを作ろうか、歌うような気持でそんなことを考えていると、店のほうから人のはなし声が聞えて来た。

「いったいいつまでにやればいいんだ」

「無理だろうが明日のひるまでに頼みたいんだ」

「そいつはむつかしいや、明日までというのがまだ此処ここにこれだけあるんだから、まずできない相談だよ」

「そうだろうけれど、どうしても爺さんの手で研いで貰いたいん

だ、そいつを持って旅に出るんだから」

「旅へ出るって」源六のびっくりしたような声が聞えた、「……おまえが旅へ出るのかい」

「だから頼むのさ、爺さんに研ぎこんで置いて貰えば安心だからな、無理だろうけれどそれでやって来たんだよ」

庄吉の声だった。おせんは胸がどきつとした、庄さんが旅に出る、出仕事だろうかそれとも、そう思っただれにもなく耳を澄ました。

「そうかい」と源六が返辞をするまでにはかなりの間があつた、

「……じやいいよ、やっておくから置いてゆきな」

「済まない、恩に衣きるよ爺さん」

そしてその声の主は店を出た。おせんがその足音を耳で追うと、それが忍びやかに、けれどすばやくこの勝手口へ近づいて来た。おせんはその腰高障子をそつと明けた、庄吉が追われてでもいるような身ぶりですつと寄つて来た。血のけのひいた顔に、両の眼が怖いような光を帯びておせんを見た、彼は唇を舐めながら囁くように云つた。

「これから柳河岸やなぎがしへいつて待っているよ、大事なはなしがあるんだ、おせんちゃん、来て呉くれるかい」

「ええ」おせんは夢中で頷うなずいた「……ええいくわ」

「大川端のほうだからね、きつとだよ」

そう念を押すとすぐ庄吉は去つていった。おせんは誰かに見ら

れはしなかつたかと、……どうしてそんなことが氣になるのかは意識せずに、……横丁の左右を見まわした。向う側にはかもじ屋に女客がいるきりで、貸本屋も糸屋も乾物屋もひっそりとしているし、主婦がおしゃべりでいつも人の絶えない山崎屋という飛脚屋の店も、珍しくがらんとして猫が寝ているばかりだった。障子を閉めたおせんは、^{さぐる} 箆にあげてある青じそを取って、^{まないた} 俎板の上一枚ずつ重ねて、^{ほうちよう} 庖丁をとりあげたまま暫くそこに立ち^{すく} 竝んでいた。なんと云つて家を出よう。そんなことは初めてなので、怖いようでもあるし、お祖父^{じい}さんに嘘を云うことが辛かった。けれども頭のなかでは庄吉の蒼^{あお}ざめた顔や、思い詰めたようなうわずった眼や、旅に出るといふ言葉などが、くるくると渦を巻くよ

うに明滅し、彼女の心をはげしくせきたてた。……そうだ、おせんは俎板の上の青じそを見てふと気づいた。やなぎわらどて柳原堤へいつも出るはしり物屋がある、このあいだ通りかかったら独活うどがあつた、あれを買つて来てつまにしよう、駆けてゆけば庄吉の話を知りたくあがつた。あがつた。

「お祖父さん、ちよつと出して鱈のつまにする物を買つて来ますよ」

「鱈のつまだつて」源六は砥石といしから眼をあげずに云つた、「……つまなんか有合せで結構だぜ、あんまり気取られると膳ぜんが高くなつていかねえ」

「それほどの物じゃありませんよ、すぐ帰つて来ますからね」

そしてなおなにか呼びかけられるのを恐れるように、店の脇から出て小走りに通りのほうへ急いでいった。……中通りをまっすぐにつき当ると第六天だいろくてんの社である、柳原へはそこを右へ曲るのだが、おせんは左へ折れ、平右衛門町へいえもんちようをぬけて大川端へ出た。

隅田川すみだがわは夕潮でいっぱいだった。石垣の八分めまでたぶたぶ

とあふれるような水からは、かなりつよく潮の香が匂つてきた、初秋の昏れくがたの残照をうけて、川波は冷たくにぶ色にひかり、ひとところだけ明るく雲をうつしていた。竹屋の渡しあたりを川上へいそぐ小舟が見えるほかは、広い川面に珍しく荷足にたりも動かず、鷗かもめの飛ぶようすもなかった。……河岸ぞいに急いでゆくと、足音

に驚いて小さな蟹かにが幾つも、すばやく石垣の間へ逃げこむのがみえる。ついするとそれを踏みつけそうで、おせんははらはらしながら歩いていった。神田川のおち口に近い柳の樹蔭こかげの、もううす暗くなつたところに庄吉は立っていた。柳の樹に肩をもたせて、腕組みをして、どこやら力のぬけたような姿勢で、ぼんやり川波を見まもっていた。

「有難うよく来て呉れた」

彼はおせんを見ると縫すがりつくような眼をした。

「あたし柳原まで買い物をしにゆくつもりで出て来たの、遅くなつては困るし、もし人に見られるときまりが悪いから……」

「話はすぐ済むよ」庄吉はおせんよりおどおどしていた。ふだん

から色の白い顔が、血のけもないほど蒼くなり、大きく瞠みひらいでいる眼は、不安そうに絶えずあたりを見まわすのだった。「……今朝とうとう幸太こうたと喧嘩けんかをしてみました、おれはがまんして来た、きようまでずいぶんできないがまんをして来たんだ、けれどもどうせいつかはこうなる。おれか幸太か、どっちか一人はこの土地を出なくちゃあならないんだ、そして幸太が頭とうりよう梁りやうの養子ときまったからには、出てゆくのはおれとわかりきっていたんだ」

「でもどうして、どうして喧嘩になんぞなったの、幸さんとどんなことがあったの」

「今朝のことなんかたいしたことじゃあない、ただ喧嘩のきつかけがついたというだけで、はつきり云ってしまえば……」庄吉は

そう云いかけてふと口を噤つぶんだ、それから臆病おそそうな、けれどく
いいるような烈しい眼つきで、おせんの顔をじつと見つめた、

「……いやそれを云うまえに訊きいて置きたいことがあるんだ、お
せんちゃん、おれは明日、上かみがた方へ旅に出るよ」

「……………」

おせんはこくつと生唾をのんだ。

「江戸にいれば頭梁の家で幸太の下風かふうにつくか、とびだしたとこ
ろで、一生叩き大工で終るよりほかはない、それより上方へいっ
て、みっちり稼かせいで、頭梁の株を買うだけの金をつかんで帰って
来る、知らない土地ならばみえも外聞もなく稼げるし、あつちは
諸式がずつと安いそうだから、早ければ三年、おそくつても五年

ぐらいで帰れるだろう、おせんちゃん、おまえそれまで待っていて呉れるか」

「待っているって」

おせんは声がふるえた、「……あたし、庄さん」

「そうなんだ、きょうまで口ではなんにも云わなかったけれど、おれがおせんちゃんをどう思っていたかということとはわかっていて呉れた筈だ、おそくとも五年、帰って来れば頭梁の株を買って、きつとおまえを仕合せにしてみせる、おせんちゃん、それまでお嫁にゆかないで待っていて呉れるか」

「待っているわ」おせんはからだじゆうが火のように熱くなった。そして殆んど自分ではなにを云うのかわからずにこう答えた、

「……ええ待っているわ、庄さん」

「ああ」庄吉はいつそう蒼くなつた。「……有難うおせんちゃん、おかげで江戸を立つにもはりあいがある、そしてその返辞を聞いたから云うが、実は幸太もおせんちゃんを欲しがっているんだ、喧嘩のもととは詰りそれなんだ、だからおれがいなくなれば、きつと幸太はおまえに云い寄るだろう、そいつは今から眼に見えていゝる、だがおれはこれっぽちも心配なんかしやあしない、おせんちゃんはおれを待っていて呉れるんだ、どんなことがあつても、そう思っていていいな、おせんちゃん」

そのときおせんは譬えたとようもなく複雑な多くの感情を経験した。あとになつて考えると、わずか四半刻しはんときばかりのその時間は、彼

女の一生の半分にも当るものだった。……おせんは覚えている、そのときあたりは昏れかけていた。つい向うに見える両国の広小路も、川を隔てた本所ほんじよの河岸も、このあいだまでは水茶屋に灯がはいり、涼み客のざわめきで賑わにぎっていたのに、いまは掛け行燈の光もなく、並んだ茶店はもう女たちも帰ったのだろう、ひっそりと暗く葭簾よしずが巻いてある、もう肌さむいくらいな川風に、柳の枯葉はあわれなほど脆もろく舞い散り、往来の人の忙しげな足どりも、物売のかなしげな呼びごえも、すべてが秋の夕暮のはかなさを思わせるものばかりだった。

庄吉に別れるとそのまま家へ帰った、もう柳原へいつて来るには遅いと思ったから。帰るみちみち、おせんの胸はあふれるよう

な説明しようのない感動でいっぱいだった。それは生れて初めての、あまい、燃えるような胸ぐるしいほどの感動だった。庄吉と逢ったわずかな時間、庄吉から聞かされた短いその言葉、その二つが彼女のなかに眠っていた感情と感覚とをいっぺんによび醒さましたのである。街の家並もたそがれのあわただしい景色も、常と少しも違ってはいないのだが、今のおせんにはびつくりするほど新しくもの珍しいように思え、こんなにしつとりしたい町だったのかと見なおすような気持だった、源六はもう灯をいれて、砥石に向っていた。

「おそくなつて済みません」おせんはそう声をかけながら、店へはいろいろとしてふと気がつき表に掛けてある看板を外した、雨か

ぜに曝さらされてすつかり古びているが、まん中に御研ぎ物、柏屋かしわや源げんろく六と書き、その脇へ小さな字で、但し御おんやり槍やりなぎなた御腰の物はごめんを蒙こうむると書いてある、おせんは看板の表の埃ほこりを払いながらいった、「……このあいだ独活があつたのでいつてみたのだけれど、きようはあいにくどこにもないのよ、おじいさん、かんにして下さいね」

「だから有合せでいいつて云つたんだ、つまなんぞどうでも秋鯨の酢があればおれは殿様だぜ」

「それではすぐお膳にしますからね」そしておせんはもう暗くなつた台所へはいつていつた。

二

庄吉はその明くる日、たのんだ研ぎ物を受取りかたがた別れに
来た。源六には「三年ばかり上方で稼いで来る」と云っただけで
精^{くわ}しい話はしなかった。おせんには達者でいるようにと云い、お
もいをこめた眼でじつとみつめながら、まるで泣いているような
微笑をうかべた。そしてその日午後、品川のほうにある親類の家
から旅に立つ筈で、茅^{かやちよう}町の土地を去っていった。

おせんは四五日ぼんやりと、気ぬけのしたような気持で日を送
った。なにかしていてもふと庄吉のことを考えている。蒼ざめた
顔や、思いつめたきみの悪いような眼や、おずおずした、けれど

真実のこもった囁きささや声などを、繰り返し繰り返し考え耽ふけっているような日が。……その次には旅のかなたが気になりだした。もうどのくらい行つたらう、箱根はぶじに越したろうか、馴れない土地は水にあたり易いという、病みつくようなことはないかしらん、そして、よく人の話に聞く道中の恐ろしい出来事や、思いがけない災難があれこれと想像されて、ぞつと寒くなるようなことも度たびだった。こういうことが半月ほど続いたあと、少しずつ気持ちがおちついてくるとおせんは庄吉と幸太とのかかわり、かれらと自分との繋つながりを思い返した。

茅町二丁目の中通りに杉田屋すぎたや巳之吉みのきちという頭梁が住んでいる、家にいる職人だけでも十人ほどあり、多く武家屋敷へ出入りをす

る名の売れた大工だった。おせんの家は元その隣りで髪結い床をやっていた。父の茂七もしちは彼女が十二のとき死んだが、口の重い、癩かんの強い性質で、あいそというものがまったく無いため、よく知つてゐる者のほかは余り客も来なかつた。また母は病身で月のうち十日は寝たり起きたりのありさまだったから、家の中はいつも鬱陶しく沈んだ空気に包まれ、いつもどこかに溜息ためいきが聞えるという風だった。……おせんはごく幼い頃から、一日じゆう杉田屋の家で遊び暮すことが多かつた。巳之吉も妻のお蝶ちようも子供が好きなのに、一粒だねの女兒が生れて半年めに死んでしまい、そのあとずつと子が無かつたので、おせんがまだ乳ばなれもしないうちから、よく来ては「なんだか膝ひざさびしくつて」などと云つては抱

いてゆきゆきした。おせんのほうでもお蝶によく馴ついて、自分の家は狭くるしく陰気で、子供ごころにもなにやら息詰るような感じだったが、杉田屋は座敷も広く人も大勢いて賑やかだし、そこにはいつも玩具や菓子が続っていた。着物や帯もずいぶん買つて貰つた、春秋はるあきには白粉おしろいを付け髪を結い、美しく着飾つて、そのころ杉田屋にながくいた定五郎さだごろうという老人の背に負われて、巳之吉夫妻といつしよに花を見にゆき、秋草を見にいった。王子権現ごんげんの滝も、谷中やなかの螢ほたるさわ沢も、本所の牡丹屋敷も、みなそうして知つたのである。

——おせんちゃん、小母さんの子におなりでないか、そのじぶんお蝶はよく頼ずりしながらそう云つた。するとおせんは生まじ

めな顔になり、いかにも困つたというように首をかしげながら、あたしおつかさんの子でなければおぼさんの子になるんだけれど、きまつてそういう返辞をしたそうで、そんな幼さに似あわない、情の籠こもつたようすだつたと、後になつてからよく聞かされた。

おせんなの九つの年に母が亡なくなつた。そして間もなくお祖父さんが来ていつしよに住むようになった、源六は父にとつて実の親だつたが、気性が合わないため別居し、神田のほうで研屋をしながらずつと独りで暮していた。それが茂七が妻に死なれ、おせんを抱えて惘もうぜん然としてゐるのをみて、自分からすすんでいつしよになつたのである。それまでにも菓子や花はな簪かんざしなどを持つては折おり訪ねて来たので、おせんはよく知つてもいたし母の亡くな

ったあとの淋しいときだったから、すぐ源六に馴ついて、夜なども抱かつて寝るようになった。……幸太と庄吉とはその前後から知り合ったのだ、幸太は巳之吉の遠い親類すじに当り、十三の春から、杉田屋へ徒弟にはいった。口のきき方もすることも乱暴な、ひどくはしっこい少年で、来る早々から職人たちと達者に口喧嘩などするという風だった。庄吉は幸太より半年ほどあとから来た、不仕合せな身の上で、両親もきょうだいもなく、品川で漁師をしている遠縁の者が親元になっていた。彼は幸太とは反対にごくおとなしい性分で、おない年とはみえないほど背丈も低く、ひよわそうな女の子のような感じだった。母が亡くなってからはおせんはあまり杉田屋へゆかなくなった。お祖父さんが止めるし、父も

好まないようすだったから、ずっとあとになってわかったことだが、杉田屋から養女に貰いたいという話があり、父との間が気まづくなつたのだという、……けれども杉田屋のほうでは別に變つたようすもなく、お蝶が自分でなにか持つて来て呉れたり、幸太や庄吉を使いによこして食事に呼んだり、芝居見物につれだしたりした。

茂七が死ぬとすぐ、源六はおもて通りの店をたたんで、中通りの今の住居へ移つた。もうおせんも十二になつていたし家も離れたので、巳之吉やお蝶とはしだいに疎くなつたが、職人たちは道具を研いで貰うためにしげしげやって来た。「いちにんまえの大工が自分の道具をひとに研がせて申しわけがあるのかい」源六は

いつもそう叱りはしたが、そのあとでは彼らによく職人氣質かたぎというものを話して聞かせた、砥石に向つて仕事をしながら訥々とつとつとした調子で古い職人たちの逸話を語るとき、老人はいかにも楽しそうだし聴く者にとつてもおもしろかった。世間は表裏さだめ難く人生の転変は暫くもうつりやまない。生活はいつも酷薄できびしく些いささかの仮藉かしゃくもない、そのあいだにあつていかに彼らが仕事に対する情熱の純粹さを保つたか、いかに自分の良心の誤りなさを信じたか、老人のしずかに語るそういう数かずの例は、聴く者にとつてただおもしろいだけではなく、そういう人たちのように生きようということ、どんな苦しいことにも負けずに本当の仕事をしようという気持をよび起こされるのだった。……幸太も庄吉

もしばしば来た、幸太は相変らず口が悪くすることも手荒かったが、仕事の腕はもういちにんまえだと云われていた。

「へん腕で来い」そう云つて兄弟子たちにも突つかかることが少なくなかつた。芝居を見にゆくと花簪とか役者の紋を染めた手拭とか半はんえり衿などを買つて来て呉れるが、決しておとなしく渡すやうなことはない、そつぽを向いて「ほら取りな」などと云いながら投げてよこすのだった、そのくせおとなしい庄吉よりもおせんには彼のほうが近い感じで、なにか頼んだりするにはいつも幸太ときまっていたのである。

幸太が杉田屋の養子にきまつたのは、去年の冬のことだった。かなり派手な披露宴があり、源六やおせんも招かれた、十九とい

う年になつても幸太は幸太らしく、巳之吉と親子の盃さかずきをするときには赤くなつて神妙にしていたが、酒宴になるともう窮屈に坐つているのが耐らないらしく、膝を崩して注意されたり、しきりに立つたり、また膳の物を遠慮もなく突つついて叱られたりした。それが十三四の頃のいたずらな彼そのまままで、おせんは遠くから眺め乍ながら幾たびもくすくすと笑つた。……そのとき庄吉はひどく蒼い顔をして、元氣のないようすで客の執持とりもちをしていた。おせんは別に気にもとめなかつたが、暫く経つてから、養子のはなしは幸太と庄吉の二人のうちということで始まり、結局は幸太にきまつたのだと聞いてから、酒宴のときの庄吉の沈んだようすが思そそいだされてはげしく同情を唆そそられた。

——庄さんのほうがおとなしくって人がらなのに、杉田屋さんではどうして庄さんをご養子にしなかつたんでしょう。おせんはそれが不服でもあるように云つたものだ。

——どっちでもたいした違いはないのさ、と源六は笑いもせず
に答えた。杉田屋の養子になつたからといつてゆくすえ仕合せと
はきまらないし、なり損ねたからつて一生うだつがあらがないわ
けではなからう。運、不運なんというものは死んでみなければ知
れないものさ。

元もと温順な庄吉は、それまでと少しも変らず黙つてよく稼い
でいた。もう腕も幸太に負けなかつたし、仕事に依つては彼のほ
うが上をゆくものもあつた。然しおせんにはそれが幸太と張り合

っているように、腕をあげることと意地を立てようとしているようにみえ、いつそう庄吉が孤独な者に思われて哀れだった。……だがいずれにしても、幸太と比べて庄吉のほうが好きだと考えたことなどはなかった、幸太のてきぱきした無遠慮さ、自分を信じきった強い性格はにくいと思っても不愉快ではない。庄吉の控えめなおとなしき、いつもじつとなにかをがまんしているというようなどころはあわれでもあり心を惹ひかれる、二人とも幼な馴染で、どちらにも違った意味の近しき親しきをもっていたのだ。

「けれどもうそれもおしまいなんだわ」おせんはあまいようなら悲しい気持でそう呟つぶやく、「……庄さんはあたしの待っていることを信じて上方へいったのだもの、違った人情と雨かぜのなかで、

あたしと二人のために苦勞して稼いで来るのだもの、あたしだつて庄さんだけを頼りに待つていなければならぬわ、どんなことがあつても」

おせんは自分の心も感情も、庄吉のことではいっばいだと思ふ。するとそれがさらに彼のうえを思うさそいとなり、時には胸の切なくなるようなことさえあつた。——もう大阪へ着いた頃である。宿はきまつたかしらん。うまく稼ぎ場の口がみつかるだろうか、もう手紙くらい来てもいい筈だけれど、そんなことを思いつつ秋を送り、やがて季節は冬にはいった。

霜月はじめの或る日、向うの飛脚屋の店にいる権二郎ごんじろうという若者が、買い物に出たおせんのを追つて来て手紙を渡した。「杉田屋にいた庄さんから頼まれてね」と、彼はにやにやしなから云った。

「まあ」おせんはかつと胸が熱くなつた。

「……どこで、この手紙どこで頼まれたの」

「大阪でひよつくりぶつつかつたんだ、そうしたらこれを内証で、おせんに渡して呉れと云われてね、元気でやっているからつてさ」
「そう有難う、済みません」

権二郎はまだなにか云いたそうだったがおせんは逃げるように

彼から離れていった。……山崎屋はさして大きくはないがともかく三度飛脚で、大阪の取組先があり若者も五人ばかり使っていた、権二郎はその一人だが、用^{ようたし}達には誰よりも早く、十日限^{ぎり}、六日限などという期限付きの飛脚は彼の役ときまっているくらいなのに、酒癖が悪くて時どき失敗し、店を逐われてはまた詫^わびを入れて戻るといふ風だった。「どうして庄さんはあんな人に頼んだのかしら」おせんは買い物をして家へ帰るまでそれが気になった、「……また酒にでも酔って、近所の人にも話されたらどうしよう、そんなことのないようにしては呉れたらうけれど、あの人の酒癖を知っていたらよして呉ればよかった」たぶん遠いところと同じ土地の者に会ったなつかしさと、手紙を内証で渡したさに

つい頼んだものに違いない。そう考えたものの、おせんにはなにかよくないことが起こりそうに思え、どうしても不安な気持をうち消すことができなかつた。

その夜お祖父さんが寝てから、おせんは行燈の火を暗くして手紙を読んだ。それはごく短いものだった。道中なにごともなく大阪へ着いたこと、道修町どしやうまちというところの建具屋へひとまず草鞋わらじをぬぎ、いまその世話で或る普請場へかよっていること、江戸とは違って人情は冷たいが、詰らぬ義理やみえはりがなく、どんなに儉約な暮しでもできることなど簡単に記してあり、終りに「手紙の遣り取りなどすると心がぐらつくから当分は便りをしない。そちらからも呉れるな」ということが書いてあった。おせんは飽

きるまで読み返した。もちろん、仮名ばかりだし、云いたいことの半分も表わせない、もどかしさの感じられる筆つきだったが、読むうちに異郷の空の寒ざむとした色がみえ、暗い街筋や橋や、乾いた風の吹きわたる埃ほこりだ立った道などが眼にうかんだ、そしてそういう風景のなかで、知り人もなく友もない彼が、たったひとり道具箱を肩にして道をゆき、どこかの暗い部屋の中でひっそりと冷たい食事をする、そういう姿が哀かなしい歌かなにかのように想像されるのであった。

自分では意識しなかったが、その手紙のおせんに与えた印象は決定的だった、突込んで云えばおせんは顔つきまで変った、庄吉を思うそれまでの感情は、十七になった少女のものでしかなかつ

た、現実と夢とのけじめさえ定かならぬ、ほのかな憧憬あこがれに似てあまやかなものだった。然しその手紙を読み遠い見知らぬ土地と、そこでひたむきに稼いでいる彼の姿を想いやつたとき、おせんのご感情は情熱のかたちをとりだした、十七歳という年齢はもはや成長して達した頂点ではなく、そこからおんなに繋がる始点といふべきものとなつたのである。

或る日の午後、杉田屋から源六を呼びに使いが来た、そんなことは絶えてなかつたし、用事もはつきりしないので、源六はちよつとゆき渋つたが、追っかけ催促があつたのでやむなくでかけていった。……それは夕餉ゆうげのあとだつたが、一刻ときほどすると赤い顔をして歸つた。

「あらおよばれだったんですか」

「なにそうでもないんだが」上へあがるとき源六はふらふらした、

「……これはひどく酔った」

「たいそうあがったのね、臭いわ」

「水を貰おうかな」

「床がとつてありますから横におなりなさいな」

おせんはお祖父さんを援けて寝かしながら、老人が自分のほうを見ようとしないうちに気づいた。なんとなくおせんの眼を避けているようだった。どうしたのかしら、水を汲んでゆきながらおせんは微かに不安を感じた。

「済まないもう一杯くんな」源六は湯呑の水をたてつつづけに三杯

もあおった、「……何百ぺん云つても酔醒めの水はうまいもんだ、若いじぶんまだ酒の味を覚えはじめた頃だったが、酔醒めの水のうまさを味わうために、まだうまくもない酒を呑んだことさえあつた」

「ねえお祖父さん」と、おせんは源六の眼をみつめながら云つた、「……杉田屋さんではなにか御用でもあつたんですか」

「そうなんだ」源六はなにか思案するように、ちよつと間を置いて頷いた、それから仰向けに寝たままで、しずかにこちらへ顔を向けた、「……話というのはな、おせん、正直に云つてしまおうが、おまえを嫁に呉れということなんだ」

まあとおせんは打たれでもしたように片手で頬を押えた。源六

はそれを見て眉をしかめ、良心の苛責かしやくを受ける者のように眼を伏せた。そして重たげに身を起こし、自分で湯呑に水を注いで喉のどを鳴らしながら飲んだ。

「それで、お祖父さんは、どう返辞をなすつたの」

「おまえには済まないが断わつた」

「……………」

「本当に済まないと思う、杉田屋はあれだけの株だし、幸太はどこに一つ難のない男だ、そればかりじゃあない、杉田屋の御夫婦とおまえとは、乳呑み児のじぶんから馴染だ、おまえはきつと仕合せになるだろう、だがおれにはできなかつた、どうにも頼むと云えなかつた」源六はそこでぐったりと寢床の上に身を伏せた、

「……人間には意地というものがある。貧乏人ほどそいつが強いものだ、なぜかといえ、この世間で貧乏人を支えて呉れるのはそいつだけなんだから、おまえはなにも知らないだろうが、おまえのおつ母^かさんがまだ生きていた頃のことだ、杉田屋のおかみさんが来て、枕もとへ坐つて、おまえを養女に貰いたいと云いだした、そのときお蝶さんはこういうことを云つたそう、茂七さんはあんな性質だから、これからさき当てもたいてい知れたものだ、そのうえおまえさんはその病身で、いづどんなことがあるかもわからない、杉田屋へ貰えば着たいものを着せ、喰べたい物を喰べ、観たいものを観せて気楽に育てられる、わが子を仕合せにしたいというのが親の情なら、きつとよろこんでおせんちゃんを養女に

呉れる筈だ」

源六はそこまで云つてふと言葉を切つた。灰色の薄くなつた髪
のほつれたのが、行燈の光をうけてきらきらと顫ふるえている、苦し
かつた六十七年の風霜を刻みつけたような皺しわの多い日に焦やけた澁
色の顔は、そのときの回想の辛さに歪ゆがんだ。

「杉田屋のおかみさんに悪気はなかつたろう、けれども聞くほう
にはずいぶん辛い言葉だつた、というのは、……おまえのおつ母
さんという人は、初め杉田屋の頭梁のところへ嫁にゆく筈だつた。
けれどおつ母さんは茂七が好きだつたので、いったん親たちのき
めた縁談を断わつて茂七といっしよになつた」源六はそこでほつ
と太息といきをついた、「……その頃はうちでも下したしよく職の二人くらい

は使っていた。さして余りもしないが不自由な思いをするほどでもなく、好きでいっしょになった夫婦にはまず頃合の暮しだった、やがて頭梁のそこへもお蝶さんが来て、表面は茂七と巳之さんのつきあいも元どおりになったが、根からさっぱりしたわけではなかつたようだ、そして間もなく茂七に悪い運が向いてきた、下職の一人が剃かみそり刀を使いそくなつて、酔っていたんだな、客の顔に傷をつけてしまった、然もそれがふりの客だったし、傷はかなり大きかつた。茂七はなんども町役に呼ばれたり、法外な治療代を取られたりした、くさっていたところへ、こんどは別の下職が箆た笥んすの中の物や少しばかり貯めた金を掠さらつて逃げた……おまえが生れたのはそのじぶんだつたが、もともとあまり達者でもなかつた

おまえのおつ母さんは、お産をしたあとずっと弱くなつて、月のうち半分寝たり起きたりしているようになった、客に傷をさせてから店もさびれだし、だんだん暮しが詰つていった。杉田屋のおかみさんがおまえを抱きに来はじめたのはその頃のことだった、お蝶さんは少しまえに、生れて半年足らずの女の児に死なれていて、けれどもおまえを抱いてゆき、着物や帯を買つたり、玩具や菓子を呉れたりするのは、ただお蝶さんが膝さみしいというだけのことではなかった、こつちの落ち目になつたのを憐れむあわ巳之さんの気持がはたらいていたんだ、……おまえのお父つさんやおつ母さんにとって、それがどんなに辛いことだったかわかるだろう、おつ母さんは巳之さんを断わつて茂七といっしょになつた、そう

いう因縁のある相手から、落ち目になって情をかけられるということは、わら嗤われるよりも辛い堪らないものだ、おまえを養女に呉れという相談のとき、お蝶さんの言葉を聞いておまえのおつ母さんはずいぶん、口惜しがって泣いたそうだ」

おせんは胸が詰りそうだった。茂七さんのゆくすえも知れたものだとか、おまえさんは病身でいつどうなるかわからないとか、うちへ来れば着たいものを着、喰べたい物を喰べておもしろ可笑おかしく育てられるとか、……恐らく親切から出た言葉だろう、うちとけた狎なれた気持で云ったのではあるうが、貧苦のなかで病んでいる者にとっては、然も過去にそういう因縁のある者からすると、おせんにも母や父の辛さ口惜しさがよく察しられた。

「あたしが死んだらすぐあとを貰つて下さい。そしてどうかおせんはうちで育てて下さい、杉田屋さんへは、どんなことがあつても遣らないで下さい、おつ母さんはなんどもなんどもそう念を押した、おれもそれを聞いているんだ、おせん、もうおまえも十七だ、これだけ話せば、おれが縁談を断つた気持ちもわかつて呉れるだろう」

「わかつてよお祖父さん」おせんは指ゆびさき尖で眼を拭きながら頷いた、「……そんな話を聞かなくなつたつて、あたし杉田屋へお嫁になんかいかないわ、だつて」

「ああわかつて呉ればいいんだ、金があつて好き勝手な暮しができたとしても、それで仕合せとはきまらないものだ、人間はど

つちにしても苦勞するようにはできているんだから」

四

いろいろなことがわかった。母親が死んだあと、父やお祖父さんが杉田屋へやりたがらなくなつたこと、あんなに親しくしていたのに、杉田屋の小父さんは決してうちへ来なかつたこと、そして父が亡くなるとすぐお祖父さんが店をたたんでこつちへ移転したことなど……これらのなかでいちばんおせんの胸にこたえたのは、「……どんなことがあつてもおせんを杉田屋へ遣らないように」という母親の言葉だった。お祖父さんはそれを貧しい者の意

地だと云つたが、おせんはそうは考えなかつた、杉田屋はおつ母さんが嫁に望まれたのを断つた家だ、自分の選ばなかつた人に自分の娘を託すことができるだろうか、意地ではなかつた、もつと純粋な女の誇りだつたというべきである、おせんには母親の氣持が手でさぐるようにわかるのだつた。

「お父つさんもおつ母さんもずいぶん苦勞したようだ、贅ぜいたく沢などということはいちどもできなかつたかも知れない、でもお互いに好きあつていっしょになつたのも、貧乏も苦勞もきつと仕がいがあつたに違いない、お祖父さんの云うとおりもし人間が苦勞するように生れついたものなら、ほんとうに心から好き同志がいっしょになつて、互いに、慰めたり励ましたりしながら、つつ

ましく生きてゆける仕合せに越したものはない、おつ母さんが亡くなつて四年目にお父つきさんも死んだ、そんなにも好き合つていたんだから、お二人ともきつと満足していらつしやるに違いないわ」

おせんはそれを疑わなかつた、なぜなら、彼女もいま人から愛され、自分もその人を愛していたからである。

外へ出るときには、おせんはきまつて柳河岸を通つた。柳はすつかり裸になり、川水は研いだような光を湛えて、河岸の道にいつも風が吹きわたつていた。おせんはいつとき柳の樹のそばに佇む、それはいつか庄吉が肩を凭せていたあの柳である、すでに何年か昔のようにも思えるし、つい昨日のことのようでもあつた、

蒼ざめた庄吉の顔がたそがれの光のなかで顫え、つきつめた烈しいまなざしでこつちを見ていた。激してくる情をじつと抑えながら、あたりを憚はばかるように囁いた言葉の数かず、……庄さん、とおせんは幾たびも口のうちで呼びかけるのだった、あたしたちもお父っさんやお母さんのようにきつといっしょになって、二人でどんな苦勞にも耐えてゆきましようね、おせんは待っていてよ、庄さんの帰って来るまでは、どんなことがあつてもきつと待っていてよ。

寒さの厳しい年だった。師走しわすにはいると昼のうちでも流し元の凍っていることが多く、うっかり野菜などしまい忘れると、ひと晩でばりばりに凍ることが度たびだった。……杉田屋の幸太がし

げしげ店へ来はじめたのは、その頃からのことだ、年が詰つてきたのでほかの職人たちは姿をみせなかつたが、幸太はなにか口実をみつけては訪ねて来た。源六はべつに愛相も云わないし冷淡にあしらうこともなく、求められれば氣持よくいつものとおり昔ばなしをした。

「そういう風にまつすぐに生きられればいいな」幸太は話を聞きながらよくそう云つた、性質のはつきり現われている線の勁つよい彼の顔が、そんなときふと思ひ沈むように見えることがあつた。

「……この頃の職人はなつちやあいないよ、爺さん、一日に三匁さかめとする職人が逆目に鉋かんをかけて恥かずかしいとも思わない、ひどいことになるのこと尺を当てる手間を惜しんで押おつ付けて鋸のこを使うんだ、そ

のうえ云いぐさが、そんなくそまじめな仕事をしていたら口が干上ってしまふぜ、こうなんだ」

「それは今にはじまったことじゃあないのさ」と源六は穏やかに笑う、「……どんなに結構な御治世だって、良い仕事をする人間はそうたくさんいるもんじゃあない、たいていはいま幸さんの云ったような者ばかりなんだ、それで済んでゆくんだからな、けれどもどこかにほんとうに良い仕事をする人間はいるんだ、いつの世にも、どこかにそういう人間がいて、見えないところで、世の中の楔くさびになつてゐる、それでいいんだよ、たとえば三十年ばかりまえのことだったか……」

こうしてまた昔語りが始まるのだった。

幸太が来ているとき、おせんはなるべく店へ出ないようにした。偶たまに顔が合うと、幸太はきまつて眼で笑いかけた。粗暴な向う気の強い彼には珍しく、おとなしいというよりはなにか乞い求めるような表情だった。あの人はなにか考えているのだらう、お祖父さんがはつきり断わったというのに、まだあたしのことをなんとか思っているのかしら、……おせんは彼のそういう眼つきが不愉快で、いつもすげなく顔をそむけ、さっさと台所のほうへ去つて来るのだが、幸太はそれで気を悪くするようすもなく、殆んど三日にあげずやつて来ては話しこんでいった。

おせんはその前の年の春から、午ひるまえだけお針の稽古にかよつていた。そこは大通りを越した福井町ふくいちやうの裏にあり、お師匠さん

はよねという五十あまりの後家で、教えるのは嫁入り前の娘にか
ぎられていた。おせんは無口でもあり、家も貧しかったから、そ
こではかくべつ親しくする者もなかった。出入りの挨拶をするほ
かは世間ばなしにも加わらず、たいてい隅のほうに独りで坐つて
いた。娘たちもしいて馴染もうとはしなかつたが、そのなかで天^て
んのうちよう王の町のほうから来るおもんという娘だけは、しきりにおせん
に近づきたがつた。家は油屋だそうで、年は同じ十七だった、丸
顔の色は黒かったが、眼と唇のいつも笑っているような、明るい
人なつっこい性質である。……その月の半ばも過ぎた或る日、稽
古をしまつて帰ろうとすると、おもんが追つて来てそこまでいつ
しよにゆこうと云つた。

「だって道がまるで違うじゃないの」

「いいのよまわり道をするから」おもんは肩をすり寄せるようにした、「……ちよつとあんたに話があるの」

おせんは身を離すようにして相手を見た、おもんはなにか気がかりなことでもあるように、じつとこちらを見かえしながら「あんた杉田屋の幸太さんという人を知っていて」と云いだした。おせんは思いがけない人の名が出たので、なにを云われるかとちよつと不安になった。

「知っていてよ、それがどうかしたの」

「あんたがその人のお嫁さんになるのだって、みんながその噂うわさばかりしているのだけれど」

「嘘だわそんなこと」おせんは相手がびつくりするような強い調子で云つた、「……誰が云つたか知らないけれどそんなこと嘘よ、根も葉もないことだわおもんちゃん」

「でも幸太さんという人は毎日あんたの家へ入り浸りになつてい
るといふのよ、そしてもつとひどいことを……あたしの口では云
えないようなことさえ噂になつていてよ」

「いったい誰が」おせんはからだが震えてきた、「……そんなひ
どいことを、いったい誰が云いだしたの」

「元は知らないけど、あんたの家の前にいる人が見ていたつてい
うことだわ、でも嘘だわねえおせんちゃん、あたしはそんなこと
嘘だと思つたわ、おせんちゃんに限つてそんなことがある筈はな

いんですもの、あたしだけは信じていてよ」

飛脚屋の者から出た噂だ、おせんはすぐにそう思った。山崎屋の主婦はおしゃべりで、いつも店先には近所のおかみさんや暇な男たちが集まる、お祖父さんがそれを嫌ってつきあわないため、常づねずいぶん意地の悪いことをされていた、その店からは斜はすかにこちらが見えるので、幸太が話しに来るのをいつも見ていたのに違いない。そしてもしかすると、杉田屋から縁談のあったことも知っているのかもしれない。……おもんに別れて家へ帰ると、彼女はすぐお祖父さんにその話をした。そしてこれからも幸太の来ないようにはつきり断わって貰いたいとのんだ。

「人の口に戸は立てられないというのはつまりこういうことなの

さ」源六は研いでいた剃刀の刃を、おやゆび 拇指の腹で当つてみながら
そう云つた、「……どんなに身を慎んでも、悪口の立つときは立
つものだ、幸さんが来なくなれば来なくなったでまた悪口の種に
なる、そんなことは気にしないでうっちゃつとくがいいんだ、一
年も経てばしぜんとわかつてくるよ」

「おじいさんはそれでいいだろうけれど、あたしそんな噂をされ
るのは厭いやよ」いつにも似ずおせんは烈しくかぶりを振つた、「……
：ほかの悪口とは違うんですもの、こんなことが弘まったらあた
し恥はずかしくつて外へも出られやあしないわ」

「いいよいいよ、そんなに厭ならそのうち折をみて断わるよ、い
きなり来るなども云えないからな、まあもう少し眼をつぶつてい

な」

然しそれから数日して、赤穂浪士の吉良家討入という出来事が起こり、どこもかしこもその評判でもちきつたまま年が暮れた。

正月には度たび杉田屋から迎えがあつた。けれど縁談を断つたあとでもあり、これからのこともあるので、源六もおせんもゆかずにいると、四日の夕方になつて幸太が松造まつぞうという職人といつしよに、酒肴さけかなの遣い物を届けに来た。義理にもそのままは帰せなかつた、上へあげて膳ぜんごしら拵えをすると、もう少し呑んでいるらしい幸太は、源六と差向いになつて盃を取つた。ほかの日ではないので、おせんも爛徳利かんどくりを持つて膳のそばに坐り、浮かない気持で二人に酌をした。……幸太はしきりに思い出ばなしをした、

杉田屋へはじめて住込んだ頃から、十五六じぶんまでのことを、おせんなどすっかり忘れていて、云われてびつくりするようなくとも多かつた。このあいだにかなり盃を重ねて酔つたのだろう、源六はふと調子を改めてこう云いだした。

「なあ幸さん、こんな時に云いだすことじゃあないが、いつか頭梁からおせんのことについて話があつたとき、わけを云つて断わつたのはおまえさんもたぶん知つているだろう、無いまえならいいが、あんなことがあつたあとではお互いに気まずくつていけない、済まないがこれからはあまり来て呉れないようにたのみたいんだがな」

「悲しいことを聞くなあ」幸太も酔つていたらしいが、ぎくつと

したようすで坐り直した、「……断わられたのは知っているよ、まだおせんちゃんが若すぎるといふこと、爺さんがおせんちゃんにかかる積りだからといふこと、ああたしかに聞いているよ、けれども、それは、……それは、それとこれとは違うんだ」

「どう違うと云うんだね」

「おれは十三で杉田屋へ来た、おせんちゃんとはそのときからの馴染なんだ、爺さんとだつて、今さらのつきあいじゃあない、なにも縁談が纏まとまらなかつたからつて、つきあいまで断わるという事はないと思う、そいつは、あんまりだぜ爺さん」

「つきあいを断わるなんといふことじゃないのさ、なにしろこつちはこの老ぼれと娘だけの暮しだ、そこへ若頭梁がしげしげ来る

というのは人眼につくし、ひよんな噂でも立つと杉田屋さんへおれが申しわけがないからな」

「ひよんな噂か……」幸太はぐらつと頭を垂れた、「……そうだ噂なんか構わないとは、おれに云えることじゃあない、世間なんでもものは、平気で人を生かしも殺しもするからな、わかったよ爺さん」

「悪くとつて呉れちやあ困るぜ幸さん、おまえだつて杉田屋の名ようせき跡よを継ぐ大事なからだ、嫁でも取つて身が固まつたら、また元どおり来て貰いたいんだ、ゆくさきおせんのためにも、ちからになつて呉れるのは幸さんだからな」

「遠のくよ、爺さん」幸太は頭を垂れたまま独り言のように云つ

た、「……悪い噂なんぞ立つちやあ済まないからな」

「それでいいんだ、そこでまあ一杯いこう、おせん酒が冷えてい
るぜ」

なんとというしっこしのない幸さんだろう、おせんはこの問答を
聞いて齒痒はがゆくなつた。もつとてきぱきした男だつた。向つ氣の強
い代りにはわかりも早く、諄くどいところなどは薬ほどもない人だつ
たのに、「……どうかしているんだわ」酒の爛を直しながら、お
せんは苛いらいらしい氣持でそう呟いた。……幸太はそれから半刻あ
まりして歸つた、ひどく酔つて、草履を穿はくのに足がきまらない
くらいだつた。彼が外へ出て二三間いったとき、

「おや若頭梁じゃありませんか」という声がした、「……たい

そういいきげんで御妾しやうたく宅のお帰りですか、偶にはあやからし
て呉れてもようござんすぜ」

「聞いた風なことを云うな、誰だ」幸太の高ごえが更けた横丁に
大きく反響した、「……なんだ権二郎か、つまらねえ顔をしてこ
んなところになんだつて突つ立つてるんだ、呑みたければ呑まし
てやるからいつしよに来な」

「そうくるだろうと待ってました、ひとつ北へでもお供をしよう
じゃありませんか」

「うわごとを云うな、来いというのは大川端だ、おまえなんぞは
隅田川の水が柄相応だぜ、たつぷり呑ませてやるからついて来な」
「若頭梁は口が悪くつていけねえ」

話しごえはそのまま遠のいていった。おせんは雨戸を閉めようとしてこれだけのやりとりを聞いたが、権二郎という名とその卑しげな声とが、いつまでも耳について離れなかった。

五

酔ってしまった約束なのでどうかと思っていたが、幸太はそれから遠のきはじめ、たまに来てもちよつと立ち話をするくらいで、すぐに帰ってゆくようになった。

二月になつて赤穂浪士たちに切腹の沙汰があつた。去年からひき続いての評判が、もういちど、江戸の街まちまち巷をわきたたせ、春

の終るところまで瓦版や、絵入りの小冊子類こざっしがいろいろと出た。おせんもその二三種を買い、仮名を拾いながら読んでみたが、どれもこれも公儀を憚はばかって時代や人名を変えてあるし、まるつきり作りごとのようで、心をうつものは無かった。……こうして夏になった、六月はじめの或る日、お針の稽古を終って帰って来ると、源六が昼食ちゆうじきのしたくをして待っていた。

「きつき状がまわって来て、きょう茶屋町ちややまちの伊賀屋いがやでなかまの寄合があるというんだ、飯をたべたらちよつと行って来るからな」
「帰りはおそくなるんですか」

「ながくつたつて昏れるまでには帰れるだろう、台所に泥鰯どじょうが買ってあるから、晩飯にはあれで味噌汁を拵えておいて呉んな」

「あら泥鰻があつたんですか、それじゃあお酒も買っておきましようね」

「酒は寄合で出るだろうが」

「でも初ものだから無くっては淋しいでしょう」

話しながら食事を終ると、源六は着替えをして出ていった。久しぶりで店があいたので、おせんは一いつとき刻もかかつて掃除をし、

床板の隅ずみまで丹念に拭きあげた。それから酒を買って来て、

火をおこし、笹ごぼうがき牛蒡なべを作つて泥鰻を鍋に入れ、酒で酔わせて、

味噌汁にしかけてから、坐つて縫物を取りひろげた。……昼のう

ちは風があつて凌しのぎよかつたが、日の傾きだす頃からぱったりと

風がおち、昏れかかると共にひどく蒸しはじめた。

「お祖父さんのおそいこと」てもと手許が暗くなりだしたので、おせんはそう呟きながら縫物を片づけ、膳立てをするために立った。汁のかげんはちようどよかった、いちど下ろして、爛をする湯を掛け、漬物を出した。もう帰りそうなものだと思いなながら、足音のするたびに勝手口の簾を透かして見た、然しすっかり昏れて行燈の火をいれても源六の帰るようすはなかった、「……どうかしたのかしら、少しおそすぎるわね」すっかり支度のできた膳を前にして、おせんはふと、もの淋しい気持におそわれた。……大川端の茶店には、もう涼み客が出はじめたのであろう、時どきしゃみせ三味の線の音や、人のざわめきが遠く聞えてくる、そのものの音の遠きと賑やかさは、まるで過去からの呼びごえのように遙かはるで、夏の

宵の侘^{わび}しさをいつそう際だてるように思えた。

「そこだそこだ、その障子の立ててある家がそうだ」

とつぜん表のほうでそういう声がした。

「……いま明けるからそのまま入れよう、しずかにしずかに」

そして誰かが店の障子を明けた。おせんは不吉な予感にぎよつ

としながら立つた。入つて来たのは同じ研屋なかまの久^{きゆうぞう}造と

いう人だった。おせんの眼はその人よりも、そのうしろに四五人

の男たちが、蔽^{おお}いを掛けた戸板を担いでいるのを見た、そして思

わずあつと叫びごえをあげた。

「騒いじやあいかねえおせんちゃん」久造は両手で彼女を押える

ようにした、「……たいしたことはないんだ、ちつとばかり酒が

過ぎて立ちくらみがしたただけなんだ、もう医者にもみせたしなに
してあるんだから、心配しないでとにかく先ず寢床をとつて呉ん
な」

おせんは返辞もできず、なかば、夢中ですぐに寢床を敷いた。
久造が指図をして、男たちは上まで戸板を昇かっぎあげ、まるで意識
のない源六を床の上へ寝かした。……久造はその枕許へ坐つたが
おちつかぬようすで、汗を拭き拭き始終を語つた、源六は寄合の
席へ来たときから顔色が悪かった、酒が出てからもどこやら沈ん
だようすをしているので、たぶん暑氣あたに中つたのだらうから熱爛
で一杯やるがいいとすすめ、自分でもその氣になつて呑みだした。
それから少し元氣が出て、みんなと話しながらかなり呑んだが、

やがて手洗いに立とうとしていきなりどしんと倒れてしまった。

「そう巖丈なからだ軀でもないので、人間の倒れる音というものは大きなもので、階下したからもびっくりして人が駆け上って来たくらいだ、みんなで呼び起こしたが、大きないびき軀をかくばかりで返辞がない、とにかく頭を冷やしながら医者に来て貰った」久造はそこでまた忙しげに汗を拭いた、「……医者はいろいろ診たが、ごく軽い卒中だから案ずることはない、じつとして静かに寝ていればすぐ治るだろう、こう云って薬を置いて帰った、そういうわけなんだから決して心配することはない、わかったなおせんちゃん、決してよけいな心配はしなさんなよ」

おせんは乾いてくる唇を舐め舐め、黙って頷きながら聞いている。

た。そして彼らが薬を置いて去るときも、

「色いろおせわさまでした」

と云うだけが精いっぱいだった。……源六は微かすかに軒をかきながら眠っていた、そつとして置くようにと云われたので、呼び起こしたいのをがまんしながら、おせんはじつと枕許に坐っていた。ほんとうに病気は軽いのだろうか、もしやこのままになつてしまふのではなからうか、たとえ死ななくても、卒中といえは寝たきりになることが多いという、そんなことになつたらどうしよう、どうして暮していったらいいだろうか。幾たび考えても同じことを、おせんは繰り返し考え続けるのだった。然しやがて食事をしているに気がつき、朝まで寝られないのだからと、しずかに

立って膳に向つてみた。もちろん喰べられはしなかった。鍋の蓋をとつて、泥鱒汁を掬すくおうとすると、昼間の元気なお祖父さんの姿が思いだされ、胸がいつぱいになってとうとう泣きだしてしまつた。

明くる日は朝から見舞い客が来た。食事拵えや茶の接待は近所の人びとがして呉れた、そのなかでも、すぐ裏にいる魚屋のおらくという女房がいちばん手まめで、まるで自分の家のことのように気をいれて働いて呉れた。夜どおし寝なかつたおせんは、午すぎになるとさすがに疲れが出た、みんなもすすめるし自分でも堪らなくなつたので、隅のほうへ夜具を敷いて横になつたが、すぐに熟睡して眼がさめたときはもう昏れかけていた。

「眼がおさめかい」膳拵えをしていたおらくが、立ちながらそう云った、「……つい今しがたおもんさんという娘が見舞いに来て呉れたけれど、あんまりよく眠っておいでだから帰って貰いましたよ」

「おもんちゃんが、どこで聞いたのかしら」

「また明日来ますとき、それから晩の支度はここにできているからね、お湯もすぐ沸くからおあがんなさいよ、あたしはちよつと家のほうを片づけて来ますからね」

そう云っておらくは帰っていった。

空腹ではあったが食欲はなかった、ほんのまねごとのように箸はしを取っただけで、あと片づけをしていると杉田屋からお蝶が来た。

こつちへ越して来てから数えるほどしか会っていない、ずいぶん
久しぶりだったし、こころ淋しいときだったので、とびついてゆ
きたいほど懐かしかった。けれども、すぐにお祖父さんから聞い
た話を思いだし、つとめてあたりまえなさりげない挨拶をした。
お蝶のほうでも縁談のことなどが胸に問つかえているのだろう、昔ほ
どには親しいようすをみせず、ほんの暫くいたきりで、見舞いの
包を置いて帰った。……おらくは夕食を済ませてもういちど来た
が、客もなし用事もみつからないので、茶を一杯すすると間もな
く去り、おせんはようやく一人になった。

源六の容態は少しも変らなかつた。意識がないので薬の飲ませ
ようもなくただ濡れ手拭で頭を冷やすほかにはなにも手当のしよ

うがなかった。午後から熟睡したので、幾らか気持はおちついてきたが、一人になつて、昏々こんこんと眠つてお祖父さんの顔を見ていると、かなしさ心ぼそさが犇ひしひしと胸をしめつけ、身もだえをしたほど息苦しくなつた。

「庄さん」おせんは小さな声で、西の方を見やりながらそう囁いた、「……あなたはなんにも知らないのね、なんにも、あたしどうしたらいいの、お医者にもかからなければならぬし、薬も買わなければならぬし、これからどうして生きていったらいいのかしら、庄さん、おまえが今ここにいてお呉れだったらねえ」

庄吉はあのように自分を想つていて呉れた。近いところには、だらずぐ駆けつけて、どんなにもちからになつて呉れるだろう、だ

が大阪では知らせてやることもできず、知らせたところに来て貰うわけにもいかない。おせんにはそれが、自分の運命を暗示するもののように感じられた。自分がふしあわせな生れつきで、これからもだんだん不幸になり、いつも泣いたり苦しんだりしながら、寂しいはかない一生をおくるのだ、そういう風に思えてならなかった。……そうだ。十八になる今日まで、ほんとうに楽しいと思うことが一度でもあつたらうか、いつもしんと病床に寝ていた母、むつつりとふきげんな眼をして溜息ばかりついていた父、客の少ない、がらんとした埃っぽい店、張もなく明日への希望もなく、ただその日その日の窮乏に追われていた生活、父母に死なれて中通りへ移つて来てからも、祖父と二人の暮しは苦しかった、同い

年のよその娘たちが、人形あそびや毬まりつきに興じているとき、おせんは米を洗い釜戸の火を焚いた、朝早くまだ暗いうちに豆腐屋へ走り、雨に濡れながら、研ぎ物を届けにいった。幼いころ杉田屋でして貰ったきり、着物や帯はもちろんかんざしとつ新しく買ったことはない、然もそんなことを考えるいとまもないほど、時間のないつましい生活を続けて来たのだ。もちろんそのことをそれほど辛いか苦しいとか考えていたわけではない、そういう日々のなかにも、それはそれなりに楽しみも歎びもあつた。人はたいていな環境に順応するものだから、……然しいまふり返つて思いなおすと、それがどんなに慰めのない困難な暗いものだったかということがわかるのであつた、そして幾ら思いさぐつてみても、

そこには将来に希望をつなぐことのできる一つの萌芽ほうがさえみつけることはできない、なにかもが不幸と悲しみを予告するように思えるのだった。

「庄さん、あんただけがたのみよ」おせんはとり纏るような気持でそう呟いた、「……どうしていいかまだわからないけれど、でもあんたが帰るまでは、どんなにしてもやってゆくわ、だからあんたも忘れないでね、きつとここへ帰って来てね、庄さん」

六

源六はその翌日ようやく意識をとり戻した。四日めには口もき

くようになつたが、舌がもつれて言葉がよくわからなかつた、眼から絶えず涙がながれ、よだれ涎ですぐ枕が濡れた。医者はたいしたことはないと繰り返していたが、左の半身が殆んど動かせないし、頭のはたらきも鈍っていた。涙や涎は病氣のためだろうが、そればかりではなく、源六はおせんを見るとすぐに泣いた、そして舌の硬ばつたひどくもつれる言葉でしきりになにか云おうとする、はじめはなにを云うのかわからなかつたが、よく気をつけて聞くとおせんを哀れがっているのだつた。

「かわい可哀そうにな、おせん可哀そうにな」

「わかつたわお祖父さん」と、おせんは、祖父に笑つてみせた、
「……でも大丈夫よ、お祖父さんはすぐ治るの、いつもお医者さ

まがそう云うのを聞いているでしょう、そんなに心配することはないわ、これまで休みなしに働いてきたんですもの、湯治でもしている積りでのんきに寝ていらっしやるがいいわ、あたしちつとも可哀そうでなんかないんだから」

「ああ、おれにはわかつてるんだ」聞きとりにくい言葉つきで源六はこう云った、「……おせん、おれにはわかつてるんだよ、すっかり眼に見えるようなんだ、可哀そうにな」

云わないで、お祖父さん、おせんはそう叫びたかった、抱きついていっしょにこえかぎり泣きたかった、そうすることができたら幾らか胸が軽くなるだろうに、……けれども泣いてはいけなかった、そんなことをしたら、お祖父さんは氣落ちがしてしまって、

病氣も悪くなるに違いないから。おせんは笑ってみせなければならぬ、心配そうな顔をしていけなかつたのだ。

見舞いに来る客も、段だん少なくなり、魚屋の女房のほかは、近所の人たちもあまり顔を見せなくなつた。或る日の午さがり、おらくが来て「きようは桃の湯がたつたからはいつておいでな」とすすめた、いつかもう土用になつていたのだ、暫く風呂へゆかないで、からだに汗臭かつたし、できたら髪も洗いたかつたので、おらくにあとを頼んでおせんは風呂へいつた。……六月土用の桃葉の湯は、端午の菖蒲湯しやうぶゆ、冬至の柚子湯ゆずゆとともに待たれているものなので、とうてい髪を洗うことなどはできなかつたが、汗をながして出ると身が軽くなつたようにさばさばとした。

「ただいま、おばさん有難う」

そう云いながら勝手口からはいった、返辞がないので、風呂道具を片づけて覗いてみると、おらくの姿はみえず、源六の枕許には幸太が坐っていた。おせんはどきつとして、立止った。幸太はしずかにふり返った。

「近所の人の家から迎えが来てさつき帰っていったよ」彼はなんとなく冷やかな調子でそう云った、「……留守を頼まれたものだからね」

「済みません、有難うございました」

「もつと早く来る積りだったんだが、手放せない仕事があったもんでね……たいへんだったな、おせんちゃん」

「ええあんまり思いがけなくって」

「でもまあお爺さんのほうはもうたいしたことはないようだから、そいつはさほど心配しなくてもいいだろうけれど、このままじゃあおせんちゃんが堪らないな、なんとか考えなくっちゃあいけないと思うんだが」

「いいえあたしは大丈夫ですよ」おせんは煎せんじ薬のかげんをみながら、かなりきつぱりした口ぶりで云った、「……お祖父さんだつてそんなに手が掛るわけじゃあないし、近所の人たちが、よくみに来て呉れるのですもの、ちつともたいへんでなんかありやあしません」

「それも十日や二十日はいいだろうがね」

幸太はもつとなにか云いたそうだったが、おせんのようにすがあまりきつぱりしているので口を噤み、間もなく見舞いの物を置いて帰っていった。……それをきつかけのように幸太はまたしばしば来はじめた、「中風によく利く薬があつたから」とか「少しばかりだがこれを喰べさせてやって呉れ」とか云いながら、そして源六に薬を飲ませたり、額の濡れ手拭を絞りなおしたり、時には足をさすったりした。

「なにか不自由なものがあつたら、遠慮なくそう云つて呉んな」幸太は帰りがけにきまつてこう云つた、「……困るときはお互いさまだ、おれにできることならよろこんでさせて貰うからな、ほんとうに遠慮はいらないんだぜ」

「ええ有難う」

おせんはそう答えるが、伏し眼になつた姿勢はそういう好意を受ける気持のないことをかたくな頑なほど表明していた。……そうなのだ、幸太の言葉を聞きながら、おせんは心のうちで庄吉に呼びかけていた。おれがいなくなればきつと幸太は云い寄るだろう、あれもおまえを思っているんだから、そう云い遺していったことが改めて思ひだされた、縁談を断わられてももう来て呉れるなど云われども、こうしてがまん強くやって来るのはあたりまえの好意ではない。そしてなに事もないときならいいが、こういうせつぱ詰つた苦しい場合に、そのように根づよい態度で迫られては、どんな隙へどのようにつけ込まれるかわからない。操を守ろうとするお

んなの本能が、そのときはじめておせんをちからづよく立直らせた。

——そうだ、幸太さんに限らず誰の世話にもなつてはいけない、近所の洗濯や使い走りをして、お祖父さんと二人くらいはやつてゆける筈だ、世間にためしのないことではないのだから。

そう決心するときはさばした気持になった。そしてそのつぎに幸太が来たとき、はつきりとけじめをつけた口ぶりで、これからもう来て貰つては困ると云つた。それは雨もよいの宵のことで、湿気のある風が軒の風鈴を鳴らし、戸口に垂れてある簾すだれを揺すつて、部屋の中まで吹き入ってきた、源六はこちよさそうに眠つていた。

「そんなにおれが嫌いなのか」幸太は暫く、黙っていたのち、なにか挑みかかるような眼でこつちを見た、「……おれのどこがそんなに気に入らないんだ、おれはおためごかしや恩に衣きせる積りでよけいなおせっかいをするんじゃないぜ、おまえとも爺さんとも幼な馴染だ、ことにおまえとはこんなじぶんから知り合つて、おれにとつては……まったく、他人のような気持はしないんだ、そうでなくつたつて、こんな場合には助け合うのが人情じゃあないか、どうしてそれがいけないんだ、おせんちゃん」

「よくわかつているわ、でも幸さん、あんた覚えていないかしら、お正月あんたが家へ来て帰るとき、表で山崎屋の権二郎さんに会つたでしょう」

「山崎屋の権に、……そうだったかも知れない、だがもうよく覚えていないよ」

「あたしは覚えているわ、そして、一生忘れられないと思うの」
おせんはこみあげてくる怒りを押えながらそう云った、「……あのとき権二郎さんは、あんたの顔を見てこう云つてよ、わかとうりよ若頭梁ういまごろ妾宅のお帰りですかつて」

「冗談じゃあない、あんな酔っぱらいの寝言を、そんなまじめに聞く者があるものか」

「それならよそれでも聞いてごらんなさい、世間にはもつとひどいことさえ伝わっているのよ、あんたは男だから、そんな噂もみえの一つかも知れないけれど、おんなのあたしには一生のきず瑾ぎんにもな

りかねないことよ」

「おれはなんにも知らなかった」幸太は頭を垂れ、またながいと黙っていた、それからこんどはまるで精のぬけたような声で、
吃り吃りどもこう続けた、「……そんな噂は、まったく聞いたこともない。そして、それがおせんちゃんには、そんなに迷惑だったんだな」

「考えてみて頂戴、これまでもそうだったけれど、こんなになつたお祖父さんを抱えてやってゆくとすれば、これからはよつぽど身を慎まないかぎり、どんな情けないことを云われるかわからないじゃないの」

「そいつをきれいにする方法はあるんだ、おせんちゃん、おまえ

さえその気になって呉れれば」

「それはもうはつきりしている筈だわ」

「おれが改めて、おれの口から、たのむと云つても、だめだろうか」幸太の眼は忿^{いか}りを帯びたように鋭く光つた、「……おれは本気なんだ。口がへただからうまく云えないが、もしおせんちゃん
が望むなら、おれはこれからどんなにでも」

「あたしにこれ以上いやなことを云わせないで、幸さん、それだけがお願いよ、どうぞおせんを、可哀そうだと思つて頂戴」

「おまえを可哀そうだと思えつて」とつぜんまったくとつぜん幸太は蒼^{あお}くなつた。そして、ふしぎなものでも見るように、まじまじとおせん顔をみつめていたが、やがて慄^{りっせん}然としたように身

を震わせた、「……おせんちゃん、おまえもう誰か、誰かほかに、
——ああそうだったのか」

おせんは頷いた、自分でもびっくりするほどの勇気を以て、し
ずかに、むしろ誇りかに頷いた、そして立って行って、二つの紙
包を持って来て、幸太の前へさしだした。それはお蝶と幸太の持
つて来た見舞いの金である。菓子や薬はとにかく、金に手をつけ
てはいけないと思い、そのまま納って置いたものだった。

「ほかの物はうれしく頂きました、でもお金だけは頂けませんか
ら、おばさんにもどうぞ気を悪くなさらないようにと云って下さ
いな」

「……あばよ」幸太は二つの包を持って立った、「あばよ、おせ

んちゃん」

そして出ていった。

明くる日、おせんは裏の魚屋の女房に来て貰って、これからなにをしていったらいいかということ相談した。おらくは笑って、だつてあんたには、杉田屋という後ろ盾がついているじゃあないか、なにもそんな心配をしなくつたつて困るようなことはありやしないよ、と云つた。もちろん悪気などは少しもない女で、ごく単純にそう信じていたものらしい、おせんがあらまし事情を話すとすぐ納得した。

「そうだったのかい、あたしはまた杉田屋さんでなにかもして呉れるんだと思つて安心してたのだよ、それじゃあなんとか考

えなくちやあいけないね」

「どんな苦勞でもするわ、おばさん、あたしよりもつと小さい子だつて、もつともつと辛い気の毒な身の上の人がいるんだもの、十八にもなつたんだから、たいていのことはやってゆけると思ふの」

「そうともさ、人間そう心をきめればずいぶんできない事もやれるものだよ、けれどもなにごととつつきも取付が肝心だから、途中でいけなかつたなんていうことになるあはちと虻蜂とらずだからね、あたしもよく考えてみて、それからもういちど相談しようよ」おらくはこう云つて、そのときは帰つていった、「……なにが野なかの一軒家じゃなし、近所だつて黙つて見ちやあいないからね、決して

心配おしでないよ」

七

おせんは足袋のこはぜかがりを始めた。お針の師匠にも話してみただが、まだ賃縫いをするには無理だというし、洗濯や使い走りでは幾らのものにもならない。結局おらくの捜してきて呉れたのがその仕事だった。その頃はまだ足袋は多く紐ひもで結んだものだったが、上方のほうで仕出したこはぜが穿はき脱ぎに手軽なものと穿いたかたちが緊まるのとでその年の春あたりから江戸でも少しずつ用いはじめていた。まだ流行するまでにはなっていないので、

仕事の数はそうたくさんはないが、手間賃がかなりよかつたし、家においてできることがなによりだつた。足袋は革と木綿と二種あつた。木綿は近年ひろまりだしたもので、穿きぐあいも値段も恰好なのだが、木綿よりは丈夫であり温かいので、一般にはまだ革を用いることが旺さかんだつた。おせんの受取る仕事も、革のほうがむつかしかつた。なにしろ熊の皮を鞣なめして、型を置いたり染めたりしたもののなので、針が通りにくく、すぐ指を傷つけたり針を折つたりする。然しそれだけ手間賃も高いから、馴れてくれば革足袋のほうが稼かせぎが多くやり甲斐がいがあつた。

七月のなかば頃から源六はぼつぼつ起きはじめた。左の半身はやっぱり不自由で、手も足も、そつちだけは満足に動かせず、舌

のもつれもなかなかとれなかった。十五日の中元には荷葉飯かようめしを炊き、刺し鯖さばを付けるのが習わしである、おせんも久しぶりに庖ほうちよう丁ていを持って鯖を作り、膳には酒をつけた。医者から量さえ過さなければ呑むほうがよいと云われていたのだが、源六は要心ぶかくなつて、それまで盃を手にしなかつたのである。

「久しいもんだが、はらわたへしみとおるようだ」源六はうつとりと眼を細くしながら云つた、「……ほんとうに毒でなければ、これから少しずつやってみるかな、なんだか身内にぐつと精がつくようだ」

「お医者さまがそう云うんですもの、それはあがるほうがよくつてよ」

「だがなにしろこんなからだで酒を呑むなんぞは、それこそ罰が当るといふもんだからな、みんなおまえの苦勞になるんだから」

「いやだわ、また同じことを」

「おまえに礼を云うんじやあない、自分が仕合せだということ云いたいんだ、子にかかる親はざらにあるが、こうして孫にかかれる者は世間にもそうたくさん有るわけじやあない、然もまだ十八やそこらの娘になにもかもおつかぶせて、こうして氣樂に養生ができるということはたいへんなもんなんだ、まったくたいへんなもんなんだ、おれは、そいつが嬉しいんだ」病氣からなみだ脆くなつていた源六は、もうぽろぽろと大きな涙をこぼしていた、

「……おれはおまえになんにもしてやらなかつた。十三や十四か

ら飯を炊かせたり肴を作らせたり、使い走りをさせたりしただけだ、帯ひと筋、いや簪一本買ってやったことがなかった、ところがおまえはむすめの手内職で、おれを医者にもかけ薬も買って呉れる、おれが好きだと思ふ物は、そう云わなくとも膳へのつけて呉れる、諄いようだが礼を云うんじやあないぜ、おれは、来年はもう六十九だ、この年になつて、はじめておれはおんなどいうものがわかつた、おまえのして呉れることを見て、はじめておんなの有難さというものがわかつたんだ、男のおれにできないことを、まだ十八のおまえがりっぱにやってのける、それはおまえがおんなだからだ、ああおせん、おれはこれが四十年むかしにわかつていたらと思うよ」

四十年むかしといえばまだ生きていたお祖母さんのことを云うのではなからうか、おせんはお祖母さんのことはなに一つ聞いていない。父も母もそのことはいづいぞ口にしなかつた。そこにはなにか事情があつたに違いない、そして今源六は悔恨にうたれてゐる、どんな事情かわからないけれど、おんなというものの有難さをその頃に知っていたら、そう云う言葉の中うちには、なにかとり返し難い後悔の思いが感じられるのだった。

「人間は調子のいいときは、自分のことしか考えないものだ」源六は涙をながれるままにしてそう続けた、「……自分に不運がまわつてきて、人にも世間にも捨てられ、その日その日の苦勞をするようになる、はじめて他人のことも考え、見るもの聞くもの

が身にしみるようになる、だがもうどうしようもない、花は散つてしまったし、水は流れていつてしまったんだ、なに一つとり返しはつきあしない、ばかなもんだ、ほんとうに人間なんてばかなものだ」

「もうたくさんよお祖父さん、そんなに気を疲らせては病気に悪いわ、過ぎたことは過ぎたことじゃないの、それよりこれから先のことを考えましょう、あせらずゆっくり養生すれば、お祖父さんだつてまた仕事ができるようになってよ、二人で稼げば暮らだつて楽になるし、ときにはいつしよに見物あるきだつてできるわ、今年はずれずに染井そめいの菊を見にいきましょうよ」

「ああそうしよう、おせん、見せる見せるといつて、ずいぶん前

から約束ばかりしていたからな、そうだ今年こそきつと見にいこう」

けれども菊見にはゆけなかった。悪くはならないが、左半身がいつまでもはつきりせず、とうてい遠あるきなどできなかつたら、……利くという薬はできる限り試してみた、加持も祈^{きとう}祷もして貰った、「夏に出た中風は霜がくれば治るものだ」そう云う人が多いので、おせんも源六もひそかにそれを楽しみにしていたが、霜月がきてもそんなようすはなく、やがて十一月も終りに近くなつた。

その月は二十二日の夜にひどい地震があつて、小田原から房州へかけてかなり被害があり、江戸でも家や土蔵が倒れたり崖^{がけ}が崩

れたりした。深川の三十三間堂が倒壊し、大川は一夜に四たびも潮がさしひきした。地震は二十五日まで繰り返し揺つたが、二十六日に雨が降つてようやく歇むと、安房や上総では津浪があつて十万人死んだとか、小田原がいちばん激震で何千人いっぺんに潰されたとか、色いろ恐ろしい噂が次から次へとひろまりだした。

……こうして二十九日になつた夜、四五日つめてした仕事がよく片付いたので、おせんは珍しく宵のうちに寢床へはいつた。地震の恐ろしさが解けたのと、仕事の疲れが出たのであろう、床にはいるとすぐ、なにも知らずにぐつすり熟睡した。あんまりよく眠つたせいだろう、それほど更けたとも思えない頃にふと眼がさめた。そして眼のさめたときの習慣で、お祖父さんのほうへふ

り向いた。するとそこには枕紙が白く浮いて見えるだけで、夜具の中にはお祖父さんがいなかった。

おせんは身を起こした、たぶん後架だろうと考え、そちらへ耳を澄ましていると、戸外のひどい風の音に気がついた、いつ吹きはじめたものかひじょうな烈風で、露次ぐちにある棗なつめの枯枝ひさしや庇ひさしさがひようひようとうめき、地震でゆるんだ雨戸や障子はもちろん、柱や梁はりまでがみじめなほどきいきいと悲鳴をあげていた。そのうちにおせんは、店のほうに灯あかりが揺れているのに気づいた、なぜともなくどきつとして、寝衣ねまきの衿えりをかき合せながら立つていってみると、被おおいをかけた行燈のそばに、源六が前まえ躰かかみにかかなって、しきりになにかしていた。火桶ひおけもなし、隙間から吹きこ

んで来る風で、板敷の店は凍るほど寒いに違いない。驚かしてはいけないと医者にきびしく注意されているので、おせんは、そつと近よつていった。……源六は庖丁を研いでいた。不自由なからだでどうしたものか、研ぎ台も水みづ 盥みづたらひ もちやんと揃そろえてあつた。蒲がまで編んだ敷物にきちんと坐つて、きわめてたどたどしい手つきで庖丁を研いでいる。然しそれはひじような努力を要するのだから。鬢びんから頬にかけて汗が幾すじも条すじを描いていた。

治りたいのだ、薬も祈祷しるしも験がない、だがどうかして治りたい一心から、せめて仕事で馴らしたらと考えたのではなからうか、それともあまりながびくのが不安で自分をためすために砥石に向つてみたのだろうか、どちらにしてもこの寒夜に独り起きて汗を

ながしなからひつそりと研ぎものをしている、そのたどたどしい、けれどけんめいな姿は、哀れともいたましいとも云いようがなく、おせんは堪りかねてお祖父さんと叫び、その腕へとりついたまま泣きだしてしまった。

「泣くことはないじゃないかおせん」源六は穏やかに笑いながら孫の背へ手をやった、「……風が耳について、眠れないから、ちよつといたずらをしてみただけだよ」

「わかつてるわお祖父さん、でもあせつちやあだめよ、ずいぶん焦れ^じつたいと思うわ、辛いこともよくわかるわ、でもこの病氣はあせるのがいちばん悪いの、がまんして頂戴お祖父さん、もう少しの辛抱だわ」

「そういうことじゃないんだ、おれは決してあせつたり焦れたりしやあししない、ただどうにも、どうにも砥石がいじりたくつてしようがなかった、ろくといし鹿礪石のざらりとした肌理きめ、真礪ま、青砥あおとのなめらかな当り、刃物と石の互いに吸いつくようなしつとりした味が、なんだかもう思いだせなくなったようで、心ぼそくつてしようがなかったんだ」

「よくわかってよお祖父さん」おせんはそこにあつた手拭で源六の濡れた手を拭いてやった、「……でもがまんしてね、これまで辛抱してきたんですもの、もう少しだから、なんにも考えないでのんきに養生をしましょう、もうすぐよくなるわ、来年はとしまわりがいいんだから、なにもかもきつとよくなつてよ、ほんとう

にもう少しの辛抱よ、お祖父さん」

「ああそうするよ、おせん、おまえに心配させちやあ済まないかならな」

さあ寝ましようと言つて、おせんが援け起こそうとしたとき、源六はふと顔をあげて、

「半鐘が鳴っているんじやあないか」

と云つた。おせんも耳を傾けた。たしかに、暴^{あら}あらしく吹きたける風に乗つて、微かに遠く半鐘の音が聞えている。然もそれが三つばんだつた。

「近いようじやないか」

「ちよつと出て見るわ」

おせんはひき返して、着物を上からはおり、雨戸を明けて覗いてみた、凜寒りんかんと冴えわたった星空のあなたに、かなり近く赤あかと火がみえた。おそらく本郷台ほんごうだいであろう、煙が烈風に吹き払われるのでかがり立っていないが、研ぎだしの金梨地きんなしじのようなこまかい火の粉が、条をなして駿河台するがだいのほうへ靡なびいていた、おせんは舌が硬ばり、かちかちと齒の鳴るのを止めることができなかつた。

「……大丈夫よお祖父さん、高いところだからたぶん本郷でしょう、風が東へ寄っているので、火は駿河台のほうへ向いているわ」「地震のあとで火事か、今年の暮は困る人がまたたくさん出るとだろう」源六はゆらゆらと頭を振った、「……さあ、風邪をひ

かないうちに寝るとしよう」

八

横にはなつたが眠れなかった。風はますます強くなるようすで、雨戸へばらばらと砂粒を叩きつけ、ともすると吹き外してしまい、そうになつた。そのうちに表で人の話しごえが聞えはじめた、

「下谷したやへまわるぜ」とか「ああとうとう駿河台へ飛んだ」とか

「いま焼けているのは明神様じゃあないか」などという言葉が、風にひきち切られてとぎれとぎれに聞えてくる。

「また大きくなるんじゃないかしら」

おせんが眼をつむつたままそう云つた。源六はそれには答えず、
やや暫くして、

「風が變つたな」と独り言のように^{つぶや}呟いた。裏の魚屋の女房が来たのはそれから間もなくだった、表の戸を叩きながら呼ぶので、おせんが着物をはおつて起きていった。

「のんきだねえおせんちゃん寝ていたのかえ」とおらくはまだ明け
けない戸の向うで云つた、「……火が下谷へ飛んでこつちが風下
になつたよ、出てごらんな大変だから」

「さつき見たんだけれど」

おせんはそう云いながら雨戸を明けた。すると、いきなりぱつ
と赤い大きな火の色が眼へとびこんだ、こつちが見たというより、

火明りのほうでとびこんだという感じだった。向うの家並はまっ暗で、その屋根の上はいちめに赤く、眩まぶしいほど空いっぱいひろに弘ひろがっていた。

「……まあずいぶんひろがったわね」

「そんなこともないだろうけど、手まわりの物だけでも包んで置くほうがいいね、うちでもとにかくひと片付けしたところだよ、なにしろここにはお祖父さんがいるんだから」

「どうも有難う、そうするわおばさん」

「いざとなったらお祖父さんはうちが負おぶつてゆかあね、それは心配はいらないからね」

おらくが去るとすぐ、おせんは手早く着替えをし、すぐ要いると

思える物を集めて包を拵えた。江戸には火事が多いので、ふだんから心の用意はできている、荷物はできるだけ少なくてか、米はどんなにしても二日分くらい持つとか、飯椀に箸は欠かせないとか、切傷、火傷、毒消し薬などを忘れるなどか、みんな常づね口く伝でんのように戒め合い、いざというときまごつかないだけの手順はつけてあるのだった。……包が出来る時、お祖父さんに起きて貰い、布子ぬのこを二枚重ねた上から綿わた入い半はん纏まとをさらに二枚着せ、頭巾かぶを冠かぶらせた。このあいだにも表の人ごえは段だん高くなり、手荒く雨戸を繰る音や、荷車を曳ひきだすけたたましい響ひびきが起こつたりした。

「もう支度はできたかえ」おらくがそう云つて入つて来た、「…

：慌てなくつてもいいんだよ、また少し風が變つて、火先が西へ向つてるからね、こつちはたぶん大丈夫だろうつて、うちじゃあいま馬喰町のおとくいへ見舞いに出ていったよ」

「でもさつきよりかがりが大きくなつたようじゃないの、おぼさん」上りがまち框へ、出ていったおせんは、夜空を見やりながら、それでもややおちついた声でそう云つた、「……厭だわねえ地震のあとでまた火事だなんて」

「お江戸の名物だもの、風が吹けばじやんとくるにきまつているのさ、それにしてもれつきとしたお上かみがあつて、知恵才覚のある人もたくさんいるんだろうに、なんとか小さいうちに消すくふうはないもんかねえ、番たび百軒二百軒と焼けるんじやあもつたい

ないはなしじゃあないか」

「あらお婆さん」おせんは急に身をのり出した、「……こつちの
ほうが明るくなつたけれど、どこかへ飛び火がしたんじゃあない
かしら」

「あらほんとうだね、おまけに近そうじやないか」

おらくはあたふたと外へ出た。たしかに飛び火らしい、元の火
先は西へ靡いているのに、それとは方角の違う然もずっとこちら
へ寄つたところに、新しいだいたい橙色の明りが立ちはじめた。……通り
には包を背負い、子供の手をひいた人びとの往来がしだいに繁く
なつたが、その人たちの顔が見えるほど、空は赤あかと焦がされ
ていた。家を見て来ると云つておらくが去ると、おせんは勝手へ

いって水を飲み、どうしようかと考え惑った。足の不自由なお祖父さんを、伴つれてゆくには、あまりさし迫らないうちのほうが安全だ、然しよく話に聞くことだが、へたに逃げると却かえつて火に囲まれてしまう、立退たちのくなら火の風の向きをよほどよくみなければと云う、まだ経験のないおせんには、いまが逃げる時かどうか、どっちへゆくがいいのかまるつきり見当がつかなかった。どうしよう、おせんはまた表へ出ていった。

「おせんちゃんまだいたのか」と、右隣りの主人がびつくりしたように呼びかけた、「……もう逃げなくちやあいけない、立花たちばなさまへ火が移っている、早くしないとんだことになるぜ」

そう云うと、背中の大きな包を揺りあげながら、大通りのほう

へと走っていった。おせんは足がぶるぶると震えだした、よく気をつけてみると、僅かなあいだに近所ではだいぶ立退いたらしく、往來の激しい騒ぎとは反対に、たいていの家が雨戸を明けたまま、ちようど黒い口をあけているようにひっそりと鎮まりかえっていた。おせんはぞつとして露次へとびこんだ。裏の魚屋へいつて

「おばさん」と呼んでみたが返辞はなく、包を背負った男たちがおせんを突きつけるように、溝どぶ板いたを鳴らしながら駆けて通った。気もそぞろに、家へ戻つてくると、お祖父さんは仏壇を開いて、燈明をあげているところだった。

「お祖父さん」おせんはできるだけしずかな調子で云った、「……たぶん大丈夫だと思ふけれど、なんだか火が近くなるようだか

らともかく出てみましよう」

「おまえゆきな、おせん」と、源六は仏壇の前へ坐つた、「……ここは焼けやあしない、おれにはわかつてるんだ、ここは大丈夫だ、けれども方に一つといることがあるからな、おまえだけは暫くどこかへいつているがいい」

「そんなことを云つて、お祖父さんを置いてゆけると思うの、あたしを困らせないで」

「人間には定命じょうみょうというものがあるんだ。おせん」源六はしづかに笑つた、「……どんなに逃げたつて定命から逃げるわけにはいかない、おれはじたばたするのは嫌いなんだ」

「それじゃあ、あたしもここにいてよ」

「ばかなことを云つちやあいけない、おれとおまえとは違う、おまえはまだ若いんだ、おまえは、これから生きる人間なんだ、若さというものは、時に定命をひっくり返すこともできる、七十にもなれば、もうじたばたしても追つかないが、おまえの年ごろにはやるだけやってみなくちやあいけない、どん詰りまでもういけないというところから三段も五段もやってみるんだ、おせん、おれのことは構わずにゆきな、はんとき半刻もすればまた会えるんだから」

「お祖父さん」

おせんはお祖父さんの膝ひざへすが継りついた。そのとき表から、「爺さん」と叫びながらとび込んで来た者があつた。杉田屋の幸太だ

った。彼は頭巾付きの刺子さしこを着ていたが、その頭巾をはねながら上り框へ片足をかけた。

「もう立退かなくちやあいけないよ爺さん、立花様へ飛んだ火が御蔵前おくらまえのほうへかぶさつて来た、こいつはきつと大きくなる、いまのうちに川を越すほうがいい、おれが背負つていくぜ」

「よく来てお呉くんなすつた、濟まない」源六はじつと幸太の眼を見いった、「……せつかくだがおれのことはいいいから、どうかこのおせんを頼みますよ、おれはこんなからだだし、もう年が年だから」

「ばかなことを云つちやあいけない」幸太は草鞋わらじのまま上へあがった、「……としよりを置いて若い者が逃げられるものか、さあ

この肩へつかまるんだ、おせんちゃん、持ってゆく物は出来ているのかい」

「ええもう包んであるわ」

「じゃちよつと手を貸して爺さんを負わして呉んな、なにか細帯でもあつたら結びつけていこう。色消しだがそのほうが楽だ」

構わないで呉れと泣くように云う源六を、幸太はむりに肩へひき寄せ、おせんの出して来たさんじやく帯で、しっかりと背へ括りつけた。おせんは齒をくいしばった。幸太とは単純でないゆゑたてがある。どんなに苦しくとも彼にはものを頼みたくない、然しこのばあい他にどうしようがあるう、彼がとびこんで来たとき、おせんは嬉しさに思わず声をあげそうになった。ずいぶん勝手だ

けれど堪忍して、うしろからお祖父さんを負わせながら、おせんは心のうちで幸太にそう詫^わびを云った。

「よかつたらゆくぜ、おせんちゃん」

「あたしはこれを持ってばいいの、ああいけない火桶に火がいけてあつたわ」

「いけてあれば大丈夫だ、そんなものはいいよ」

それでもと云っておせんは手早く火の始末をし、幸太といつしよに家を出た。……大通りは人で揉^もみ返していた、浅草のほうはいちめんの火で、もうそのあたりまできな臭い煙がいつぱいだつた。幸太はちよつと迷った、西を見ると駿河台から延びて来た火が、向う柳原あたりまでかかっているようだ、北は湯島を焼いた

のが片方は上野から片方は神田川にかけて燃え弘がっている。そして浅草のほうも火だ、つまり隅田川に向つて三方から火が延びているのである。

「おうまやの渡しから向うは大丈夫だ」

そう云っている男があつたので、幸太はその男をつかまえて訊いた、「たしかだとも」と、軽子かるこらしいその男はいきごんだ調子で云つた、「おれは駒形こまがたの者だ、おふくろが神田にいるんでゆくとところだが、焼けているのはお厩うまやの渡しからこつちで、あれから向うは、煙も立つちやあいない、逃げるんならあつちだ」幸太はそつちへ戻ろうと思つた、然し道どいっばい怒濤どとうのように押して来る人の群を見ると、そのなかをゆくことがいかに不可能である

かすぐにわかった。彼は背負った源六を思い、左手に縋っているおせんを思った、——やっぱり本所へゆこう、おなじ火をくぐるなら、ゆき着いた先の安全なほうがいい。そう心をきめて歩きだした。

浅草橋まであとひと跨またぎといふところまで来た。湯島のほうから延びて来る火は、もう佐久間町あたりの大名屋敷を焼きはじめたとみえ、横さまに吹きつける風は燻いぶされたように、煙と熱気に充ちていた。おせんは絶えず幸太の背中にいるお祖父さんに話しかけ、元気をつけたり、励ましたりしていたが、このとき人の動きが止つて、前のほうから逆に、押し戻して来るのに気がついた。「押しちやあだめだ、戻れもどれ」

「どうしたんだ先へゆかないのか」

「御門が閉った」

そんな声が前のほうから聞え、まるで堰止め^{せきと}られた洪水が逆流するかのよう、犇ひしと押詰めた群衆がうしろへと崩れて来た。おせんは幸太の腕へ両手でしがみついた。

「幸さん御門が閉ったんですって」

「そんなことはないよ」彼は頭を振った、「……なにかの間違いだ、この人数を抛^{ほう}って門を閉めるなんて、そんなばかなことが」

「御門が閉ったぞ」そのとき前のほうからそう叫ぶ声が出た、

「……御門は、閉った、みんな戻れ、浅草橋は渡れないぞ」

その叫びは口から口へ伝わりあらゆる人々を絶望に叩きこんだ、

沸き立つような喧騒けんそうがいつときしんと鎮まり、次いでひじょうな忿いりの唳号どごうとなつて爆発した。浅草橋御門を閉められたとすれば、かれらが火からのがれる途みちはない、火事は北と西とから迫っている、然も恐るべき速さで迫つて来ている、東は隅田川だ、浅草橋はたった一つ残された逃げ口だったのだ。

「門を叩き毀こわせ」誰かがそう喚いた。

「踏み潰つぶして通れ」

するとあらゆる声こゑがそれに和して鬨ときをつくつた。

「門を毀せ」

「押しやぶつてしまえ」

それは生死の際に押詰められた者のしにもものぐるいな響きをも

っていた。群衆は眼にみえないちからに押しやられて、再び浅草橋のほうへと雪崩なだれをうって動きだした。

九

幸太はこの群衆の中から脱けだした。彼には浅草橋の門の閉った理由がすぐわかった。門の彼方もすでに焼けているのだ、風が強いから火はみえないが、さつき茅町の通りで見たとき、もう柳原のあたりが赤くなっていた、おそらく馬喰町の本通りあたりまで焼けてきたに違いない。よしそうでないにしても、「御門」という制度は厳しいもので、いちど閉められたらたやすく明く筈

はなし、群衆の力ぐらいで毀せるものでもなかった。彼はすばやくみきわめをつけ、けんめいに人波を押し分けて神田川の岸へぬけ、そのまま平^{へいえもんちよう}右衛門町から大川端へと出て来た。

神田川の落ち口に沿った河岸^{かし}の角が、かなり広く石置き場になっていた。のちには家が建つようになったが、その頃はまだ河岸が通れるようになっていて、貸舟屋や石屋や材木屋などが、その道を前にして軒を並べていた。もし舟があつたら本所へ渡ろうし、無かつたにしても、石置き場は広いし水のそばだから、火に追いつめられてもたぶん凌ぎがつくだろう、幸太はそう考えて来たのだった。……けれども、そこはもう荷物と人でいっぱいだった、幸太はちよつと途方にくれたが、遠慮をしてはだめだと思い、

「病人だから頼みます」

と繰り返し叫びながら、人と人とのあいだを踏み越えるようにして、いちばん河岸に近いところへぬけていった。そこは三方に胸の高さまで石が積んであり、その間にちようど人が三人ばかりはいれるほどの隙間ができている。

「ここがいいだろう」そう云つて幸太は源六をおろした、「……暫くの辛抱だ、爺さん寒いだろうが、がまんして呉んな」

「それより幸さん、おまえ家へ帰らなくちゃあいけまい」

「なあに家はいいんだ」幸太は源六を積んである石の間へそつと坐らせた、「……家はすつかり片付けて来たし、親たちは職人といっしよに立退いたんだ、おせんちゃんその包をこつちへ貸しな、

そいつを背中へ当てて置けば爺さんが楽だろう」

「済みません、あたしがしますから」

おせんは背負つて来た包をおろし、お祖父さんの後ろへ、倚より掛れるように置いて、自分もそこへ腰をおろした。

火のようすを見て来るといつて、幸太は通りのほうへ出ていった。おせんはひきとめたかった、こんな混雑のなかで、もしはぐれでもしたらどうしようと思つたから。けれども呼びかけることはできなかつた、幸太が火を見にゆくというのは口実で、ほんとうはおせんのそばはそばにいることを憚おそつた。あのときの約束を守ろうとしていたのだということがわかつたからである。おせんは咎とがめられるような気持で、お祖父さんにひき添いながら身のまわりを

眺めやった。……積んである石の上も下も、大きな荷包と人でいっぱいだった、たいていの者が子供づれで、なかには背負つたり抱えたりで五人もの子をつれた女房がいた。かれらの多くは焼けどだされて来たらしく、火あしの早かつたこと、飛び火がひどくて逃げる先さきを塞ふさがれ、危うく命びろいをして来たこと、どこそこでは煙に巻かれてなん十人も倒れているのを見たことなど、口ぐちに話し合っていた、「ええ此ここ処は大丈夫ですよ、いざとなつたら川へは行って、石垣に捉つかまっていたって凌げますからね」そんなことを繰り返し云う男があり、「そうだ此処なら命だけは大丈夫だ」とか「水に浸って火の粉をあびれば水火の難だぜ」などと云って笑う声も聞えた。

暫くして幸太が蒲団を担いで戻つて来た、「ちよつと思いついたもんだから、断わりなしにはいつて持つて来たよ」彼はそう云つて源六とおせんとをそれでくるむようにした、「……こうしていれば寒くもなく火除ひよけにもなるからな、それから飯櫃めしびつをみたら残つてたから、手ついでにこんな物を拵えて来たよ」自分もそこへ坐りながら、湯沸しと握り飯の包をとりひろげた。

「あら、お握りなら持つて来てあるのよ」

「そいつはとつとくんだ、明日がどうなるかわからないからな、爺さん一つ喰べておかないか、ちようどまだ湯が少し温かいんだがな、おせんちゃんもどうだ」

「ええ頂くわ、お祖父さんもそうなさいな」

「なんだか野駆けにでもいったようだな」

源六は独り言のように、そつとこう呟つぶやきながら一つ取った。おれも貰うぜと云つて、幸太も取つて頬張つたが、こいつは大笑いだと頭へ手をやった、「冗談じゃない塩をつけるのを忘れちゃつたよ」

「まあそんなものさ」源六が笑いながら云つた、「男があんまりですぎるのもげびたものだ」

「いいわよ、梅干を出すから待つてらつしやい」

おせんは手早く包をひらき、重箱をとりだして蓋をあけた。――ほんとうに野駆けにでもいったようだ、と思ひながら……。

火事のこと源六も幸太も口にしなかつた、火のようすを見に

いった幸太がなにも云わないのは、云わないことがそのまま返辞だからである。それでなくとも、横なぐりに叩きつけて来るような烈風は、すでに濃密な煙とかなり高い熱さを伴っているし、頭上へは時おりこまかい火の粉が舞いはじめて来た。

「爺さんもおせんちゃんも、少し横になるほうがいい、火の粉はおれが払ってやるから」

そうすすめるので、源六とおせんは蒲団をかぶり、包に寄りかかって楽な姿勢をとった。……家は焼けてしまいうだろう、おせんはそう思ったが、悲しくも辛くもなかった、お祖父さんが病気で倒れたり、地震があつたり、今年はひどく運が悪かった、いつそ家もきれいさっぱり焼けて、どん詰りまでいってしまいうほうがい

い、悪い運が底をついてしまえば、こんどは良い運が始まるだろう、なにもかも新しくやり直すんだ、——庄さん、とおせんは眼をつむり遠い人のおもかげを空に思い描いた、あたし弱い気なんか起こさなくてよ、あんたが帰るまでは、どんなことがあつても他人の厄介にならないで待っているわ、今夜のことは堪忍してね庄さん、だつてほかにしようがなかつたんですもの、あんたがいたら幸さんなんかに頼みはしなかつたのよ、わかるわね庄さん。

危険は考えたより遙かに早く迫つて来た。幕を張つたように、するどい臭みのある煙が烈風に煽られて空を掩い地を這つて、あらゆるものを人々の眼から遮り隠していた、そのあいだに火は茅町から平右衛門町へと燃え移っていたのだ、誰かが「あんな処へ

火が来ている」と叫び、みんながふり返ったとき、河岸に面した家並の一部から焰ほのおがあがった。風のために家から家と軒つづきに延びて来たのが、ひとところ屋根を焼きぬくと共に、撓ためるだけ撓めていたちからでどつと燃えあがったのだ、ちようど巨大な埵つぼの蓋をとったように、それは焰の柱となって噴きあがり、眼のくらむような華麗な光の屑くずを八方へ撒まきちらしながら、烈風に叩かれて横さまに靡き、渦を巻いて地面を掃いた。頭上は火の糸を張ったように、大小無数の火の粉が、筋をひきつつ飛んでいた、煙は火に焦がされて赤く染まり、喉のどを灼やくように熱くなった。煙に咽むせたのだろう、どこかで子供が泣きだすと、堰を切ったように、あつちからもこつちからも、子供の泣きごえが起こった。

「おいみんな荷物に気をつけて呉れ」とつぜん幸太が叫びだした、
「……荷物へ火がつくとみんな焼け死ぬぞ、よけいな物は今のうち
に河へ捨てるんだ」

彼は石の上へとびあがり、同じ言を幾たびも叫びたてた。それから
両国のほうと本所河岸を眺めやった。煙がひどいのでよくわから
ないが両国広小路の向うも火のようだった。薬研堀やげんぼりから矢
の倉へかけて、橙色のすさまじい火が、上から抑えつけられたよ
うに横へ広くひろがっている、そしていつ飛び火がしたものか、
本所河岸もすでに炎々と燃えていた。

「向う河岸も焼けてるのね、幸さん」おせんが立ちあがってそう
云った、「……どこもかも焼けているわ、大丈夫かしら」

「出て来ちやあいけない、蒲団をかぶってじつとしているんだ」
幸太は叱りつけるように云った、「……馴れない眼で火を見ると
気があがって、それだけでまいってしまふ、おれがいる以上は大
丈夫だからじつとしていな」

おせんは坐って、頭からまた蒲団をかぶった、然し熱さと煙と
で、息が苦しくなり、ながくはそうしていられなくなつた。

「お祖父さん、苦しくない」

そう訊いたが「うん」というなりでなにも云わない、堪らなく
なつて、おせんは頭を出した。ごうごうと、大きな釜戸かまどの呻うめきの
ような火の音と、咆ほえたける烈風のなかに、苦痛を訴えるすさま
じい人の声が聞えた。まるでそこにいる人たちを覗ねらつてくるかの

ように、熱風と煙が八方からのしかかり押し包んだ。……向うのほうで「荷物に火がついたぞ」と叫ぶ声がし、「みんな荷物を河へ抛りこめ」という叫びが続いた。おせんはするどい恐怖と息ぐるしきで胸をひき裂かれるように思い、

「幸さん」

と喉いっぱいに呼んだ。

「……幸さん、どこ」

「頭を出すな」そうどなりながら、石の上へ向うから幸太がとび上って来た、「……髪の毛かみへ火がつく、ひっこんでろ」

「苦しくってだめなの、息が詰るわ」

「苦しいぐらいがまんするんだ」そう云いながら彼は石から下り

た、「……爺さんは大丈夫か、爺さん、もうひとがまんだぜ」

源六の返辞はなかった、身動きもしないので、幸太が蒲団を剥はいでみた。源六は包へがくりと頭をのけ反らせていた、幸太は手荒く老人の着物の衿をかき明け、心臓のところへ耳を当てた。：おせんは大きく眼をみはり、両手の拳こぶしを痛いほど握りしめながら見ていた、……お祖父さんは口をあいていた、眼もあいていた、ちようど欠伸あくびでもしているようなのんびりとした顔である、然しそれにもかかわらずすべてが空虚で、なにかしらぬけがらをみるような物質化した感じが強かった。幸太は老人の肩を掴つかんで揺すぶった。それから湯沸しをあげ、手に当る紐ひもをひき千切つてつるを縛ると河の水を汲くみあげて老人の頭へあびせかけた、四たびば

かりも繰り返して、また心臓へ耳を当てた。これらのことは**敏**^{びんし}
捷^{よう}な動作と、ぜひとも呼び生かしてみせると云いたげな熱意に
溢^{あふ}れていた、おせんは震えながら見ていた、渦巻く煙も、頬を焦
がしそうな火気も、泣き喚くまわりの人ごえも気づかずに、そし
て、やがて幸太が両手を垂れながら立つと、絞りだすような声で
叫びながらお祖父さんの胸の上へ泣き伏した。

「済まない、勘弁して呉んな」幸太が泣くような声でそう云った、
「……おれがへまだったんだ、もう少し早くいつて伴れだせばよ
かったんだが、こんな処で死なせるなんて、ほんとうに済まなか
った」

「いいえそんなことはなくってよ幸さん、ここまででも伴れて来

られたのはあんたのおかげだわ、お祖父さんはどうしても逃げるのはいやだつてきかなかつたんですもの」

「おまえの足手まといになると思つたんだ、病気で倒れてつからも、爺さんはおまえの世話になることが辛くつて、どんなに気をあせつていたか知れなかつた、おれにはよくわかつたんだ。他人ぎようぎじゃあないぜ、爺さんはおまえを可愛がつていた、どんなお祖父さんがどんな孫を可愛がるよりも可愛がつていたんだ、おまえに苦勞させるくらいなら、いつそ死ぬほうがいいとさええ：
：おれにそう云つたことがあるんだ、だからおせんちゃん、薄情なようだが諦めよう、爺さんは楽になつたんだ、ながい苦勞が終つてもうなにも心配することもなく、安樂におちつくところへお

ちついたんだ、わかるなおせんちゃん」

「幸さん」

おせんが、そう呼びかけたとき、畳一枚もありそうな大きな板片が、燃えながら二人のすぐ傍らへ落ちて来た。

まるで雪崩の襲いかかるように、怖ろしい瞬間がやって来た。

苦しまぎれに河へはいる者がたくさんあつた、然しそこは折あしく満潮で、はいるとすぐ溺れる者が相次いで、石垣にかじりついている者は頭から火の粉を浴び、それを払おうとして深みへ掠われた。たぶん頭が錯乱したのだろう、なにやら喚きながら、まっすぐに燃えている火の中へとび込んでゆく者もあつた。あたりに置いてある荷物はみなふすふすと煙をあげ、それが居竦いすくんでいる

人々を焦がした。積んである石も、地面も、触つていられないほど熱くなり、水を掛けるとあらゆる物から湯気が立つた。そうだ、おせんは初めて気がついた。彼女はいつか幸太の刺子半纏を着せられ、頭巾を冠っていた。その上から、幸太が河の水を汲みあげては掛けていて呉れたのだ。

「苦しくなったら地面へ俯伏うつぶすんだ」と幸太がどなった、「……地面へ鼻を押しつけて、そのいきを吸うんだ、火の気も煙も地面まではいかないから、もうひとがまんだ」

おせんはとつぜん中腰になり、すぐ脇に積んである石の蔭を覗いた。さつきから赤子の泣くこえが耳についていた、ひとところ、少しも動かずに、たまぎるような声で泣いている、あんまり

ひとところで泣き続けるので、堪らなくなつて覗いてみた、石の蔭には大きな包が二つあり、その上に誕生には間のありそうな赤子が、ねんねこにくるまって泣いていた、まわりには誰もいない、ねんねこも包も、ところどころ焦げて煙をだしている、おせんは衝動的に赤子を抱きあげ、刺子半纏のふところへ入れて元の場所へ戻つた。

「ばかなことをするな」幸太が乱暴な声でどなつた、「……親も死んでしまったのに、そんな小さな子をおまえがどうするんだ、死なしてやるのが慈悲じゃないか」

「みんなおんなじよ」おせんはかたく赤子を抱きしめた、「……あたしだつてもうながいことないわ、助けようというんじやない

の、こうして抱いて、いっしよに死んであげるんだわ、一人で死なすのは可哀そうなもの」

「おまえは助ける、おれが助けてみせる、おせんちゃん、おまえだけはおれが死なしあしないよ」彼はそう云つて、刺子半纏の上から水を掛けると、おせんのそばへ跼んで彼女の眼を覗いた。

「……おまえにあ、ずいぶん厭な思いをさせたな、済まなかつた。堪忍して呉んなおせんちゃん」

「なに云うの幸さん、今になってそんなことを」

「いや云わせて呉んな、おれはおまえが欲しかつた、おまえを女房に欲しかつたんだ、おまえなしには、生きている張合もないほど、おれはおせんちゃんが欲しかつたんだ」

苦痛にひき歪ゆがんだ声つきと眸子ひとみのつりあがったような烈しい眼の色に、おせんはわれ知らずうしろへ身をずらせた。

「思いはじめたのは十七の夏からだ、それから五年、おれはどんなに苦しい日を送ったか知れない、おまえはおれを好いては呉れない、それがわかるんだ、でも逢いにゆかずにはいられなかった。いつかは好きになって呉れるかも知れない、そう思いながら、恥を忍んでおまえの家へゆきゆきした、だがおまえの気持はおれのほうへは向かなかつた、そればかりじゃあない、とうとう……もう来て呉れるなど云われてしまったつけ「煙が巻いて来、彼は、こんこんと激しく咳せきこんだ。それから両の拳へ顔を伏せながら、まるで苦しさに耐え兼ねて呻くような声で、続けた、「……そう

云われたときの気持がどんなだったか、おせんちゃんおまえにはわかるまい、おれは苦しかった、息もつけないほど苦しかった、おせんちゃん、おれはほんとうに苦しかったぜ」

おせんは胸いっばいに庄吉の名を呼んでいた、できるなら耳を塞いで逃げたかった、「おれがいなくなれば幸太はきつと云い寄るだろう」そう云った庄吉の言葉がまたしても鮮やかに思いだされた、「だがおれは安心して上方へゆく、おせんちゃんはおれを待つていて呉れるだろうから」そうよ庄さん、あたしを守つて頂戴、あたしをしつかり支えていて頂戴。おせんはこう呟きながらかたく眼をつむり、抱いている赤子の上へ顔を伏せた。

「だがもう迷惑はかけない、今夜でなにもかもきりがつくだろう」

幸太は泣くような声でこう云った、「……どんな事だつてきりというものがあるからな、おせんちゃん、これまでのことは忘れて呉んな、これまでの詫^わびにおまえだけはどうなことをしても助けてみせる、いいか、生きるんだぜ、諦めちゃあいけない、石にかじりついても生きる気持になるんだ、わかつたか」

おせんは黙っていた、顔もあげなかつた。幸太は立つて再び水を汲んでは掛けはじめた。然し湯沸しなどでは間に合わなくなってきた。彼は蒲団を水に浸しておせんの上から冠せ、手桶かなにかないかと捜してみた、そのときはじめて、そのあたりいちめん人間の姿がひとりもなく、荷という荷が赤い火を巻きだしているのに気がついた、ついさつきまで犇^むめいていた人たちが、かき消

したように見えなくなり、有ゆる荷物あらが生き物のように赤い舌を吐いていた。眼のくらむような明るさのなかで、それは悪夢のよううに怖ろしい景色だった。

彼は湯沸しを投げだした。そして積んである石材を抱えあげ、石垣に添って河の中へ落とし入れた、一尺角に長さ三尺あまりの大お谷石おやしだった、殆んど重さを感じずる暇もなく、凡そ十五六も同じ場所へ沈めた。それから石垣に捉まって水の中へはいつてみた、石は偶然にも、ひとところに重なっていたが、満潮の水は彼の胸まで浸した、幸太はすぐに岸へ上り更に八つばかり沈めて、自分でいちど、試してからおせんを呼んだ。

「大丈夫だ、赤ん坊はおれが預かるから、そこへ足を掛けて下り

な、落ちてても腰つきりだ、よし、こんどはここへ捉まって、ゆっくりしな、そうそう、いいか」

「赤ちゃんを水に浸^つけていいの」

「焼け死ぬより腹くだしのほうがましだろう、いま上から蒲団を掛けるからな」

幸太は岸の上から蒲団を引き下ろし、いちど水につけておせん頭の冠せた。……水はおせんの腰の上までであった。然も潮はひきはじめているとみえ、神田川の落ち口なのでかなり強い流れが感じられる。おせんは赤子を抱いたからだを石垣へ貼^はりつけるようにし、足は水の中でしつかりと石を踏ん張った。

「もう少しの辛抱だ、河岸の家が燃え落ちれば楽になる、まわり

を見ちやあいけない、なにも考えずにがまんするんだ、苦しくなつたら水の面にあるいきを吸うんだぜ」幸太は手で蒲団へぎぶぎぶと水を掛け続けた、「……ちよつと待ちな、あそこへ手桶が流れて来る、手じや埒ちうちがあかないからあいつを取つて来て掛けよう、ちよつとのまがまんしてるんだ」

そう云つて幸太は流れの中へすつと身をのしだした、仕事着のずんどんももひきに股引ももひきだけである。手桶は三間ばかり向うを流れているので、なんのことはないと思つた。然し彼は疲れきつていた、もう精も根も遣いきつていたのだ、二手、三手、泳ぎだすとすぐそれに気がつき、これはいけないと思つた。そのうえ流れはまん中へゆくほど強くなり、ぐんぐんとかからだを持ってゆかれそうだつ

た。彼はひき返そうかと思つたが、眼の前にある手桶に気づき、それに捉まれば却つて安全だと考えた。そしてけんめいに身をのし、手をあげて手桶を掴んだ。あげた手はひじょうに重かつた、まるで鉛の棒でもあるかのようにひじょうに重くて自由が利かなくなつた。それで桶はくつがえり、ずぶりと水の中へ沈むのといつしよに、幸太もからだの重心を失つて水にのまれた。

がぶつという異様な水音を聞いて、おせんが蒲団から頭を出した、河面かわもは真昼のように明るかつたが、なにやら焼け落ちた物が流れてゆくほかには、どこにも幸太の姿が見えなかつた。その人影のない、明るくがらんとした水面はおせんをぞつとさせた。

「幸さん」彼女はひきつるように叫んだ。

「………幸さん」

すると思つたよりずっと川口に近いほうで、はげしい水音がしたと思うと幸太がぼかつと頭を出した。彼は背伸びでもするよう
に、顔だけ仰反あおもむけにしてこつちを見た。

「おせんちゃん」と、彼は喉のどに水の中から濁音で叫んだ、「……おせんちゃん」

そしてもういちどがぶつという音がし、幸太は水の中へ沈んでしまった。おせんは憑つき物でもしたように、大きな、うつろな眼をみはつて、いつまでもその水面を見つめていた。彼女のふところ
で、赤子がはげしく泣きだした。

中
篇

一

江戸には珍しく粉雪をまじえた風が、焼けて黒い骨のようになった樹立こだちをひようひようと休みなしに吹き揺すっていた。寒いというより痛い、粟立あわたった膚を針でうたれるような感じである。どつちを眺めても焼け野原だった、屋根も観音開きも無くなり、はじめに白壁が剥はげ落ちて、がらん洞になった土蔵があちらこちらに見える。それは倒れ残った火除ひよけ塀べいや、きたならしく欠け崩れた石垣などと共に焼け跡のありさまを却かえつてすさまじくかなしくみせるようだ。晴れていたなら駿河台するがだいから湯島ゆしま、本郷ほんごうから上野うえのの丘までひと眼に見わたせるだろう、いまは舞いしきる粉雪で少し遠いところは朧おぼろにかすんでいるが、焼け落ちた家いへの梁はりや柱や、焦こわげ毀れた家財などの散乱するあいだを、ひどく狭くなった

道がうねくねと消えてゆくはてまで、一望の荒涼とした廃墟はいきよしか見られなかった。

手足はもちろん骨まで氷りそうな風に曝さらされ、頭から白く粉雪に包まれた人々が、浅草橋の北詰から茅場町かやばちようあたりまで列をつくっていた。傘をさしたり合羽を着たりしているのはごく僅かで、たいていの者が風呂敷やぼろむしろや蓆をかむっていた。男も女も、老人も子供も、みんな肩をすくめ身を縮めて、おさえつけられるように前まえ躰かたみになって、ほんの少しずつ、それこそ飽き飽きするほどのろのろと、列といっしょに動いている。誰もなにも云わなかった、素足のままふところ手をして瘡おこりにかかったかのようにがたがた震えている者、きみの悪いほど、白い硬ばった顔でときど

きびくんと発条ばねじかけのように首だけ後ろへ振向ける者、むきだしの頭から肩背へ雪まみれになつたまま、払いおとす力もないかのようにじつとうなだれている老婆、これらの群のあいだから赤児の弱よわしい泣きごえが聞える。前のほうでも後ろのほうでももう泣き疲れて喘ぐあえように喉のどをぜいぜいさせるだけのものもある。しかし親たちのあやす声は聞えない、ひようひようと吹きたける風の音を縫つて、その赤児の泣くこえだけが、列をつくつている人々ぜんたいの嘆きを表象するかのようになつた。途絶えたり高くなつたりしながらいつまでも続いていた。

「そつちへいつちやだめじゃねえか、だめだつて云つてるじゃねえか、ばか」

とつぜんこう喚きだす者がいた。

「あの火が見えねえか、よね公、焼け死んじまうぞ、よね公、よね公、ばか」

そしてその喚きはすぐにうううという低い絞るような鳴咽おえつになった。だがそのまわりにいる人たちはなにも云わず、振返りもしない、そんな喚きごえなど聞きもしなかつたようである。いたましいその鳴咽はやがて鼻唄のような調子になり、まもなくかすれかすれに消えていった。

おせんは痴呆もうぜんのように惘然もうぜんとして、この人々といっしよに動いたり停とどつたりしていた。抱かかいている赤児が泣きだすと、鈍い手つきで布子ぬのこ半纏はんてんをかき合せたり、ぼんやりと頬ほずりをしたりす

るが、すぐにまた放心したような焦点の狂った眼をあらぬ方へそ
らしてしまふ。時どきなにかが意識の表をかすめると、あらゆる
神経がひきつり収縮するので、からだじゆうがびくびくと激しく
痙攣する。それと同時にほつと夢から醒めたような気持になる
が、それは極めて短い刹那のことで、すぐに頭は朦朧となり、
思考はふかい濃霧に包まれるように昏んでしまふ。肉躰も精神
もすっかり麻痺して、自分がいまなにをしているかも、どうして
そんな処ところに立っているかもわからなかつた。——ただ時をきつて
いろいろな幻想があたまのなかを去来する、幼いころに浅草寺
の虫干しで見た地獄絵のような、赤い怖ろしい火焰かえんがめらめらと
舌を吐くさま、ふりみだした髪の毛から青い火をはなちながら、

その火焰の中へとびこんでゆく女の姿、渦を巻いておそいかかる咽のどを灼やくような熱い烈風、嘘のように平安なお祖父じいさんの寝顔、そしてごうごうと咆ほえ狂う焰の音のなかから、哀訴しむせび泣くようなあの声が聞える。

——おせんちゃん、おらあ苦しかったぜ、本当におらあ辛かったぜ、おせんちゃん。おせんは濁った力のない眼をみはり、唇をだらんとあけて宙を見上げる、なんの感動もあらわれない白痴そのままの表情だ。それから急に眉をしかめ、眼をつむって頭を振る、そういう幻視や幻聴を払いのけたいとでもいうように、——赤児はぐずぐずと泣きだし、小さな唇でなにかを舐なめるような音をさせた。おせんは機械的に頬ずりをし、その唇へそつと自分の

舌をさしいれた。赤児はとびつくように口をすり寄せ、びっくりするほどのちからでおせん舌を吸う、ひじょうな力でちゅうちゅうと音を立てて吸うが、やがて口を放すとひき裂けるような声で泣きだすのであつた。

「おまえさんお乳を含ませておやりな」すぐ前にいた中年の女がこつちへ振返つてからこう云つた、「——舌なんかで騙だますのは可哀そうじゃないか、匂いだけでも気が済むんだから、お乳を含ませておやんなさいよ」

「そのひとはあたまがおかしいらしいだよ」脇にいる別の女がそう云つた、「——藁屋わらやの勘かんさんここで面倒みてやつてるらしいんだけど、唾おし者しみたいにものを云わないし、お乳をやることもお襠む

裸はだかを替かえることも知らないらしいんですつてよ」

「まあ可哀あはれそうに、こんな若わかさでねえ、まだ十六七じゅうしちじゃないかね」
 「いくら年としがいなくなつても、わが腹はらを痛いためた子こに乳ちちをやること
 も知らないなんて、本当に因果いんぐわなはなしだよねえ」

そんな問答もんたが聞きえるのか聞きえないのか、おせんは泣なき叫こぶ子を
 揺ゆすりながら、瞳ひとみのぬけたような眼まなこでじつとどこかを見つめるば
 かりだった。行列ぎょくはそれでもしだいに前まへへ前まへへと進すすみ、やがて蓆しき
 で囲かこつた施せ粥がゆ小屋ごやへと近づいた。そのあたりは群ぐんれたり散ちつたり
 する人影ひとかげと、甲かんだか高たかい罵ののりごえや喚わきなどでわきたち、雪ゆきまじり
 の風かぜに煽あおられて、火かを焚たく煙けむりや白しろい温ぬかかそうな湯ゆ気けが、空そらへまき
 上あつたり横よこへ靡なびいたりしていた。——
 筒たけのこがき
 笠かさを冠かぶり合あ羽はを着きて、

大きな鍋なべを提げた男が向うから来た。鍋蓋の隙から湯気が立つている、男は列の人々を眼さぐりしながら来たが、おせんを認めるとせかせか近寄って、

「おめえまた来てえるな、家にいなくて云ってるのにどうして出て来るのだ、赤ん坊が凍えちまつたらどうするだ、聞きわけのねえもてえげえにするがいい、さあ帰るだ、帰るだ」

「勘さんよ、たいへんだねえ」さっきの女の一人がこう声をかけた、「——おまえさんもお常さんもよく面倒をみなさる、こんななかで出来ねえこつたよう」

「なにをするもんだお互えさまさ」男はぶあいそに云い捨て、片手でおせんをそつと押した、「——さあ帰るだ帰るだ」

おせんはすなおに歩きだした。男はときどき鍋を持ち替えながら、自分が風上のほうへまわつて、往來を右へ曲り、もうかなり積つて白くなつた道を、へいえもんちよう平右衛門町のほうへとはいつていった。このまわりはどこよりもひどいようにみえる、土蔵や火防ひよけ壁などが無かつたせいか、家という家がきれいに焼け失せて、焚きおとしのようになつた柱や綿わたくず屑やぼろが僅かにちらばっているだけであつた。——しかし大川の河岸つなにあつた梶かじ平へいという材木問屋では、あの夜、筏いかだにして川へ繫つないだ材木をあげ、三棟の小屋の仕事場を造り、もう四五日まえから活澆のこぎかんに鋸や鉋の音をさせていた。しぜん職人も大勢はいるのでそこを中心**に**ぼつぼつ家が建ちだしている、もちろん板壁に屋根をのせたばかりの小屋であるが、

酒肴やそばきりなどを売る店もあつて、ときには酔つて唄うこえが聞えたりする。……勘さんと呼ばれる男の小屋もその一面にあつた。これは古い板切れを継ぎはぎにした、少なからず片方へ傾がつた、素人しごとと明らかにわかる雑なものだ。それにくつつけてやはりぶざまな、そのくせばかけて大きい物置が建つていて、空俵や蓆やあら縄などがいっぱい積込んである。勘さんはがたびしする戸をあけておせんを先にいれ、自分がはいるとすぐ戸をぴつたり閉めた。

油障子を嵌めたは小さな切窓から、朝あけのようにほの白い光がさしこんで、六帖じょうばかりの狭い部屋の中をさむぎむとうつし出している。ふちの欠けた火桶ひおけに、古ぼけた茶棚ちやだなと枕屏風まくらびょうぶのほ

かはこれといって道具らしい物もみあたらないが、夜具や風呂敷包などきちんと隅に片付いているし、蒲がまで編んだ敷畳もきれいに掃除がしてあり、見つきよりはずっと住みごこちの好い感じがみなぎっていた。

「お常、帰ったぜ」勘さんはこう呼びながら笠と合羽をぬいだ、

「——ひでえひでえ、骨まで氷ったあ」

「お帰んなさい、いま湯を取りますよ」

台所でこう答えるこえがし、すぐ障子をあけて、湯気の立つ手桶を持って女房が出て来た。二十八九になる小肥りの働き者らしいからだつきで、頬の赤いまるまるした顔に、思い遣やりのふかそうな眼をもっている。小さな鬘まげに結った髪もきっちり緊まつてお

くれ毛ひとつないし、衿えりに掛けた手拭もあぎやかに白い、手始末のいいきびきびした性質が、それらのすべてにあらわれていた。

「しようがねえ、この寒さにまた出て並んでるんだ」勘さんは足を洗いながら云った。

「——欠け井どんぶりのひとつも持つならいいが、手ぶらで並んでてどうするつもりかさ、可哀そうに赤ん坊が泣きひいてたぜ」

「友さんのところへ乳を貰いにいつといでつて出してやったんだよ、そこからいつちまったんだねきつと、あらまあ頭からこんなに濡れてるじゃないか、持ってつた傘をどうしたろう」

「いいからあげてやんなよ、傘は友助んとこへでも忘れて来たんだろう、ああ人ごこちがついたら腹が減ってきた、早いとこそい

つを温あつためて貰あつうべえ」

「あいよ、さあおまえお掛けな、足を拭いてあげから」

お常は残った湯で雑巾を絞り、おせんを上りがまち框がまちに掛けさせて、泥にまみれ、凍えて紫色に腫はれた足を手ばしこく拭いてやった。

二

おせんのそういう状態はかなり長く続いた。烈しい感動からきた精神的虚脱とでもいうのであろう。もちろん白痴になったわけではない、その期間に経験したことは夢中のもののようにおぼろ朧おぼろげではあるがそれでも断片的にはたいいてい記憶に残った。ただそれ以

前のことがまるで思いだせない、猛火に包まれた苦しさと、お祖父さんと誰かが死んだことは、遠いむかしそこだけの出来事のように覚えてはいるが、それもぽつんと断きれていて前後のつながりがまるでわからなかった。

彼女の新しい記憶はお救い小屋から始まっていた。それは蓆掛けに床を張っただけの、うす暗くて風の吹きとおす寒い建物で、身動きもならないほど人が混み合っていた。四五日いたのだろうか、赤児が泣くので隅へ隅へと追われた。自分がわからないありさまだし、もとより赤児の世話などしたことがないから、なかば夢のように揺すったり頬ずりしたりするばかりだった。憐あわれがつて乳を呉くれた女もいた。おむつを替えて、なお三組ばかりわけて

くれた女房もあつたが、長くは続かず、やがて小屋から押し出されてしまった。そうしてふらふら歩きまわっているうち、勘さんに呼びかけられてその住居へひきとられたのである。

——それから毎日、赤児を負つてはよく歩きまわつた。誰かに呼ばれているような、誰かを捜さなければならぬような気持で、ときには上野から湯島あたりまでうろうろしたこともある。しかし大川のほうへは決してゆかなかつた、そこはひじょうに怖ろしい、遠くからちらと水を見るだけでも、身の竦むすくような恐怖におそわれるのである、理由はわからないが本能的にそつちへゆくことは避けた。……歩きまわることがやまると施粥を貰う行列に並びだした。お粥は勘さんが貰つて呉れるので、むろんそのために

並ぶのではない、そこには大勢の人がいた、いつも違つた顔を見、違つた話が聞ける、そこにいれば自分の捜すものがみつかるかもしれない、また自分を呼んでゐる者にゆき会えるかもしれない、そういう漠然とした期待に唆そそられるからであつた。

——あの晩の火事は二カ所から出たんだつてよ、一つは本郷ほんごう追分おひわけから谷中やなかまでひと舐めさ、こつちはおめえ小石川から出たやつが上野へぬけてよ、北風になつたもんで湯島から筋違橋すじかいばし、向う柳原やなぎわら、浅草は瓦町かわらちようから茅町かやちよう、その一方は駿河台いへ延びて神田かんだを焼きさ、伝馬町てんまちようから小舟町こぶなちよう、堀留ほりどめ、小網町みちよう、またこつちのやつは大川を本所ほんじよに飛んで回向院えこういんあたりから深川ふかがわ、永代橋えいたいばしまできれえにいかれちやつた、両国橋あた

りじや焼け死んだり川へとびこんで溺^{おぼ}れたりした者がたいへんな数だつて云うぜ。

そんな話もその行列の中で聞いた。

——^{せいどう}聖堂も湯島天神も焼けちやつたからな。

——^{ひとことかんのん}回向院の一言観音の御本尊は山門におさめてあつたも

のさ、ところが十一月はじめのある夜、観音さまが住持の夢枕に立って、ここでは悪いからおろせと仰^{おつ}しやる、そこで本堂へ移すと、二十二日の地震よ、山門は倒れてめちやめちやだ、追っかけて二十九日の大火に回向院はあのとおりさ、げんあらたかだてえんでいまたいそうな参詣^{さんけい}人だそうだ。

——地震のあとで火事、おまけに今年は凶作だというから、火

を逃れても餓え死をする者がだいぶ出るぜ。

そういう話もたびたび聞いたのである。殊に關東八州の凶作はあらゆる人々の懸念のたねで、相当の餓死者が出るだろうということは耳の痛くなるほど聞かされた。けれどそういうきびしい話も、その頃のおせんにとつてはまるで縁のない余所よそごとのようなものであった。

勘さんは勘十といつて向う両国に住んでいた。そこで煎餅屋せんべいやをしていたのであるが、あの夜の火で焼けだされた。そのとき妻の妹を死なせたそうであるが、その始末もせず勘さんは下総しもうさの古河こがへとんでいった。そこには妻の実家が百姓をしている、彼はその家へいつて藁や縄や蓆や空俵などを多量に買い入れ、舟と

車とですぐ送る手筈をきめて帰った。これらはみな家を建てるのにせひ必要なものだ、勘さんはそれで商売にとり付こうと思つたのである。——材木問屋の梶^{かじへい}平におさな馴染の友^{ともすけ}助という男が帳場をしていた、その男の手引きで現在の場所へ住居を建て、さつそく注文をとつてまわつたが、思つたよりうまくいって、半月ほど経つうちには「藁屋の勘さん」とすつかり名を知られるようになった。こうした事情をおせんが知つたのはずつとのちのことである、勘さん夫婦はごくしまつた性分らしく、家で米を買つていながら施粥は施粥でちゃんと貰うし、おもても飾らず物の使いぶりも儉^{つま}しい、商売が忙しくなつても人を雇うようすはなかつた。……そんな風でいておせんの世話をよくして呉れたのは、下

町人の人情もあるだろうが、火事で死んだお常の妹と年ごろが似ているそうで、それが夫婦の同情をひいたのだということも、かなり時日が経ってからわかったことであつた。

おせんはごく僅かずつ恢かい復ふくしていった。まだはつきりとはしないが、勘さん夫婦と自分が他人であること、自分がなにか非常に不幸なめに遭つたこと、抱いている赤児が自分の子でないことなど、——そして困るのは夫婦の者がその子をおせんの実の子だと思つていることだつた。そうではないと云つても信じて呉れない。記憶があいまいで説明することはできないが、繰り返して主張すると、「まだあたまが本当でないのだからそんなことは考えないほうがいい」などと云つて相手にならなかつた。それだけな

らまだいいけれども、十二月中旬ごろだったろう、新しく人別（戸籍）を作るということで、町役の人たちが来て赤児とその父親の名をきかれた。おせんはなにも云えなかつたが、勘さんがすぐに、

「これはあの晩の騒ぎであたまを悪くしてますから」

と、代りに答えて呉れた。

「なにしろお祖父さんと誰とかが死んじまつたていことは知ってるだが、そのほかのことはなにも忘れちまつたらしいんですよ、自分の名はおせん、赤ン坊はこう坊つて呼んでますが、こうきち幸吉とか幸太郎とかいうんでしよう、そいつも覚えちやいねえようです」

「父親知れず、母おせんか」町役の人はなんの関心もなくそう書

き留めた、「——それじゃ子供の名は幸太郎とでもしておくか」

おせんはこの問答を黙って聞いていたのだが、幸太郎という名が耳についたとき危うく叫びそうになるほど吃驚びっくりした。なぜそんなに驚いたのか自分もわからない、ただその名が自分にとつて不吉な、たいへん悪い意味のものだという感じだけは慥たしかだった。町役の人たちが去つてから、彼女はお常にこう訊たずねた。

「おばさん、どうしてみんなこの子の名をこう坊つて呼ぶんですか」

「それはあんたが初めにそう呼んだからじゃないの」お常は妙な顔をした、「——毎晩のように幸さんつてうわ言を云つてたのよ、それであたしもうちのひともこの子の名だろうと思つて呼んでき

たんだわ、そうじゃなかつたのかえ」

「ええ違うんです、それは違う人の名なんです、あたしこの子の名は知らないんですもの」

「そんなら人別にそう書いちまったんだからそうして置きな、幸太郎ってちよつとすつきりした男らしい名じゃないの」

おせんは眉をしかめ、頭を振りながらなにか口の内であつぷつぷつつぷや呟いていた。いけない、その名を付けてはいけない、その名だけは決して、——だがなぜだろう、どうしてそんなに悪いだろう。

その理由はそこまで出ている、もうひと息でそのわけがわかる、おせんはけんめいに思いつめていった、すると頭の中できらきらと美しい光の渦が巻きはじめ、全身の力がぬけるような気持で、

赤児を負つたままそこへ倒れてしまった。

——それからまた痴呆のような虚脱状態にもどつたので、これはそののちも一種の癖のようになった。ひじょうに驚くとか、なかく一つことを思いつめるとかすると、あたまが混沌こんとんとなつて数日のあいだ意識が昏んでしまふ、そしてその期間にはまたあの怖ろしい火焰や、煙に巻かれて苦しむ人の姿がみえ、哀かなしい訴えるような声が聞えるのであつた。

赤児は丈夫に育つていった。肥えてはいないが肉付きの緊まつた、骨のしつかりしたからだつきでお常のみたところでは百日前後らしかった。乳は梶平の帳場をしている友助の妻のを貰つた、ちようど同じ月数くらいの子があり、絞つて捨てるほどよく出る

乳だった。住居も二町ばかりしか離れていないで、日になんども通うのにも都合がよかつた。夜なかの分は片口に絞って置いて呉れる、それを温めたり水飴みずあめを溶いたりして与えた。——初めはそばから教えられるままに、なんの感情もなくやっていたのであるが、毎日そうして肌を離さず世話をしているうち、しぜんに愛情が移つたのであろう、泣き方で空腹なのかおむつが汚れたのかわかるようになったし、添寝かをしていて少し動くと、眠つたまま背を叩いたり夜具を搔かき寄せたりするようにもなつた。年を越すと赤児は笑い顔をしはじめ、ときにはなにか話でもするような声をだした。眼つきもしつかりしてきて、こちらを意味ありげにみつめたりする。そんなようすを見るとおせんはくすぐ撥くすぐられるような、

切ないような気持になり、思わず抱き緊めては頬ずりをするのであつた。

「あらそう、可笑^{おか}しいの、幸ちゃんそんなに可笑しいの、へえ、
そうでちゆか」それから急にまじめな顔をして睨^{にら}む、「——いけ
まちえん、お母ちゃんのこと笑ったりしちやいけまちえん、悪い
子でちゆね、めっ」

そしてこの子とさえいつしよにいればそのほかの事はどうなつてもいい、自分の幸福はこの子のなかにだけある、などと思うのであつた。

三カ所にあつた施粥小屋も十二月の末までで廃止になつた。焼け跡もずんずん片付いて、翌年の二月ころになると道に沿つたところはあらかた家が建ち並んだ。もちろんそれは表がわのことで、裏へはいると蓆掛けのほつたて小屋がたくさんある。これらのなかには「どうせまたすぐ焼けちまうんだ」と悟つたようなことを云つていて、そのとおりまもなく次の火事で焼かれ、「へん、どんなもんだい」などとへんないばり方をする者などが少なからずいた。

——家は建つてゆくが町のようすはだいぶ變つた。当時は大火などのあとでよく道筋や地割の變更がある、そのときも両国橋か

ら新大橋しんおおはしまで、河岸に沿って新しく道が出来た。浅草橋御門からこつちでは、瓦町と茅町二丁目の表通りから大川端まで九割がた町家が取払いになり、松まつだいら平ひらなにがしの下屋敷しもやしきと書替かきかえやく役所しよが建つことに定きまつた。そのため梶平の仕事場が一丁目へ割り込んだので、順送りに勘十の住居なども平右衛門町へ移らなければならなかつた。

——大きな火事があると住む人たちの顔ぶれも違ってくる、俗に一夜乞食といつて、家倉を張おほあきんどつた大商人が根こそぎ焼かれて、田舎へ引込むとか他の町へ逼ひっそく息するなどということも珍しくないし、貸家かきずまいの者などは殆んどが移転してしまう、その土地でなければならぬ条件のある者は別として、同じ町内へ戻つて

来る者の数はごく少なかった。……仮にもし町のようすがそんなに変らなかつたら、そしてもとの町内の人たちがいてくれたとしたら、もう少し早くおせんの記憶力がよびさまされ、自分の身のうえや過去のことを思いだしたであろうし、したがって後にくるような悲しい出来事はなかつたに違いない。おせんのためには不幸な、だがどうしようもない偶然の悪条件は、こうして早くも彼女のまわりに根を張りだしたのであった。

二月にはいつてから、おせんの頭はしだいにはつきりし始めた。子供の世話をするひまひまに、炊事や洗濯くらいは出来るようになり、灯のそばで縫いつくろいなどしていると、すっかりおちついて顔色も冴さえてみえる。

「あら、おせんちゃんはきれいなんだね、今夜はまるで人が違つたようじゃないの」お常がそんな風に眼をみはることもあつた、

「——それだけよくなつたんだね、自分でそんな気持ちやしやあしないかえ」

「ええ頭が軽くなつたような気がするわ、なんとなくすうつとしてなにもかも思ひだせそうになるの、ひよいと誰かの顔がみえるようなこともあるんだけれど」

「あせらないがいいよ、そうやってひととおりにかが出来るようになったんだから、もう暫く暢のんき気のんきにしているのさ、そのうち本当におちついてくればすつかりわかるようになるからね」

「おばさん本所の牡丹屋敷ぼたんつて知つてて」

「四^よつ目の牡丹屋敷かい、あたしはいったことはないけど、それがどうかしたのかえ」

「なんだかそのことがあたまにあるの」おせんは遠くを見るような眼をした、「——誰かと見にゆく筈だったのか、それとも見て来たのか、そこがはつきりしないんだけれど、それからどこかのきれいな菊畑、……いろんなことがここのところへ出かかっているんだけど、捉^{つか}まえようとするとすうつと消えてしまうのよ」

「もう少しだよ、おせんちゃん、もう少しの辛抱だよ」お常はもうその話題に興味がなくなった、「——でもすつかり治つて、あなたが紀文のお嬢さんだなんてことになつても、あたしたちを袖にしないでおくれよ」

世間の窮乏はその頃からめだつてきた。幕府で米価の騰貴するのを抑えたからおもてむきの価格はそれほど高くはならないが、関東一帯の凶作に加えて地震と大火のあとなので、米穀その他の必要物資は極めて窮屈になり、またその流通が利を追う少数の商人たちの手に握られているため、庶民の生活は苦しく困難になるばかりだった。

—— いったい元禄げんろくという年代は華やかな話題が多かった、赤穂浪士きのかくにやぶんざえもんのことは別として、紀文大尽とよばれた紀伊国屋文左衛門ならやもぎえもんや奈良屋茂左衛門などの富豪が、花街や戯場ぎじょうで万金を捨てるよ
うなばかげた遊蕩ゆうとうをしたのもこの頃である。芭蕉ばしやう、其角きかく、嵐ら
雪んせつなどの俳諧師はいかいし、また絵師では狩野家の常信つねのぶ、探信守たんしんもりま

政、友信（とものぶ）。浮世絵の菱川吉兵衛（ひしがわきちべえ）、鳥井清信（とりいきよのぶ）。浄瑠璃（じょうるり）にも土佐椽（とさのじよう）、江戸半太夫（えどはんたゆう）など高名な人たちもたくさん出ている。これは大雑把（おおざっぱ）にいつて社会経済が武家から町人の手に移りつつあつた現われであろうが、その反面、これら新興の富豪商人らが幕府政治の枠内（わくない）で巨利を掴む（つか）ために、大多数の庶民がひじょうな犠牲を払わされたことは云うまでもない。……幕府では物価の昂騰（こうとう）を抑えたが、日雇賃（ひやといちん）を上げることが禁じた。物価はそのままだったが、じつさいになると商人たちは品物を隠して出さない、ぜひ買うには高い代価を払わなければならぬ。だが日雇賃には裏がなかつた、今もつとも忙しい大工や左官でさえ、手間賃のきびしい制限をうけた。これは一般の購買力を低くすると同時に、

しぜん小さな商工業へもつよく影響した。じみちなあきないやまともな稼かせぎでは、その日くらしも満足にはできなくなつていった。世帯をしまう者、夜逃げをする者、乞食が殖ふえ、飢える者が出はじめた。

「浅草寺の境内にまたゆき倒れが五人もあつたつてさ」

「なかに死んだ赤ん坊を負つた女がいたそうじゃないの、まだ若いんだつて、そばには御亭主も倒れていたけれど、動かせないほどのひどい病人だつたつて話よ」

「いやだねえ、昨日は御厩おうまやがし河岸に親子の抱き合い心中があがつたし、なんて世の中だろう」

「いつになつても泣くのは貧乏人ばかりさ、ひとごとじゃあない

よ」

そんな話が毎日のように出た。

三月になって年号が宝永ほうえいと改まった。ちょうど季節が春であったし、この改元は新しい希望を約束するようで、いつとき世間が明るくなったように見えた。しかしなに一つよくはならなかった。新しく建てる家はごく手軽にすべしとか、贅ぜいたく沢たくな品の贈答はならぬとか、祝儀や不祝儀の宴会はいけないとか、富とみくじ籤じは禁ずるなどという、緊縮の布令ふれいが出るばかりで、むしろ不況の度はひどくなつていった。

——焼け跡の木々にも新芽がふくらみはじめた。きみの悪いくらい暖かな日があるかと思うと、冬でもかえつたように、とつぜ

ん気温が下り、烈しい北風がいちめん茶色になるほど埃ほこりを巻きあげたりした。或る日、おせんが表で子供を遊ばせていると、長なが半纏んてんにふところ手をした男が通りかかり、こつちを見て吃驚したように立停った。

「おや、おめえおせんちゃんじゃあねえか」

おせんは訝いぶかしげに顔をあげた。

「やっぱりおせんちゃんか」男は親しげに寄つて来た、「——よくおめえ無事だったな、てつきり死んじまったとばかり思つたぜ、おら正月こつちへ帰つたんだが、近所の知つた顔にまるつきり会わねえ、おめえもやられたと思つてたんだが、なにはどうした、爺さんは、やっぱり無事でのかい」

おせんは子供を抱きあげ、不安そうにじりじりと戸口のほうへさがった。

「なんだえそんな妙な顔をして、おらだよ、山崎屋の権二郎ごんじろうだよ、忘れたのかい」男は片手をふところから出した、「——まさか忘れる筈はねえだろう、ほら、おめえんちのすぐ向いにいた権二郎だよ」

「おばさん、来て」おせんは蒼あおくなつて叫んだ、「——おばさん来て下さい」

悲鳴のような叫びだった。お常は洗濯をしていたらしい、濡れ手のままとびだして来ると、慌てておせんを背かばに庇かばった。

「どうしたんです、この子がなにかしたんですか」

「冗談じゃねえ、なんでもねえんだよ」男は苦笑しながら手を振った、「——おらあこの娘を知ってるんで、いま通りがかりに見かけたからちよつと声をかけたんだよ」

「このひとを知ってるんですって」

「向う前に住んでたんだ、いま取払いになつちまつたが三丁目の中通りで、この娘のうちは研屋、おらあ山崎屋という飛脚屋の若い者で権二郎っていうんだ」

「まあそうですか」お常はほつとしたように前掛で手を拭いた、

「——このひとは火事の晩にどうかしたとみえて、以前のことはなんにも覚えちやいないですよ、ついした縁であたしたちがひきとつてお世話してるんですけれど、じゃあ親類かなんかあるん

でしようか」

「そいつはおいらも知らねえが、茅町二丁目に杉田屋てえ頭とうりよ

梁うがあつた。そこの若頭梁がよく出入りしていたつけよ」男は
 こう云つておせんのを眺め、ふと唇を歪ゆがめて妙な笑いかたを
 した、「——そこに抱いているのはおかみさんの子供かね」

「いいえ、このひとのなんでしょう、ひきとつたときもう抱いて
 たんですよ」

「へええ、やっぱりね」

「この子の親を知ってるんですか」

権二郎はにやりと笑つた。それからおせん顔と子供を見比べ、
 肩をしゃくつて嘲あざけるようにこう云つた。

「いま云つた若頭梁に聞けあわかる、生きてさえいりやあね」

そして自分には関係がないとでも云うように、よそよそしい顔をして去つていった。お常はそのうしろ姿を見やりながらなんていやみつたらしい人だろうと舌打ちをした。

「おせんちゃんあの男を覚えていないのかえ」

「いいえ」おせんは硬ばつた顔で、まだしつかりと、子供を抱いていた、「——いいえ知らないわ、あたし、あんなひと、誰かしら、幸坊を取りに来たんじやないかしら」

「そんなんじゃないよ、もとあんだの近所にて知ってるんだつてき、それならそれでもう少し挨拶のしようがあるうじやないか、
齒に衣きぬをきせたようなことを云つて、ひとをばかにしてるよ、こ

んど会つても知らん顔をしておいで」

お常はこう云つて裏へ去つた。

四

勘十はこの話を聞いて、梶平へでかけていった。杉田屋が大工の頭梁なら、梶平に消息を知った者がいるかもしれないと思つたのだ。友助に話してきいて貰うと、主人の久兵衛が知つていた。けれどもそう親しくはなかつたもようで、頭梁の巳之吉みのきちは火事みのとき腰骨を折り、女房を伴つれて水戸のほうへ引込んでしまった。が、その後は便りがないからわからないということだった。

「ところがわかつていねえというんだから手紙の出しようもねえ」
 帰つて来た勘十はお常にこう云つた、「——幸太てえ若頭梁もい
 たそうだが、これもあの晩どつかで死んだらしいつてよ、おせん
 坊もよつほど運がねえんだな」

こんなことがあつてまもなく、神田川の落ち口に地藏堂が出来
 た。その付近で火に焼かれたり川へはいつて死んだりした者の供
 養のためで、浅草寺からなにがしかいげんしき上しやうにん人とかいう尊い僧が来て
 開眼式かいげんしきがおこなわれ、数日のあいだ参詣の人たちで賑にぎわつた。
 ——おせんもすすめられて、お常といつしよに焼香をしにいった。
 そしてあれ以来はじめて大川をまぢかに眺めた。

「此処ここに橋があればよかつたんだ」

参詣人のなかでそんな話をしている者があつた。

「まつたくよ、どんなに小さくとも橋があればあんなにたくさん死なずに済んだんだ、なにしろ浅草橋の御門は閉る、うしろは火で、どうしようもなく此処へ集まつちやつたんだ、見られたありさまじゃなかつたぜ」

「橋を架けなくちやあいけねえ、どうしても此処にあ橋が要るよ」
「そんな話も出ているそうだぜ」

おせんは河岸に立つてじつと川を眺めていた。少し暑いくらいの日で、満潮の川波がまぶしいくらい明るく光り、かなり高く潮の香が匂ってくる。両国広小路のほうにはもう水茶屋が出来て、
葎簾よしず張りに色とりどりの暖簾のれんを掛けた小屋が並び、客を呼ぶ女た

ちの賑やかな声が聞えていた。——おせんは口の中でなにか呟いた。河岸に並んでいる古い柳、それはみんなまつ黒に焦げているが、枝の付根や幹のそこ此処からたいてい新しい芽が伸び、鮮やかな緑の葉が日にきらめいていた。おせんはその柳の並木を見まもった、なにかしら記憶がよみがえってくる、たぶたぶと波の寄せる石垣にも、水茶屋の女たちの遠い呼びごえにも、そして焦げたまま芽ぶいているその古い柳からは、誰かなつかしい人の話しかける言葉さえ聞えるようだ。……おせんは苦しそうに眉をしかめ、じつと眼をつむつたり、頭を振ってみたりした。記憶はそこまで出ている。針の尖で突いてもすべてがぱつと明るくなりそうである。動悸が^{どつき}高く、胸が熱くなって、額に汗がにじみだした。

「まあこんなとこにいたのかえ」

子供を抱いたお常が、こう云いながら近寄つて来た。参詣する人たちの混雑で見はぐれていたらしい。

「どこへいったのかと思つて捜してたじゃないの、どうしたのい
つたい」

「あたし此処に覚えがあるの」お常のほうは見ずにおせんがこう
呟いた、「——あたし此処を知っているわ、いつのことかわから
ないけれど、慥たしかに覚えがあるし、それに、誰かの顔も見えるわ」
「たくさん、たくさん、そんなことであたまを使うとまたぶり返
すよ、さあもう帰ろうおせんちゃん」

唯ならぬ表情をしているので、お常はこう云いながら腕を取つ

てせきたてた。そのときおせんは「庄さん」と呟いた。お常に腕を取られたとたん、ふつとその名が、あたまにうかんだのである。

「ああ」

おせんは身をふるわせ、両手の指をきりきりと絡み合せた。

「——庄さん」

「おせんちゃん、どうしたのさ」

「おばさん、わかってきた、あたしわかつてきたわ、庄さん、——と此処で逢った、あのひとは此処から上^{かみがた}方^{さえぎ}へいったのよ」

「いいからおせんちゃん」お常は不安そうに遮^{さえぎ}った、「——とにかく家へ帰ろう、ね、幸坊がもうおなかをすかしてるよ」

「待つて、もう少しだわ、だんだんわかってくるの、そうよ、庄さんは上方から手紙を呉れたわ」

おせんは両手で面を掩おおつた。いろいろな影像があたまのなかで現われたり消えたりする。黄昏たそがれの河岸、柳の枝から黄色くなつた葉がしきりに散つていた。

——おれの帰るのを待つていて呉れるな、おせんちゃん、それを信じて、安心しておれは上方へゆくよ。

蒼白い思いつめたような庄吉の顔が、いま別れたばかりのよう
にありありとみえる。それから戸板で担なぎこまれたお祖父さん、
裏のさかな屋の女房、露次ぐちにあつた棗なつめの樹、幾つもの研石や
半挿はんそうや小盥こだらひのある仕事場、みんなはつきりと眼にうかんでき

た。杉田屋のおじさんもお蝶おばさんも、幸太のことも。……おせんは顔を掩っていた手を放し、涙のたまった眼で、お常に頬笑みかけた。

「おばさん、あたしもう大丈夫よ」

「ああわかつてるよ」お常はほつとしたように、しかしまだ半分は疑いながらうなず頷いた。

「——時が来さえすればよくなるんだから、とにかくいちどに考え過ぎないほうがいいよ、さあ帰りましょうね、幸坊」

「あたしが抱くわ、幸ちゃん、さあいらつちやい」

おせんは幸太郎を抱きとり、固く肥えたその頬へそつと自分のをすりよせた。

それからは日にいちどずつ、願を掛けたようにお地藏さまへおまいりにいった。あたまもはつきりしてきたし、気持もすっかりおちついて、からだにも精がはいったような感じである。例えば洗濯をしているとき、はつきり自分が洗濯をしているということを感じる。道を歩きながら、自分がちゃんと地面を踏んで歩いていることを感ずる。あたりまえじゃないの、こう思いながらその「あたりまえ」が慥かなものだということに、形容しようのない嬉しさを覚え、われ知らずそつと微笑するのであった。

——おまいりをする往き来には河岸を通つて、いつときあの柳の樹の下に佇たたずむのが定きまりだった。幹や大枝のすつかり焼け焦げたその樹は、そこ此処から新しい芽や若枝を伸ばしたもののそれが

成長するだけのちからはないとみえ、若い枝はいかにも脆もろそうだし、葉はもう縮れたり黄色くなったりしはじめた。けれどもおせんがその樹蔭こかげに立てばなにもかもかえってくる、縦横すじに条のはいつた灰色の幹も、暗くなるほどしだれた細いたくさんの枝も、川風にひらひら揺れている茂った葉も、……庄吉の姿がそこにみえる、彼は笑おうとして泣くようなしかめ顔をしている、乾いたせかせかした声で、じつとこちらを見つめながら話す、それはますますはつきりと、いま耳もとで囁ささやかれるようによみがえってくる。

——待ってて呉れるね、おせんちゃん、おれの帰るまで、おれの帰るまで……。

勘十の商売はひと頃ほど儲もうからなくなっていた。家を建ててるに

はごく手軽にというお布令もあつたし、それ以上一般の不況が崇たつて、ちやんとした家を建てるものはごく少なく、なかにはお布令をしりめにみるような豪ごうしや奢な建物もなくはないが、たいていが仮造りでまにあわせるという風で、それも三月にはいつてからはいちおう建つものは建つたというかたちで大きな注文が殆んどなくなつてしまつた。古河のほうへはその後も大量に買いつけてあつたので、四月になつても送られて来る荷が、はげきれないまま物置からはみだし、空地に積まれて雨ざらしになるといふ始末だつた。——売つた代だいぎん銀の回収も思うようにいかないようで、荷主からの督促に追いかけられ、その云いわけや、買いつけたあとの荷を断わるために、勘十が幾たびも、古河へいつたりした。

「馴れねえことに手を出すもんじゃあねえ」

こんな風に云つて溜息ためいきをつくことが多くなり、百姓たちの狡こ

猾うかつさや、大工左官の親方たちのずるがしこさを罵つた。更けて

から行燈のそばで財布をひろげ、帳面と算盤そろばんを前に夫婦でなが

いことひそひそなにか話している、そんなときおせんは幸太郎と

添寝そりねをしながら、世の中のくらしにくさ、生きてゆくことの艱かん

難なんを思い、冷たい隙間風さちかぜに身を曝さらしているような、さむざむと

した心ぼそさにおそわれるのであつた。

末すぼまりになつたとはいえ、そのままゆけばとにかくその

商売にとりつくことはできたかもしれない。荷のはけも悪く儲け

も少なくなつたが、「藁屋」としてはかなり知られてきたので小

さなあきないはそれ相当にあつた。また近いうちに町家を取払つた跡へ書替役所が建つそうだし、松平なにがしの下屋敷も地どりを始めたから、もしてがかりがつけばかなりな仕事になる。それでそのほうへも内々できっかけをつけていたのだが、不運なことにそこへ水禍が来て、すべてを押し流されるようなことになつてしまつた。

——その年はから梅雨のようで、五月から六月の中旬まで照り続け、近在では田植あとの水が不足で困つているといふ噂もたびたび聞いた。それが六月十五日から雨になるとこんどはやむまもなく降りだし、三十日から七月の一日二日にかけて豪雨、それこそ車軸をながすようなどしや降りとなつた。

「二度あることは三度というが、こいつはことによると水が出るぜ」

そう云う者もあつたが、老人たちはたいてい笑つて、

「昔からなが雨に出水でみずはないと云うくらいだ、心配するほどのことではないさ」

こんな風に云つていた。しかし、あとでわかつたことだが、この豪雨は関東一帯に降つたもので、刀根川とねがわや荒川の上流から山水が押し出し、下しも総猿うさざるが股またのほか多くの堤が欠壊したため、隅田川の下流は三日の深夜からひじょうな洪水にみまわれたのであつた。

五

幸太郎は粥を喰べるようになってから却^{かえ}つておせんの乳房を欲しがった。起きているときはさほどでもないが、寝るときは握っているか口に含んでいないと眠らない。初めはとても擦^{くすぐ}つたくて我慢できなかったが、どうしてもきかないので少しずつ触らせているうち、慣れたというのだろうか、その頃ではさして苦にもならず、どちらかといえば自分から与えてやるようにさえなっていた。

「吸つちやあいやよ、幸ちゃん、吸うと擦^くつたいからね、ただ銜^{くわ}えてるだけ、そう、こつちのお手々もそうやって握るだけよ、乳

首をつままないでね、ああちゃんとっても擦ったいんだからね、
そうそう、そうやっておとなしくねんねするのよ」

添寝をして片乳かたぢを口に含ませ片乳を握らせていると、ふしぎな
一種の感情がわいてきて、思わず子供を抱きしめたり頬を吸って
やりたくなることがある、からだぜんたいが、あやされるような
重さ、こころよいけだるさに包まれ、どこか深い空洞へでも落ち
てゆく陶酔と、なんのわずらいも心配もない安定した気持とを感
ずるのであった。

——三日の夜は幸太郎の寝つきが悪く、いくたびも乳をつよく
吸っておせんを驚かした。十時ころにいちど用を達たさせ、それか
ら少しうとうとしたと思うと、痛いほど激しくまた乳を吸われた。

からだじゅうの神経がひきつるような感覚におそわれ、おせんは
思わず声をあげて乳を離させた。

「いやよ幸ちゃん、吃びっくり驚するじゃないの、どうして今夜はそう
おとなしくないの」

「ああちゃん、ばぶばぶ、いやあよ」

「なあに、なにがいやなの」

こう云って頭をもたげたとき、すぐ表のところまで水の中を人の
歩く音が聞えた。まだ眠けはさめきつていなかったが、おせんは
ただごとでないと思つてとび起き、

「おばさん、おばさんたいへんよ」

と、叫びだした。

それからあとの出来事は記憶が慥かでない。勘十がまず表へ見に出ようとして、「これあいけねえ土間がもういつぺえだ」と喚いたこと、なにかを取出したり包んだりする夫婦のひどく狼狽ろうばいしたようす、すぐ近くで「水だ、水だ、みんな逃げろ」と呼びたてる声が出たこと、幸太郎を背負つて、てまわりの物を包んで、お常の手から奪ひぎうようになり大きな包を受取つて、裏へ出るとそこがもう膝ひざにつく水だったこと、まっ暗な夜空に遠くの寺で撞つく早鐘や半鐘の音が、女や子供たちの呼び交かわす悲鳴とともに、悪夢のなかで聞くようなすさまじい響きを伝えていたことなど、殆んどがきれぎれの印象としてしか、残つていなかつた——そのなかで忘れることのできないのは、背に負つた幸太郎のことであ

る。おせんは怖がらせまいと思つて、絶えずなにかしら話しかけていた。

「ほらじやぶじやぶ、おもちろいわねえ、じやぶじやぶ、みんなしてじやぶじやぶ、幸坊も大きくなつたらじやぶじやぶねえ」

「ああちゃん、ばぶばぶ、おもちよいね、はは」

子供は背中ではねた。笑いごえもたてた。しかし同時に震えていた。怖いのだ、怖いけれども自分でそれをまぎらわそうとしてゐる、こんな幼い幸太郎が、……おせんはいじらしさに胸ぐるしくなり、いくら拭いても涙が出てきてしかたがなかつた。

「強いのお幸坊は」おせんは首をねじるようにして頬ずりした、

「——なんにも怖くはないのよ、ね、じやぶじやぶ、みんなで観

音さまへいきまちよ、はいじやぶじやぶ」

勘十夫婦とどこではぐれたかも覚えはなかった。猿屋町さるやちようあたり

りでお常が忘れ物を思いだし、「あれだけは」と泣くような声をあげた。あきら諦めろとか引返すとか云うのを聞きながら、揉もみ返すひとなみに押されてゆくうち、気がついてみると二人はみえなくなっていた。湯島の天神さまへということはどうもあわせてあったので、いずれは会えると思い、そのまま避難者の群といっしょに湯島へいってしまったが、それが勘十夫婦との別れになったのであった。

聖堂の裏の空地に建てられたお救い小屋で、おせんはまる十日のあいだ窮屈なくらしをした。そのあいだにずいぶん捜しまわっ

たが、勘十にもお常にも会えず、見たという者さえなかった。そのときの水は本所と深川を海のようにし、西岸も浅草通りを越して、上野の広小路あたりさえ道に溢れ、あふ四日ばかりは少しも減るようすがなかった。——だが夫婦はみがるのこともあり二人いっしょだから、どう間違つても溺れるようなことはないであろう、家へ帰れば会えるにちがいないと思つていた。

水は七日めあたりから退きはじめた。おせんは子供を負つて、まだ泥水が脛はぎまでであるうちからなんども平右衛門町へいった。あたりはひどいありさまで、流されたり毀こわれたりした家が多く、勘十の大きな物置などかたちも無かつたが、住居のほうは小さいのと藁や蓆が絡みついたためか、少し傾いただけで残っていた。十

日めには床もやや乾いたし、梶平にいる友助の女房がすすめるので、お救い小屋をひきはらつて来たが、勘十夫婦はやはり姿をみせず、そのままついに会うことはできなかつた。

おせんが本当に生きる苦しさを経験したのはそれからこのことであつた。それまでは勘十とお常がいて呉れたし、半分はあたまをいためてもののけじめも明らかではなく、苦勞というほどの思いはせずに済んで来た。けれどもこんどは自分のちからで生きなければならぬ、さいわい住居だけはある、友助の女房がいろいろ気を配つて、古いものだが蒲がまの敷畳も入れて呉れたし、屋根や羽目板のいたんだところも直して呉れた。まだ暑い季節なので寝起きもすぐに困りはしなかつた。だがたび重なる災難で世間一

般に生活のゆきづまりがひどく、誰にしても他人の面倒などみている余裕はない、おせんはまず友助の好意で材木の屑をわけて貰い、それを売り歩いて僅かに飢をしのぐことから始めた。

——庄さんは帰って呉れないかしら。

心ぼそくなるとよくそう思った。

——去年の地震や火事のことを聞かなかつたのかしら、あんなにひどかつたのだもの、上方へだつて評判がいった筈なのに、もしも聞いたとしたら、せめて手紙ぐらい呉れてもいい筈なのに。しかしそのあとからすぐ自分を叱った。

——手紙のやりとりなどすると心がぐらつくから当分は便りをしてこない、そつちからも呉れるな、いつかはつきりとそう書いて来

たじやないの、二人が早くいつしよになるために、あのひとは脇眼もふらず働いているんだわ、つまらない愚痴など云つては済まないじやないの。

秋風の立つじぶんから、おせんは足袋のこはぜかがりを始めた。まえに仕事を貰った家の親おやだな店だそうで、御蔵前おくらまえに店があつた。火事からこつち皮羽折や皮の頭巾を作ることがたいそう流行したため、皮が高価でまわらず、足袋は木綿ひといろであつたが、仕事は追われるほどあるし皮よりも手間が掛らないので、子供の相手をしながらでも粥ぐらいはすす噉れる稼ぎになつた。——寒さがきびしくなり、朝な朝な霜のおりる頃に、おせんは仕事を届けにゆく道で思いがけない人に会つた。天王町てんのうちようから片町かたまちへはいる

ところに小さな橋がある。そこまで来ると横から名を呼ばれた。

「あら、おせんちゃんじゃないの」

振り返ると若い女が立っていた。濃い白粉おしろいとあざやかすぎる口

紅が眼をひいた。髪かたちも着ている物も派手なうえに品がない、誰だろう、思いだせずにいると女はふところ手をしたまま寄つて来た。

「やっぱりおせんちゃんだね、あんた無事でいたんだね」女は上から見るような眼つきをした、「——あたし死んじやつたかと思つてたよ、いまどこにいるの、それあんたの子供なのかえ」

「まあ」おせんは息をひいて叫んだ、「——おもんちゃん、あんた、おもんちゃんじゃないの」

「なんだ、いまわかつたの、薄情だね」

おもんは男のように脇を向いて唾をした。おせんはぞつと身ぶるいが出た、なつかしい友である。福井町ふくいちょうのお針の師匠でいっしよになり、ただ一人の仲良しとしてつきあっていた。家は天王町で丸半まるはんというかなりな油屋だったし、彼女はそのひとつぶだねで、縹きりよう緞もよしおつとりとしたやさしい氣質の娘だった。それがこんなに変ってしまった、変ったというよりまるで別人ではないか、濃く塗った白粉でも隠すことのできない膚の荒れ、紅をさしたために却って醜く乾いてみえる唇、濁ったもの憂げな眼の色、そしてからだ全体しわの、どこか線の崩れただるそうな姿勢、病気でもあるらしい嗔しわがれてがさがさした声、——どの一つを取っ

ても昔のおもかげはない、おもんであることは慥かだが、しかしそれはもう決しておもんではなかった。なつかしいという気持は一瞬に消えて、おせんはそのまま逃げだしたくなつた。

「あたしの家もきれいに灰になつたよ、感心するくらいきれいさつぱりさ」おもんはひとごとのようにこう云つた、「——おつ母さんと小僧が焼け死んじやつた、面白いもんだね、人間なんて、お酒もろくに飲まなかつたお父つあんが、いまじゃあ酔つぱらつて泥溝どぶの中で寝るし、さもなきや番太の木戸へ縛りつけられてるわ、そしてこれもまんざら悪くはねえなんて、……あんた御亭主をもつたの」

「いいえ、この子はそうじゃないの、あたしひとりだわ」

「どうだかね」おもんは不遠慮にこちらを眺めまわした、「あんた楽じゃないらしいね、ふん、この不景気じゃ誰だつて堪らないから、飢死をしないのがめつけものさ、いまどこにいるの」

「平右衛門町の中通りにいるわ」

「変つたわねあんた」もういちどじろじろ見まわしておもんは激しく咳せいた、「——なにか困ることがあつたらおいでよ、あたしお閻魔えんまさまのすぐ裏にいるからね、もしなんなら少しお小遣をあげようか」

そしてふところ手の肩を竦め、唾をして向うへゆきかかったが、ふとなにか思いだしたというように振返つて云つた。

「ああおせんちゃん、あんた庄吉つていうひと知ってるかい」

六

おせんは首を振った。それが自分の庄吉であろうとは夢にも思えなかつたのだ。

「知らないの、へんだね」おもんはちよつと考えるように、「――あんたのことをとでもしつっこく訊きくんだよ、上かみがた方へいつてこんど帰つて来たんだつて、じゃあひと違いなんだね」

おせんはああと叫び声をあげた。

「そのひと、おもんちゃん、そのひとどうしたの、あんた会つたの、どこで」

「あらいやだ、知ってるの」

「ええ知ってるわ」おせんは恥ずかしいほど声がふるえた、「教えて、いつ来たのそのひと、どこにいるの」

「そんなことわからないよ、お客で会ったんだもの、どこで聞いたのかあたしがおせんちゃんと仲良しだというんで来たらしいわ、そう、一昨日の晩だったかしら、あたし生き死さえ知らないからそう云ったら、——そうそう、あたしあたまが悪いな、思いだしたよ、そのひと杉田屋の幸太さんのこと云ってたわ」

「幸さんのことを、……なんて、——」

「そんなこと覚えちやいないさ、はんとき半刻ばかりじくじく云つて、酒もひと猪口ちよこかふた猪口のんだくらいで帰っていったよ、あれ、

あんたのなにかなのかい」

「どこにいるか云わなくって、あんたのところへまた来やしない」

「わからない、あたしあなんにも知らない、ただ思いだしたから聞いてみたまでのことさ、でもなにか言ことづて伝があるなら云ってあげるよ、たいてい来やしまいと思うけどね」

「お願いよ、おもんちゃん」息詰るような声でおせんは云った、
「——会ったら云って頂戴、あたし生きてるって、平右衛門町の中通りにいるって、待っているって、そう云って頂戴、ねえ、待っているって、……」

風はないがひどく凍いてる夕方だった。寒いからであろう、背中でしきりに子供がぐずった、しかしおせんはあやすことも忘れた。

お店^{たな}へ仕上げ物を届け、手間賃と次の仕事を貰つて家へ帰るまで往き来とも殆んど走りつづけた。そのあいだに庄吉が来ているかもしれない、留守で帰ってしまったらどうしよう。そう思うと足も地につかない感じだった。

——もちろん誰も来てはいなかったし、来たようすもなかった。おせんはその夜いつまでも寝ることができず、二時の鐘を聞いてからも行燈をあかあかとつけ、こごえる手指に息を吹きかけながら、足袋のこはぜをかがっていた。

——本当に庄さんだろうか、もしそうならどうして此処へ来て呉れないのだろう、おもんちゃんを訪ねるくらいなら此処だつてわかる筈なのに、……それとも人が違うのかしら。

そんなことを繰り返し思った。

なか二日おいた朝、粥を拵こしらえているところへ友助の女房が寄つた。そつと覗のぞいてから、そこまでわかめを買いに来たと云い云い土間へはいつて来た。乳を貰つたので、幸太郎は彼女を見ると嬉しそうに手足をばたばたさせ、わけのわからないことを喚きたてる。友助の女房はその頭を撫なでながら、「庄さんてひとを知つてるかえ」と云つた。——おせんはびくつとして振向いた。女房はちよつと云いにくそうな調子で、

「五日ばかりまえから梶平の旦那のところへ泊つてるんだがね、なんでもあんたを知っているらしい、あたしやなんだかわからない、うちのが聞いて来たんだけれどね」

「おばさん」おせんは叫んで立上った、「——そのひとまだいるの、梶平さんにまだいるのそのひと」

「今日はまだいるわ、でももうどこかへゆくらしいんだよ、あたしやよく知らないんだけどね、うちのが聞いた話だとなにかあったとわけがあるらしい、それでちよいと耳に入れて来いと云われたもんだからね」

「有難う、おばさん、あたし会いたいの」おせんは息をはずませて云った、「——すぐにも会いたいの、おばさん、この子に喰べさせたらゆくから会わせて頂戴」

「ああおいでよ、うちのがああ云うんだからなんとか出来るさ、でもあのひとあんとどんなわけがあるの」

「あとで、あとで話すわ、おばさん、あたしすぐいきますからね」
子供に粥を喰べさせるあいだも、もどかしいおちつかない気持
で、思わず叱る声のとげとげしさに幾たびもはつとした。自分は
喰べないでそこそこにしまい、子供を抱いて梶平へいった。――
仕事場のほうからはいつてゆくと、店の裏にある長屋のかどぐち
に、友助の女房が子供を負つて誰かと立ち話をしていた。おせん
が近寄つてゆくと、手を出してすぐに幸太郎を抱きとり、「向う
の置き場のところにおいでな」と云つて、あたふた店の脇のほう
へいった。

新しい木肌をさらして、暖かい日をいっぱいにあびて、
角かくに鋸ひ
いた材木がずらつと並んでいる。あたりは酸いような木の香がつ

よく匂い、すぐ向うの小屋から職人たちの鋸いたり削ったりする音が聞えてくる。おせんは苦しいほどに胸がときめいた、たぶん蒼くなっているだろう、そう思つて額から両の頬を手でこすつた。あしかけ三年ぶりである、白粉をつけ紅をつけたかつた、髪も結い着物も着かえて、いくらかでも美しい姿をみて貰いたかつた。

しかし生きているだけが精いっぱいのくらしである、辛うじて死なずにやっている身のうえでは、紅白粉どころか、丈夫でいることを、せめてもの自慢にするほかはなかつた。——うしろに足音がした。おせんは全身のおののきにおそわれ、こらえ性もなく振返つた。そこには庄吉がいた。まぎれもない庄吉が縞の布子に三尺を締めて、腕組みをして、灰色の沈んだ顔をしてこつちを見て

いた。

「庄さん」おせんはくちごもった、「——あんた、帰ったのね」

庄吉は投げるように云った。

「ああ、だが帰らなきやよかったよ」

おせんにはその言葉が耳にはいらなかった。とびつきたかった、向うでとびついて呉れると思った。からだは火のように熱く、あたまがくらくらするように感じた。

「そしてもう、ずっとこっちにいるの」

「どうするか考えてるんだ、——もういちど上方へいってもいいし、……こっちにこのままいてもいいし、おんなしこった」

「あたし、ねえ」おせんはそつとすり寄ろうとした、「——庄さ

ん、あたし、ずいぶん辛いことがあったのよ」

庄吉はすつと身を退いた。組んでいた腕を解き、凄^{すこ}いような眼でこつちを見た。

「そんなことまで云えるのか、おせんちゃん、おれに向つて辛いことがあったなんて、それじゃあおれは辛くはないと思うのか」

「どうして、庄さん、どうしてそんな」

「おまえは、あんなに約束した、待っているって、おれの帰るのを待っているって、おれはそれを信じていたぜ、お前の云うことだけは信じられると思つて、それこそ冷飯^{ことう}に香^こいで寝る眼も惜しんで稼いでいたんだぜ」

「だってあたし、どうして、……あたしちゃんと待ったじゃない

の

「じゃあ、あの子は、誰の子だ」庄吉はあからさまな怒りの眼で云った、「——地震と火事のあとで水害、困っているだろうと思つて帰つて来たんだ、ところがどうだ、断わつておくが云いわけはやめて呉れよ、おれは、みんな聞いたんだ、おまえの家が幸太の御妾宅だと評判されていたことも、そしておまえが幸太の子を産んだことも」

おせんは笑いだした。余りに意外だったからであろう、自分ではそんな意識なしにとつぜん笑いがこみあげてきたのだ、しかし表情は泣くよりもするどく歪ゆがんでいた。

「笑うなら笑うがいい、おまえにはさぞおれが馬鹿にみえるだろ

う」

「あたしが幸さんの子を産んだなんて、あんまりじゃないの、そんなばかな話、まさか本当だなんて思やしないでしょう」

「云いわけは断わると云つてあるぜ、自分で近所まわりを聞いてみるがいい、幸太がおまえの家へいりびたりということは、去年の春あたりもう耳にはいつてた、それでもおれは大丈夫まちがいはないと思つてたんだ、——ところがこんどは幸太の子を産んだと云う、そして、おれはこの眼でその子を見たんだ」

「そんな話、どこから、誰がそんなことを云つたの」

「おまえとは筋向いにいた人間さ、始終おまえのようすを見ることのできる者さ、云つてやろうか、……山崎屋の権二郎だよ」

おせんはようやく理解した。庄吉が自分を訪ねて来なかつたわけ、とびつきもせず、よろこびの色もみせないわけが。それどころかたいへんな思い違いをして、自分との仲がめちやめちやになろうとさえしていることを。

——どう云つたらいいだろう、権二郎、ああ、あの頃からもう告げ口をしていたんだ、大阪へ飛脚でゆくたびに、このひとと会つて無いことをあれこれと云つたに違いない、このひとはそれを信じている。うち消さなければならぬ、本当のことを知つて貰わなければ、……きらきら光る眼で、じつと相手を見つめながら、けんめいに自分を抑えておせんは云つた。

「あの子は火事の晩に拾つたのよ、庄さん、親が死んじやつて、

ひとりでねんねこにくるまれて泣いていたの、もうまわりは火で
いっぱいだったわ、あたしみごろしに出来なかつたの、——これ
が本当のことよ、庄さん、あたし約束どおり、待ってたのよ」

おせんは両手で面をおお掩い、せき堰を切つたように泣きだした。庄吉
はながいこと黙つて、冷やかな眼でおせんの泣くさまを眺めてい
た、それからふと低い声で、まるでなにごとか宣告するようにこ
う云つた。

「それが本当なら、子供を捨ててみな」

「——」

「実の子でなければなんでもありあしない、今日のうちに捨てて
みせて呉れ、明日おれが証拠をみにゆくよ」

おせんは涙でぐしやぐしやになった顔をあげた、唇がひきつり、眼が狂ったような色を帯びていた。おせんはふるえながらうなずいた。
「ええ、わかったわ、そうするわ、庄さん」

七

おせんは一日うろうろして暮した。——幸太郎を抱きづめにし
てなんども出ては、ちぎり飴や、すすき芒で拵えたみみずくや、小さな
犬張子などを買ってやった。

——庄さんの云うのももつと尤もだわ。

彼女はこう思った。何百里という遠い土地にいて、権二郎の云

ったような告げ口を聞けば、愛している者ほど疑いのわくのは自然である。まして現にその子供を育てている姿を見たのだ、あきらかに否定する証拠がない限り、事実だと思うのはやむを得ないかもしれない。——庄吉はこのままこつちにいてもいいと云った、自分が証拠をみせれば二人はいつしよになれる、この家でいつしよに暮すことができるのだ。

「ああちゃんを堪忍してね」おせんは子供を抱きしめる、「——あんたがいるとああちゃんの一生が不幸になってしまふのよ、待ちに待っていたひとが帰って来たの、ああちゃんの大事な大事なひとなの、あのひとなしにはああちゃんは生きてゆけないのよ、ねえ幸坊、わかってお呉れ、堪忍してお呉れね」

あの火の中から抱きとり、腰まで水に浸りながら、身を蓋にして危うくいのを助けた。自分で自分のことがわからず、他人の世話になりながら、満足におむつを変えることさえ知らなかったのに、ともかく今日まで丈夫に育てて来た。云ってみれば、ほんの偶然のめぐりあわせであつた。なんの義理も因縁もなかつたのにこれだけ苦労して来たのだ。もう誰かに代つて貰つてもいいだろう、ことによると自分の手を離れるほうが、却つてこの子の仕合せになるかもしれない。

「そうよ幸坊、どんなお金持のひとに拾つて貰えるかもしれないんだもの、そうでなくつてもああちゃんのような貧乏な者に育てられるよりずっとましだわ、そうだわねえ幸坊」

夕餉ゆうげには卵を買つて、精しらげた米で、心をこめて雑炊を拵えた。それから戸納とだなをあけて大きい包を取出した。洪水の夜、逃げるときにお常から預かつたものである、勘十夫妻の身寄りの者でも来たら渡そうと、手もつけずに納つておいたのであるが、今日になるまでそんな人もあらわれず、いま幸太郎に付けてやる物がなにも無いので、ふと思いついて出してみた。——それはお常の物であつた、さほど高価な品ではないが、まだ新しい鼠小紋の小袖や、太織縞あわせの袷あわや、厚板の緞子どんすの帯や、若いころ着たらしい華やかな色の長襦袢ながじゆばんなどが、手入れよく十二三品あつた。おせんは太織縞の袷二枚と長襦袢を二枚わけ、手拭を三筋と、洗つた子供の物と、玩具や飴などをひと包にし、でかけるしたくが終つてから、

子供と二人で食卓についた。

「さあたまたまのうまよ、おいちいのよ、幸坊、たくちゃん喰べてね」

「たまたまね、はは」子供は木の匙さじでお膳ぜんの上を叩き、えくぼをよらせてうれしそうに声をあげた、「——こうぼ、うまうまよ、ああちゃんいい子ね、たまたま、めっ」

「あら、たまたまいい子でちよ、幸坊においちいおいちいするんですもの、ああちゃん悪い子、ああちゃん、めっ」

「ああちゃんいい子よ、ぼぶ」子供はこわい顔をする、おせんはいつもいい子でないといけない、おせんが自分を叱ってみせたりすると子供は必ず怒る、「——ああちゃん、わるい子、ないよ、

いやあよ、ああちゃんいい子よ」

「ああいい子でちゅいい子でちゅ、ああちゃんいい子ね、はい召
上れ」

「といで、ね、こうぼといでよ」

木匙は持たせるがまだ独りでは無理だ。しかし誕生からみ月にはなるらしいし、ぜんたいにませた生れつきとみえて、お膳のまわりを粥だらけにしても独りで喰べないと承知しない。今夜はやしなつてやりたかったが、どうしてもきかないので好きにさせた。自分も冷たい残りの粥に、幸太郎の卵雑炊を少しかけ、別れの膳という気持で箸^{はし}を取った。

家を出たのは七時ごろであろう。着ぶくれて眠つたのを背負い、

包を抱えて、暗い露次づたいに表通りへ出ると、知った人にみつからないように、気をくばりながら浅草寺のほうへ歩いていった。風もないし、その季節にしては暖かい夜だった。そのためか往来の人もかなりあるし、腰高障子の明るい奈良茶の店などでは、酔って唄うにぎやかな声も聞えた。——もうなんにも思うのはよそう、ただこの子の仕合せだけを祈ってしよう。自分の心のこえから耳を塞ぐふさぐような気持で、繰り返しそう呟いた。胸が痛み、動悸どうきが高く激しくなる、だがおせんは唇を噛みしめ、俯向うつむいて、ときおり頭をつよく横に振ったりしながら、追われる者のようにひたすらに歩いていった。

浅草寺の境内へはいったが、さてどこことなるとなかなか場所が

なかつた。奥山には蓆むしろが掛けの見世物小屋がもちろんもうしまつたあとでひっそりと並んでいる。小屋の中なら暖かいが、そんな稼業の者の手には渡したくない。本堂から淡あわしま島さまのほうをまわつてみた、けれども此処ならという処がどうしてもみつからないのである。

「あたし気が弱くなつたんだわ、ここまできて捨てられなくなつたんだわ」おせんはふと立停つてから呟いた、「——子を捨てるのにいい場所なんてある筈がないじゃないの、もう思い切らなければ」

そこは鐘楼のある小高い丘の下だつた。すぐ向うに池があり、鯉や亀が放つてあるので、おせんは小さいじぶんよく遊びに来た

ものだ。此処にしようど決心して、紐ひもを解き、背中から子供を抱きおろした。——子供は眠ったまま両手でぎゅつとしがみつぎ、仔猫こねこのするように顔をすりつけた。

「おおよちよち、ねんねよ、おとなにねんねよ幸坊」

おせんは抱きしめて頬ずりをしながら、しずかにねんねこで子供をくるんだ、

「——堪忍してね、ああちゃんの一生のためだからね、いいひとに拾われて仕合せになるのよ、ああちゃんを仕合せにして呉れるんだから、きつと幸坊も仕合せになつてよ、……ああちゃんそればっかり祈っているわね」

しがみついている手をようやく放し、そこへ置いた包を直して、

自分も横になりながらそつと寝かせた。どこか遠くで酔った唄ごえがしていた。三味線の音もかすかに聞える。おせんは静かに身を起こした、足がわなわなと震えだし、喉がひりつくように渴いた。

——さあ早く、いまのうちに。

おせんは夢中で歩きだした。耳がなにか詰められたように、があんとして、いまにもたちくらみにおそわれそうだった。

——早く、早くいつてしまうんだ。

おせんは走りだした。するとふいに子供の泣きごえが、聞えた、「ああちゃん」という声はつきりとするどく、すぐ耳のそばで呼ぶかのように聞えた。子供の手がぎゅつと肩を掴む^{つか}、子供は身

をかたくして震えている。震えながら奇妙なこえで笑った。「はは、ばぶばぶね、ああちゃん、ははは」それは出水の中を逃げるあのときのことだ、恐ろしいということを感じていながら、おせんの言葉に合わせてけなげに笑ってみせた。ああ、おせんは足が竦み、走れなくなつて喘あえいだ。

——堪忍して幸坊、堪忍して。

両手で耳を掩い、眼をつむつて立停つた。子供の泣きごえはさらにはつきりと、じかに胸へ突刺さるやうに聞えた。「ああちゃん、かんにんよ、こうぼいい子よ、めんちやい——」

おせんは喘いだ、髪が逆立つかと思えた、そして狂氣のやうに引返して走りだした。

子供は泣いていた。ねんねをひきずりながら、地面の上を四五間もこつちへ這^はいだし、こくんこくんと頭を上下に振りながら、ああちゃんいやよ、ああちゃんいやよと声いっばいに泣き叫んでいた。——おせんはとびつくように抱きあげ、夢中で頬ずりをしながら叫んだ。

「ごめんなさい幸坊、悪かった、悪かった、ああちゃんが悪かった、ごめんなさい」

しがみついてくる子供の手を、そのままふところへいれて乳房を握らせ、片方の乳房を出して口へ含ませた。

「捨てやしない、捨てやしない、どんなことがあつたつて捨てやしない、どんなことがあつたつて」

おせんはこう叫びながら泣いた。

「——幸坊はあたしの子だわ、あたしが苦勞して育てて来たんじゃないの、誰にだって捨てろなんて云われる筈がないわ、たとえ庄さんにだって、……ねえ幸坊、あたし幸坊もう決して放しやしくなくつてよ」

子供は泣きじやくりながら、片手できつく乳房を握り、片乳へ顔のうまるほど吸いついていた。おせんはやがて立ちあがり、抱いたまま上からねんねこでくるみ、包を持って、やや風立って来た道を家のほうへ帰っていった。

明くる朝、子供を負って洗濯物を干していると、庄吉が来た。彼は歪んだ皮肉な顔つきで、道のほうからこつちを眺めていた。

それからそばへ寄つて来た。——おせんはできるだけのちからで微笑し、相手の眼をみつめながら吃り吃り云つた。

「ごめんなさい、庄さん、あたしゆうべ、捨てにいったのよ」

「——でもそこに負つておふるね」

「いちど捨てたんだけれど、可哀そうで、とてもだめだったの、庄さんだつて、とても出来ないと思うわ」

「——わかつたよ、証拠をみればいいんだ」

「ねえ、あたしを信じて」おせんは泣くまいとつとめながら云つた、「——本当のことはいつかわかる筈よ、あたし待ってるわ」

庄吉はなにも云わずに踵きびすを返した。くるつと向き直つて道のほうへ歩きだした、おせんはふるえながらそのうしろへ呼びかけた。

「庄さん、あたし待っててよ」

しかし彼は振向きもせず去っていった。

後篇

一

十二月にはいると間もなく幸太郎が麻疹はしかにかかった。その十日ほどまえから鳥越とりごえのほうに、疱瘡ほうそうがはやると聞いたので、御おくらまえ蔵前くらまえにある佐野正さのしょうの店へ仕事のために往き来するおせんはそのほうを心配していたし、病みだした初めのうちもてつきり疱瘡だろうと思つたのであるが、五日めになつて医者が発疹はっしんのもようをみたうえたぶん麻疹だろうと云い、そのとおりの経過をとりだしたのでいちおう安心した。じつはその少しまえ、幸太郎が乳を貰つていた友助の家で、その子の和助というのが麻疹にかかつていた。乳が同じであるし、生れ月も近いしおまけに看病のしやすい年恰好だから、本当ならうつして貰つてもさせるところなのだが、和助のは性しょうが悪いらしいということで、向うから近づかな

いようにと注意されていたのである。——そんなことから麻疹だとわかつてひと安心しながら、もしやその性の悪いのがうつっていたのではないだろうかとも思い、発疹が終つて熱のひくまでは瘦やせるほど気をつからせてしまった。

幸太郎は半月ほどできれいに治つたが、その前後からおせんは友助夫婦のようすの変つたことに気づいた。和助という子は生れつき弱いところもあつたとみえて、幸太郎がよくなつてからも唇のまわりや頭などに腫はれもの物のようなものが残り、それがなかなか乾かないで困ると云っていたがそんなことを口実のように、夫婦ともおせんから遠退とおのこうとする風がだんだんはつきりしました。かれらとは水で亡くなつた勘十夫婦のひきあわせで、知りあい、

幸太郎のための乳から始まつてずいぶん世話になつてきた。友助というひとは材木問屋の帳場を預かるくらいで、くちかすの少ない律義な性分だし、女房のおたかもお人好しと云われるくらい、善良でおとなしかつた。出水のあと、おせんのためにその住居を直して呉れたり、仕事場から出る木屑を夜のうちにそつと取つておいて呉れたり、また幸太郎の肌着にと自分の子の物をわけて呉れたり、そのほかこまごました親切は忘れがたいものである。勘十夫婦に亡くなられたいまのおせんには、殆んど頼みの綱ともいうべきひとたちであつた。それがどうしたわけかこちらを避けはじめた。道などで会えば口をききあうが、それも以前とは違つてよそよそしく、とりつくろつた調子が感じられた。——いつたい

なにがあつたのだらう。なにか気に触るようなことでもしたのだらうか。考えてみたけれどもそれと思ひ当ることはなかつた。

もうかなりおし詰つてからの或る日、おたかが珍しく訪ねて来たので、しかけていた夕餉ゆうげのしたくをそのままに出てゆくと、彼女はいつしよに伴つれて来たらしい中年の男に振返つて、この家ですよと云つた。男は四十五六になる小肥りの軀からだつきで、日にやけた髭ひげの濃い顔にとげとげしい眼をしていた。

「おせんちゃん、このひとは下しもうさ総こがの古河からみえた方でね、お常さんの実の兄さんに当るんですつてよ」

「まあお婆さんの、——それはまあ……」

おせんは寒いような気持におそわれた。これまでながいこと待

つていたのに誰もあらわれず、もうこのままおちつくのだと思つていたが、こうして亡くなつたひとの兄が来たとなると、もしかすればこの家を出てゆかなければならなくなるかもしれない、そんなことになつたらどうしよう。なによりも先にそういう不安がわいてきたのであつた。——ひきあわせが済むと、おたかはすぐに帰つていった。男はおせんに水を取らせて足を洗い、ぬいだ草わ鞋らじと足袋を外へ干してから上へあがつて 蓆たばこいれ入れをとり出した。どうするつもりだろう、おせんは、ますます強くなる不安のなかで、ともかくも夕餉の量を殖ふやし、乾ほしやかな魚なを買いに走つたりした。男は、もともと無口なのか、食事が済むまで、殆んど口をきかなかつた。頬とがの尖つた髭がの濃い顔には少しも表情がなく、くぼ

んだ眼だけが怖いように光っている、その眼でなんども部屋の中を見まわしたり、幸太郎の騒ぐのを、うるさそうに睨にらんだりするばかりだった。そんな客が珍しいのだろう、子供はじいたんじいたんと云つて、まわらない舌で頻しきりに話しかけたり笑つてみせたりした。うっかりすると膝ひざへ這はいあがろうとするので、おせんは食事が終るとそうそう、厭いやがるのを負おふつてあと片付けをした。：

：朝のしかけも済んでしまったが男はおちついて莧あざを吸つていた、百姓をする人に特有の少しごみかげんな逞たくましい肩つきや、辛抱づよくなにごとかを待っているという風な姿勢をみると、どうにもそこへいつて坐る気になれず、おせんはまるで身の置き場に窮きつした者のように、狭い台所でいつとき息をひそめるのであった。

「用が済んだらこつちに来なさないか」物音が止んだのに気がついたとみえ、男が向うから呼びかけた、「——それからだいな冷えるが、火が有ったら貰えまいかね」

「済みません、火をおとしてしまいました、あとう」おせんは赤くなつた、「小さいのがいて危ないもんですから、家の中へは火を置かないようにしていますので、つい」

男はまた黙つて部屋の中を見まわした。おせんは消した焚たきおとして火を作ろうかと思つたが、それだけあれば朝の煮炊きが出るので、そのままそつと部屋の中へはいつてゆき戸納とだなからあの風呂敷包をそこへ取り出した。

「これは水の晩にあたしがお常さんのおばさんから預かつたもの

ですの」

「あらましのことは友助さんに聞いたがね」

男は包をちよつと見たばかりでこう云つた。

「——わしも心配はしていたが、まさか死んでいようとは思わなかつた、死したい躰もわからずじまいだったというが……まだわしには本当とは思えない」

彼の名は松まつぞう造というそうで、古河の近くの旗井はたいたいというところで百姓をしている。あのときはそつちも水が溢あふれだし、家はそれほどでもないが田畑にはかなりな被害があつた。そのあと始末に手が離せなかつたのと、人の評判では江戸はたいした事がないというので、知らせのないのを無事という風に考えて問い合せもし

ずにした。それにしても余り信たよりがないし、こんど千住市せんじゆいちば場へ荷の契約があつて出て来たのを幸い、それを済ませて此ここ処を訪ねたのである。初めてのことでようすがわからず、歩きまわるうちに材木問屋の梶平の店の前へ出た。そこにはかねて勘十から友助という者のいることを聞いていたので、立寄つて話をし、思いもかけない妹夫婦の死を知らされたのである。——松造は以上のことを、ぶあいそな調子で語つた、語るというよりも不平を述べるという感じであつた。

おせんも幸太郎を膝に抱きおろして、あの夜の出来事を記憶するかぎり詳しく話した。死躰のみつからなかつたことは捜さなかつたためもあるかもしれない、しかし子供を背負つた自分でさえ

無事なのである、夫婦二人のことだし、洪水といつても堤を欠壞して濁流が押しかかるというようなものではなかつたので、万に一つも死んでいるなどは考えられなかつた。どこかへ避難して、いていまに帰るものと信じていた。それがいよいよ帰らないことがわかり、それでは死躰をというじぶんには、川筋のどこでもすでにそういうものの、始末がついたあとであつた。そういうわけで、世話になりながら死後のとむらいもせず_にいたのは、申しわけのないことであるけれど、じつを云うと自分もまだ本当にお二人が死んでしまったとは思えない、いつか元気な姿で帰ってみえるような気がしてならないのである。——こういう意味のことを云つて涙を拭いた。松造は蓬臭い_{よもぎ} 蓆を吸いながら_{うなず} 領きもせず_に聞

いていた、話したことがわかったのかどうか、まるつきり別のことを考えてでもいるように、硬い表情で黙って苜ばかり吸っていた。

松造は泊っていった。千住に舟が着けてあつて、朝早くそれに乗って帰るということだった。いまにも、家のことを云われはしないかと、そればかり胸に悶つえていたのだが、朝飯を済ませてもそのことに触れず、干しておいた草鞋と足袋をおせんに取らせ、それを穿はいて古ぼけた財布を出して幾枚かの錢を置いた。

「これで子供に飴あめでも買つてやるがいい」

「まあそんなことは、いいえどうかそれは」

「厄介をかけた、——じゃ……」

そのまま出るようすである、おせんは思いだして風呂敷包をと云った。松造はむぞうさにそれはまた次に来たときにしようと思へた。そこでおせんは幸太郎を抱き、戸口へ送りだしながら思い切つて訊きいた。

「あとう、あたしこの家にいてもいいんでしうか」

松造は振返つてげんそうに、こつちを見た、ゆうべとげとげしくみえた眼が、今はもつとするどく尖とがり、こちらの心を刺すかのように光つていた。

「この家は友さんという人が、材木の残り木で建てて呉れたものだそうだ、それから水で毀こわれたのを直して、おまえに住まわせて呉れたものだそうじゃないか、——そうとすればおまえの家だ」

「それじゃ、あの、あたし、いてもいいんですわね」

松造は茶色になった萱すげがさ笠かぶを冠かぶった。

「ときどき泊らせて貰うからな」こっちは見ずにこう云った、

「——その代りこんど来るときは、自分の喰たべる物は持つて来る」
彼が去ったあと、おせんは幸太郎を抱いたまま嬉しさにこおどりをした。もう大威張りよ幸ちゃん、これ、ああちゃんと幸坊のお家になったのよ、ごらん、幸坊は三つで家作もち、えらいのねえ。——幸太郎はわけのわからぬままにおせんの首へ抱きつき、おせんのはしやくのに合わせてきやつきやつと躍り跳ねた。……昨日からの不安が解け、ようやく気持がおちついてくると、まず考えたのは友助夫妻のことであった。この家がおせんのものであ

るように云つて呉れたのは友助夫妻である、かれらはこの頃ずつと疎んずるようすだった。そしてもし自分に好意を持たなくなつたとすれば、ここから追い出すことはどうさもない話である、それをこういう風にして呉れたのは、たとえ憐れあわみからだつたとしても感謝しなくてはならない。

「お礼にいきましたよう幸ちゃん」おせんは子供に頼ずりをした、「——和わあちやんになにかお土産みやを持つてね、幸坊はもう和あちやんのことを忘れたでちよ、忘れちやだめよ、和あちやんは幸坊のたった一人の乳ち兄弟なのよ」

友助の家へ礼にゆくにはもう一つの意味があつた。それは庄吉のようすがわかるだろうということである。あの朝の悲しい別れからこつち、おせんはいちども庄吉に会っていないかつた。あのときの口ぶりでは、江戸にいるかもしれないし大阪へ戻るかもしれない、どつちともきめていないという風だったが、その当座は梶平にいて仕事場を手伝つてゐるといふことを、それとなくおたかから聞いたことがあつた。——もちろん大阪へなどゆきはしなく、きつとこの土地にいるに違いない。おせんはこう確信した。庄吉がおせんを疑つてゐる気持はよくわかる、そして自分にはその疑いを解く証拠がない。大阪という遠いところにおいて、飛脚屋の権

二郎からたびたび忌わしい話を聞き、帰って来て現におせんが子を抱いているのを見たのだ。ここにもし多少の証拠があつて、このとおりであると並べてみせることが出来たとしても、それで吉の疑いがきれいに解けはしないだろう。

——本当のことはいつかはわかる筈よ、あたし待っていてよ、庄さん。

あのとときおせんはこう云つた。深く考えて云つたのでない、しぜんに口を衝いて出た叫びであつた。そしてそれがいちばん慥たしかであり、必ずそのときが来るに違いないと思つた。愛情には疑いが付きものである、同時にいちどそのときが来れば了解も早い、じたばたしないで待つていよう。こういう風に思案をきめていた

のであつた。

松造の歸つた翌日、おせんは彼の置いていった錢に幾らか足して大きな犬張子を買ひ、それを持って友助の家へ礼にいつた。橋からはいつて長屋のほうへゆくと、新しい木の香が噓むせつぽく匂つてきた。おせんは切ないような氣持で脇へ向いた、庄吉と悲しい問答をしたときのことが、その匂いからまざまざと思いうかんだのである。——表で洗濯をしていたおたかは吃驚びっくりしたような眼でこちらを見、濡れた手をそのまま悠ゆっくり立上つた。おせんは家を出なければならぬかと思つたところ、今までどおり住んでいられるようになったこと、それはお二人のお口添えのおかげで、こんな有難いことはないと心をこめて礼を述べた。

「いいえそんなことはありませんよ、うちじやなんにも云やしませんよ、お礼を云われるようなことはしやしませんよ」

おたか人は人の好い性質をむきだしに、けれども明らかに隔てをおいた口調でそう繰り返した。おせんはまた、久しくみないから幸太郎に和^わあちやんと会わせてやりたいが、和あちやんはどうしているかと訊^きき、そして、つまらない物だが途中でみつけたからと云つて、買つて来た犬張子を差出した。

「そんなことしないで下さいよ、そんなことして貰うとうちに怒られますからね、本当に困りますよ」こう云つて途方にくれるよ
うな顔をし、それでも手には取つたが、おたかの顔はやはり硬い
ままだった。「——せっかく幸坊が来たのに気の毒だけどねえ、

あの子はいましたがた寝かしたばかりなんで」

「ええいいのよおばさん、そんならまた来ますから」

おせんはこう云つてから、まわりに人のいないのをみさだめ、おたかのほうへそつと身を近寄せて云つた。

「おばさん、こんなこと訊いて悪いかもしれないけれど、あたしなにかおばさんたちの氣に障るようなことしたんでしようか、——もしなにかそんなことがあるんなら云つて下さらない、あたしこんな馬鹿だから、氣がつかずに義理の悪いことをしたかもしれないし、もしそうならお詫^わびをしますから」

「そんなことありませんよ、そんな」おたかは狼^{ろう}狽^{ばい}したように眼をそむけた、「——不義理だなんて、あたしたち別になにも氣

に障つてなんぞいやしませんよ」

おせんは相手の眼を追うようにして見まもつた。慥かになにかあると思つたから、そしてぜひともそれは訊きださなければならぬと思つたから。——おせんは云つた、自分がどんなに二人の世話になつて来たか、それをどんなに感謝しているか、勘十夫婦の亡くなつたあと、小さな者を抱えて生きてゆくのに、どれくらい二人を頼みにしているか、親ともきようだいとも思つてるのに、さき頃から二人が自分を避けるようになった、これは自分にとつてなにより悲しく寂しい、自分になにかいけないところがあつたのだろうが、それがわかりさえすればどんなにでも直そう、どうか本当のことを云つて貰いたいし、たのみ少ない自分をつき放さ

ないで貰いたい。これだけのことを心をこめて云った。

——おたかは聞いているうちに感動したようすで、しかしその感動をうち消そうと、気の毒なほどうろろするのがみえた。まちがいに彼女が迷いだしていた。こうと思いきめていながらおせんという言葉につよくひきつけられ、気持の崩れだすのを防ぎかねていた。

「いいわ、じゃ云うわ、おせんちゃん」

やがておたかはこう云った、そしてすばやくあたりを見まわし、手招きをして家の中へはいった。——六帖じしやうに三帖の狭い住居で、どこもかしこもとちいらしたなかに、枕まくら屏風びやうぶを立てて和助が寝かされていた。おたかはその枕まくら許もとへそつと犬張子を置き、

おせんと差向いに坐つて火鉢の埋^{うず}み火を搔^かきおこした。

「あたしがよそよそしくしたのは、おせんちゃんもあたしたちに不義理をしたからつてわけじゃないのよ」おたかはこう話しだした、「——正直に云うと庄吉さんのためなの」

「庄さんのためつて、だつて庄さんが」

「いつだっけかしら、そう、あの人があんと置場で逢つて話をしたわね、あれから十日ばかり経つてだわ、うちのひとが庄吉さんを呼んで此処でお酒をいっしょに飲んだの、そのときあの人はあるたのことを話したのよ、杉田屋にいたじぶんのことから大阪へゆくようになったわけ、そのときおせんちゃんと約束をしたことも云つたわ、固く固く約束したんだつて、——大阪へいっ

てから、それこそ血の滲むにじような苦勞をしながら、その約束ひとつを守り本尊にして稼かせいだつて」

おせんは耳を塞ふさぎたいように思った。なにもかもわかつている、それから先は聞くまでもないことだ、聞くのは辛いし苦しい、もうやめて下さいと云いたかった。だがおたかは続けた、権二郎の告げ口から庄吉が江戸へ帰つて来るまでのこと、帰つて来てからおせんと逢うまでのこと、そしておせんが彼の申出をきかず、子を棄てようとしなかつたことなど、——ほくちよく 朴 直なひとに有りがちの単純さで、話すうちにおたかはまた庄吉への同情を激しく唆そそられたらしい、口ぶりにも顔つきもさつきのうちとけた色はなくなつて、再びよそよそしい調子があらわれてきた。

「あの人は泣いていたわ、あたしたちも泣かされたわ」おたかはこの結んだ、「——おせんちゃんにもそれだけのわけがあるんだろうけれど、まだそれほど年月が経ったというんでもないのにあんまりじゃないの、あたしは女だからそういうっても薄情な気持にはなれない、出来たことはしようがないとも思うけれど、うちのひとがすっかり怒ってしまった、もう往き来をしちやあいけないってきかないのよ、だからあんたも当分はそのつもりでね、いつかまたうちのあたしがよく云うから、それまで辛抱して独りでやっついていらつしやいな」

「よくわかってよ、おばさん」おせんは乾いたような声でそう云った、「——庄さんは思い違いをしているの、この子はあたしの

子じやあないわ、でも今はなにを云つてもしようがない、云えば云うだけよけいに疑ぐられるんですもの、だから、あたし待つ決心をしたのよ、それがみんな根も葉もないことだということはいつかきつとわかると思うの、……おばさんやおじさんにまで嫌われるのは辛いけど、こうなるのもめぐりあわせだと思つて辛抱するわ、そうすればいつかは、おばさんにも

だがあととは続かなかつた。わつと泣けてきそうで堪らなくなり、挨拶もそこそこに幸太郎を抱いて外へ出た。——友助夫妻の遠退いた意味はわかつた。しかしなんと悲しく口惜しいことだつたらう、女の自分でさえ誰にも訴えたり泣きついたりせず、大きすぎる打撃を独りでじつと耐^{こら}えてきたのに、あの人はいわば、知らぬ

他人の二人になにもかも話した、中傷をそのまま鵜呑みにし、無
いことを有ったことのように信じて、男が泣きながら饒舌しゃべつてし
まった。……それに依つて頼みにしているあの夫婦が自分から離
れることをあの人は知っていたのであろうか、自分への疑いは愛
のためだったとしても、そういうことを他人に話して、おせんが
世間からどんな眼で見られるかを考えては呉れなかつたのだらう
か、これもやっぱりあの人があたしを愛しているためなのだろう
か。——おせんは今すぐ庄吉に会つて、云うだけ云つてやりたい
という激しい感情に唆られ、幸太郎がしきりにむずかるのも知ら
ず、なかば夢中でふらふらと大川のほうへ歩いていった。

その年の暮に にんべつあらた 人別改め（戸籍調べ）があつた。洪水から初めてのこと、おせんと幸太郎はその住人であり、その家の主であることをはつきり認められたわけである。世間の景気は悪くなるばかりで、相変らず親子心中とか夜逃げとか盗難などの厭いやな噂うわさが絶えなかつた。おせんが顔を知っている人のなかにも、田舎へ引込むとか、いつかしらいなくなつていような例が二三あつた。だがそれが江戸というものなのだろう、一家で死んだり夜逃げをしたりするあとには、三日とおかず次の人がはいつて、同じような貧しく忙しい暮しを始めるのであつた。

貧しさには貧しさのとりえと云うべきか、日頃から掛け買いの出来ないおせんは、年を越す苦勞もひとよりは少なく、白くはないが賃餅ちんもちも一枚搗ついて、かたちばかりに門口へ松と竹も立てた。——そこへ大晦日おおみそかの夜になって、それも、かなりおそくおもんが訪ねて来た。白粉おしろいのところ剥はげになった顔が、寒氣立ち、埃ほこりまみれの髪を茫々にしたままで、老人の物を直したらしい縞目のわからない布子ぬのこを着ていた。

「表を通りかかったもんだからね、どうしてるかと思つてさ、お寒い」おもんは身ぶるいをしながらあがつて来た、「——なんて冷えるんだらう、ちよつとあたらせてね」

「こつちへ来るといいわ、炭が買えないんで焚きおとしなの、暖

たまりあしないから、——さあお当てなさいよ」

「坊やおねねだわね、こんど幾つ」

「四つになるのよ」

おもんは火桶ひおけの上へ半身をのしかけ、両手を低く火にかざしながら寝ている子供のほうを見やった。あるときからみると頬の肉がおち、眼の下に黝くろずんだ暈くまができている、脂気のぬけたかさかさした皮膚、白つぽく乾いている生氣のない唇、骨立って尖つてみえる肩など、思わずそむきたくなるほどしやうすい悄しやうすい衰しやうすいした姿であつた。

「ほんの一つだけけれど、お餅があるから焼きましようか」

「ああたくさんたくさん」おもんは不必要なほど強く頭を振った、

「——昨日からどこへいっても餅攻めで、それああたしお餅には眼がないほうだけど、でもこう餅ばかりじゃあいくらなんでも胸がやけるわ、あたしは本当にいいんだから心配しないでよ」

「うらやましいようなことを云うわね、でも一つくらいはつきあうもんよ」

おもんが嘘を云っていることは余りに明らかであった。おせんは一つでも惜しい餅ではあつたけれど、見ていられない気持で三つ出し、網を火に架けたり小皿に醤油を注いだりした。ふつくと焼けてくる香ばしい匂いが立つと、おもんは生唾をのみのみ活澆に話し始め、この頃は面白いように稼ぎのあること、世間の不景気なときは自分たちのほうがふしぎに客の多いこと、この調子

なら間もなく、小さな家くらい持てそんなことなど、なにかが逃げるのを恐れでもするようにせかせかと語り続けた。そしておせんが焼けたのを小皿に取って出すと、話に気をとられているというようすですぐ口へもってゆき、三つともきれいに喰べてしまった。

「人間どうせ生きているうちのことじゃないの、あんたなんか縲りよう繒もったいがいいんだもの、こんな内職なんかであくせくしているのは勿もったい体ないわ、苦労するのも一生、面白く楽しく、したいようにして生きるのも一生だわ、ねえ、あんただって好きでこんな暮しをしているわけじゃないでしょう、ぱつと陽気に笑って暮す気にならない、おせんちゃん」

むりに元氣づけた調子でそんなことを云いだした。思いだしたように鋏はさみを借りて指の爪を切り、これから浅草寺のおにやらいにゆくのだがなどと云つて、なお暫くとりとめのない話をしたうえ、吹きはじめた夜風のなかへと出ていった。

「可哀そうなおもんちゃん」

火桶の火を埋めながら、おせんはそつとこう呟つぶやいた。片町へかかる道で会ったときは、ひと眼でそれとわかる姿のいやらしさに、ただ反感を唆られるばかりだった。あの火事のあと貧しい娘や女房たちまでが、そんなしよ**う**ばいをして稼ぐという評判は、よく聞いた。天王町の裏にひとところ、さんげんちよう三軒町からたわらちよう田原町のあたりに幾ところとか、そういう人たちの寄り場があり、表向きは

駄菓子を売ったり、花屋のようになっていさいで客を取るのだという。聞くだけでも、耳が汚れるような思いだった。あんなに仲の良かったおもんが、そういう女のひとりになったと知ったときは、哀れむよりさきに厭らしさと怒りで震えるような気持だったが、今夜のようすではよほど困っているらしい、それこそ食う物にも不自由らしいことがわかり、そこまで身を墮おとしても運のない者にはいいことがないのかと、自分のことは忘れていたましく思うのであった。

——可哀そうなおもんちゃん。

元旦は朝から曇っていた。雑煮を祝ったあと、おせんは幸太郎を背負って、産土神うぶすながみの御蔵前八幡おくらまえはちまんへおまいりをし、それから

俗に「おにやらい」という修正会しゅしょうえを見に浅草寺へまわった。その帰りのことであるが、人ごみの中で和助を負ったおたかに会い、道の脇へ寄って少し立ち話をした。年賀にゆきたいのだがああいうわけがあるので遠慮をする、お二人ともつつがなくお年越しでおめでとうございます、こう挨拶あいさつすると、おたかも挨拶をし返したうえ、もちまえの気の好きからだろう、昨夜から庄吉さんが梶平へ来ていますと云った。

「祝う身寄りもなくなつて寂しいから、こちらで正月をさせて呉れて来たんですって、だいたい稼ぎをしたらしいって話でしたよ」

「それじゃあ、あの人、——あれからどこかへ行ってたんですか」

「あら話さなかつたかしら」こう云つておたかはちよつと氣まず
そんな眼をした、「——あれから間もなくお店を出たんだけど、
梶平さんの旦那の世話で、阿部川町あべかわちようのなんとかいう頭梁とうりようの
家へ住込みではいったそうよ」

「なんとという頭梁かしら——」

「さあ、あたしは詳しいことはなんにも知らないからわからない
けれども、でも頭梁つていえば一町内にそうたくさんいるわけで
もなし、おせんちゃんかもし尋ねてゆくつもりなら」おたかはそ
う云いかけてふと空を見上げた、「——あらいやだ、雪よ、まあ
お元日に悪いものが降りだしたわね」

そして自分は花川戸はなかわどに寄るところがあるからと、おたかは急

ぎ足に別れていった。——粉のように細かい雪が舞いだした、人の往き来で賑にぎやかな町筋がにわかには活気立つようにみえ、子供たちは口々に叫び歌い交わしながら、道いっぱいには跳ねたり駆けまわったりし始めた。おせんの背中でも幸太郎がしきりに手足をばたばたさせ、降って来る雪を掴つかもうとして叫びたてた。

「ゆきこんこいいね、ゆきこんこ、ああたんゆきこんこいいね」
おせんは幸福な気持だった。庄吉が梶平の店を出たということ
は知らなかったけれど、住込みでよそへいつていた彼が、正月を
しに帰って来たという、祝う身寄りもないからと云ったそうだし
暫く厄介になった人たちへの懐かしきもあるだろうが、なんとい
つても近くに自分のいることが最も大きい原因に違いない。自分

の近くへ来て、自分のようすを聞いたり見たりしたいのだ、殊によるとすっかり事情がわかつて、その話をする積りで来たのかもしれない。——もちろんはつきりそうと信じられる理由はなかった、そういう臆測とは逆なばあいも想像することができ。しかしそれでもいい、どういう意味にせよ彼が自分の近くへ来ることは愛情のつながっている証拠なのだ。はかないといえはいえるけれど、それだけでも今のおせんは幸福な気持になれるのであった。

三日の午後に古河から松造が来た。野菜物を千住せんじゆの問屋へ送つて来たのだと云つて、おせんにも土の付いた牛蒡ごぼうや人参や漬菜などをぜんたいで二貫目あまりと、ほかに白い餅あずきや小豆や米なども呉れた。彼はその夜また泊つていったが、例のようにぶすつと

して余り口をきかず、蓬臭い蓆をふかしては、怖いような眼で部屋の中を見まわしていた。——松造は明くる朝まだうす暗いうちに去ったが、こんども小銭を幾らか置いて、怒ってでもいるように子供に飴でも買ってやれと云った。

「あの包はお持ちにならないんですか」

草鞋を穿いて出ようとするので、そう訊くと、彼はちよつと考えるようすだったが、やがて低い沈んだ調子で、おせんの問いはまるで縁のないことを云った。

「人間は正直にしているも善いことがあるとはきまらないもんだけれども、悪ごすく立廻ったところで、そう善いことばかりもないものさ」

そして空いた袋や籠を括りつけた天秤棒を担ぎ、少し前踏み
になつてさつさと歸つていった。おせんは四五日のあいだ気がお
ちつかなかつた、松造の言葉がなにを諷しているのかもわからな
いし、あんなに物を持って来て呉れる気持もわからない。こんな
時勢にただの好意でして呉れるとは思えないが、好意だけではな
いとしたらなにか企みでもあるのだろうか。あの包を持ってゆか
ないところをみるとまた来る積りだろうが、こんど来たらどう扱
つたらいいか。——考えるとまた厭なことが起こりそうで、さり
とて相談をする者もなく、氣ぶつせいな感じを独りでもて余した。
松の取れるまでそれとなく梶平の店の近くへいつてみたり、表
を通る人に絶えず注意していたりしたが、とうとう庄吉の姿を見

ることはできなかつた。やっぱりまだ疑いが解けていないのに違
いない、殊によると会いに来て呉れるかもしれないとさえ思った
のであるが、それが間違いだとわかつて、おせんはさほど悲し
くはなかつた。庄吉は同じ浅草にいるのである、阿部川町といえ
ば此処からひと跨またぎだし、住込みならそう急によそへゆくことも
あるまい、近くにさえいて呉れば事実のわかる機会も多いので、
あせらずに待ってしようという気持だつたのである。

——その点には少しも迷いはなかつたけれども、近所のこと
どうにも当惑に耐えないことが起こつた。もともとおせんは余り
近所づきあいをしなほうだつたが、それでも通りがかりに寄る
とか、夜話しに来るとかいつた女房たちが二三人はいた。それが

まるで申し合せでもしたように、暮あたりからばったり顔をみせなくなり、道で挨拶をするくらいの人の中にも、ふと白い眼でこちらを見るような風が感じられるのであつた。まえに友助夫妻のことがあるので、こんどもなにかそれだけの理由があるのだらうと思ひ、しかしそう咎められるようなおちどをした覚えもなかつたから、捨てておいても大したことはあるまいと軽く考えていた。

四

元来がそう親しい人たちでもなく、こちらは満足に茶も出せな

いような生活で、来られれば却^{かえ}つて時間つぶしなくらいである。しかしそう揃^{そろ}つてみんなにすぎなくされることは、寂しくもあり、ますます孤独になるよう^{よう}で心細くもあつたので、折さえあればおせん^{せん}のほうからあいそよく話しかけるように努めていた。すると一月なかば過ぎのことだったが、柳河岸の新しい地藏堂の初縁日でおせんも子供を伴れて参詣にいったところ、そこで、まったく思いがけないことを聞いたのであつた。——列をなしている人々といつしよに、火のついた線香を買つて並んでいると、後ろでげらげらと笑いながら、大きな声でこう云うのが聞えた。

「そうともさ、義理だの人情だのといったのは昔のことで、今じやてんでん勝ちが大手を振つて歩くのさ、すえ始終の約束をして

おきながら、相手が一年もいなければもうほかの男とくつつき合
つてしまふ、それも十六や七の本当ならおぼつこい年をしてえて
さ」

その声には覚えがあつた。振返つて慥かめるまでもない、よく
話に寄つた女房のひとりで、亭主が舟八百屋をしているお勘とい
う女だ。おせんはかつと頭が熱くなつた、自分に当てつけている
のである、此処に自分が見て、わざわざ聞えるように云
つてゐるのだ。そしてかれらが来なくなつた理由もそこにあつた
のである。——おそらく友助のほうから伝わつたに違いない、そ
れも庄吉に同情するあまりのことだろう、ほかにわる気がある道
理はない、わかる時が来ればわかるのだ。こう思つて、おせんは

じつと自分をなだめていた。しかしお勤のたか声はさらに続いた。「ところが恥を知らないくらい怖いことはない、赤ん坊が生れたと思うと男に死なれちまった、たいていの者ならいたたまれない筈だが、火事で町のようにすが変り、知った者がいなくなつたのいいことに、しやあしやあと元の土地にい据わつて約束の相手の帰るのを待つていた、そして相手が帰つて来るとこの子は自分の子じゃあないとさ、ちゃんとおまえを待つていたつてさ」

「云えたもんじゃあないよねえ」こう合あいづち槌をうつのが聞えた、
「——それも二十にもならない若さでさ、よつほど胆が太いかすれっからした女なんだね」

おせんは自分でも知らずに、並んでゐる人の中からぬけてそつ

ちへいった。頭がくらくらし、軀が音を立てるほど震えた。どんな顔をしていたことだろう、彼女はお勘の前へ行って叫んだ。

「いまのはあたしのことを云ったのね、おばさん、あたしのことだわね」

「さあどうだかね」お勘はちよつと気押されたように後ろへ身をひいた、「——あたしや人から聞いたんだからよく知らないよ、おまえさんだかなんだか知らないが、たとえ誰のことにしたつてあんまり」

「なにがあんまりなの、どこがあんまりなの、はつきり云つてごらんなさいよ、誰が義理人情を知らないつていうの、誰が男とくつついたの、誰が、誰がよその男の子を生んで自分の子じゃない

なんて云つたの、云つてよおばさん、それはどこの誰なの」

声いっぱいの叫びだった。参詣の人たちはなにごとかと寄つて来ると、幸太郎は怯おびえたように泣きだしていた。けれどもおせんには人の群もみえず幸太郎の泣きごえも聞えなかつた、かたく拳こぶしを握り眼をつりあげて、お勘のほうへつめ寄りつめ寄り叫びつづけた。

「云えないの、云えないならあたしが云つてあげるわ、今あんたの口から出たことはみんな嘘よ、根も葉もない嘘っぱちよ、あんたもあんたにそんな話をした人も本当のことはこれっぽっちも知つちやいない、みんなでたらめよ」

「そんならなせ」お勘も蒼あおくなつた、「——それが本当ならなせ

独りでいるんだい、どうしてその人のところへ嫁にゆかないんだい」

「あたしは、あたしはそんなこと云つちやいないわ、そして、そんなことはおぼさんの知ったことじゃないじゃないの」

「どういうわけでその人はあんたを貰いに来ないの」お勘は平べつたい顔をつきだし、眼をぎらぎらさせながら喚いた、「——その人は帰って来たんだろ、会って話もしたというじゃないか、それで嫁に貰わないってのはどういいうわけさ、おまえさんのほうであいそづかしてもしたってのかい」

「あの人のことはあの人のことよ、あたしは自分のことを云つてるんだわ、あたしがちゃんと待っていたことを、この子はあたし

の子じゃ……」

おせんの舌はとつぜんそこで停つた。幸太郎の悲鳴のような泣きごえが耳に突入り、すが縋りついている幼い手の、けんめいな力が彼女をよびさましたかのようだ。とりまいている群衆の眼にきづいた、お勘はますます喚きたてる。自分はなにをしたのだらう。

なんと**い**う**ば**かな**恥**ず**か**しい**こ**とを、——おせんは**が**た**が**た**震**えながら、幸太郎を抱いて歩きだした。そこに**限**りの**人**が**お**せんを**眺**め、あざけ嘲りと卑しめの言葉をその背へ投げた。

「そんな恥知らずないたずら女は町内にいて貰いたくないもんだ」お勘がなおもこうどなっていた、「——そんな者にいられたんじやこつちの外聞にもかかわるからね、さっさとどこかへ出てつて

お呉れよ」

幸太郎は両手でおせんにしがみつぎ、全身を震わせながら泣きじやくつていた。おせんはかたく頬を押付け、背中を撫なでながら河岸ぞいに歩いていった。そうだ、なんと**い**うばかな恥かずかしいまねをしたことだろう、どうもがいたところでお勤を云い伏せられるわけがないではないか、庄吉でさえ疑っているものを、他人がそう信じるのは当然のことではないか。——おまけにあんな大勢の人々のいる前で、この子は自分の子ではないと叫びかけた。誰に信じて貰えもしないことを云って、それが小さな幸太郎の耳に遺つたとしたらどうするか。数え年ではあるがもう四つになる、殊にあんな異常なばあいの記憶はながく消えないものだ、自

分が拾われた子などということ覚え、また人からそう云われるとしたら。……おせんは幾たびもぞつと身を震わせ唇を噛みしめた、そして幸太郎を力いっぱい抱きしめ、燃えるような愛と謝罪の気持で頬ずりをした。

「めんちやいね幸坊、あちやんが、悪かった、あんな恥ずかしい思いをさせて本当に悪かったわ、誰がなんと云つてもいい、幸坊はあちやんの大事な子よ、なにもかもいつかはわかるんだもの、それまでがまんして辛抱しましょう、いまにきつと、——きつとなにもかもよくなつてよ」

それからさらに近所の眼が冷たくなつた。もちろんおせんも覚悟はしていた、どんなに辛く当られても仕方がない、そのときが

来るまで黙って忍ぼうと決心していた。不自由なのは味噌醤油や八百屋物などの、こまこました買い物が近所で出来なくなつたことで、駄菓子屋などでさえおせんには売つて呉れない。これには当惑したけれども、そういうも買い物をするわけではなく、町内を出れば幾らでも買えるから、不自由なりにそれも慣れていった。

こうしてまわりの人たちと殆んどつきあい絶えたが、二月じゆうはおもんがしげしげ訪ねて来た。たぶんどこかで噂を聞いたのだろう、それとなく慰めたり気をひき立てるようなことを好んで話すが、それはおせんのお潔白を信じているためではなく、噂のほうを本当だと思つていて「それがなんだい」という口ぶりであった。

「よけいなお世話じゃないか、火つけ泥棒をしたわけじゃあるまいしなんだい、自分じゃ鼻の曲るような臭いことをしていて、ひとの段になるとお釈迦さまみたいな口をきくやつさ、なにを構うもんか、大威張りでどこでものしまわってやるがいいんだ」

おせんはむろん彼女の誤解を正そうなどとは思わない、けれどもそういうことを聞いているのは樂ではなかった。なるべく話題を変えするように、おじさんはどうしているか、軀の具合が悪そうだが養生をしたらどうか、そんな風に、こちらから問いかけることに努めた。おもんはそういうことにはなんの興味もないらしい、すてばちな投げた調子で、馬鹿にしたような生返辞ばかりしかせず、ついには欠伸あくびをして寝ころがるのがおちであった。

「きれいな顔をして乙おつに済ましたようなことを云ったつて、人間ひと皮剥かわむけばみんなけだものさ、色と欲のほかになんにもありやしない、お互いが隙を狙つて相手の物をくすねようと血眼ちまなこになつてゐるんだ、ばかばかしい、けだものならけだものらしくするがいい、おてえさいを作つたつて見え透すいてるよ」

酔つてゐるときはそんなように世間や人を罵ののつた。小紋の小袖に厚板の帯をしめ、幸太郎に玩具を買つて来ることなどもあるし、つぎはぎの当つた男物の布子に、尻切れ草履で来るなり、なにか喰くべさせて呉れと云うこともある。またなかまと喧嘩けんかでもしたあとなのだらう、凄すこいような眼つきで、齒はぎしりをして、聞くに耐えないような悪口を吐きちらすこともあつた。

「氣樂にやろうよ、おせんちゃん、どうせこの世にあ善いことな
んてありあしない、自分の好きなように、勝手気ままに生きてゆ
くんだ、みんな死ぬまでしきや生きやしないし、死んじまえば将
軍さまだつて灰になるんだからね」

二月も末に近い或る夜、おもんが舌もまわらないほど酔つて、
着物から髪まで泥まみれになつて、殆んど転げ込むようにはいつ
て来た。それまでいちども泊めたことはなかつたのであるが、坐
ることもできないありさまでどうしようもなく、泥を拭いてやり
着替えをさせて、同じ蒲団の中へいつしよに寝た。——明くる日
は朝から唸りつづけで、拵こしらえてやった粥かゆも喰くわず、水ばかり飲ん
で寝ていたが、午ひるすぎになつて思いがけなく松造が訪ねて来た。

五

正月に来たきり音も沙汰もなかったの、——忘れたというのではないがちよつとどきつとした。いつものとおり草鞋と足袋を自分で干して、足を洗ってあがった松造は、そこに寝ているおもんの姿を見ると、眉をしかめた。——蒼ざめて土色をした膚、茫茫とかぶさった艶つやのない髪、おち窪くぼんだ頬と尖った鼻、いぎたなく手足を投げだした寝ざま。誰が見ても眼をそむけたくなるあさましい恰好である。松造は麦藁むぎわらで作った兎の玩具を幸太郎に与え、貰入をとりだしながらおせんの顔を見た。

「あたしのお友達ですの」おせんはとりなすように小さな声で云

った、「——お針にいつていたじぶんの仲良しなんです、ゆうべひどく酔つて来て苦しそうだったもんですから」

松造は黙つて菘をいづくした。それから立つていつて土間へおり、持つて来た包をそこへひろげた。大根や蕪かぶや人参や里芋などの野菜物に、五升ばかりの米と小豆と胡麻ごまと、ほかに切つた白い餅が、かなりたくさんあつた。

「寒の水で搗ついたからかび黴やしめえと思うが、水餅にして置くほうがいいかもしれねえ」まるで怒つたような声で彼はそう云つた、「——もつと早く来るつもりだったが、あれから足を病んだもんで……」

「足をどうかなさつたんですか」

「冬になると痛むだ、大したことじゃねえ、二三年出なかつたつ
けが、——水のあとの無理が祟^{たた}つたらしい、死んだ親父もこうだ
つた」

そんな話をしているとおもんがむつくり起きた。そして黙つて
よろよると土間へおりた、おせんが吃^{びっくり}驚してついてゆくと、ば
らばらに髪のかぶさつた顔でこつちへ振返り、

「なんだいあの田舎者は、あれがおせんちゃんのだ旦那かい」

こう云つて激しく咳^せきこみ、そのまま向うへ去つていった。苦
しそうな精のない咳のこえが、ずっと遠くなるまで聞えていた。

松造はなにも云わずに葎を吸っていた、おもんの言葉などはまる
で聞えなかつたように。——夕餉のしたくをするとき、彼は幸太

郎を抱いて外へ出ていった。半刻はんときばかり表通りのほうを歩いて来たらしい、したくが出来て膳立てをしていると、橋のところで彼の唄うこえがした。

「——向う山で鳴く鳥は、ちゆうちゆう鳥かみい鳥か、源三郎げんざぶろうの土産、なにようかによう貰つて、金きんざし簪かんざしもらつて……」

おせんは立つていつて切窓の隙からそつと覗のぞいてみた。曇り日の、もう黄昏たそがれかかる時刻で、家と家に挟はさまれた僅かな空地には冷たく錆さびたよゝな光が漲みなぎっていた。松造はこつちへ髭の濃い横顔を向け、遠い空を仰ぐよゝなかたちで唄っている。幸太郎は頭を男の肩に凭もたれさせ、身動きもせずうつとりと聞き惚ほれていた。

——おせんは、ふと眼をつむつた、松造の声にはいろもつやもな

い、節まわしもぶつきらぼうであった。けれどもじつと聞いてみると、懐かしい温あつたかい感情が胸にあふれてくる。文句も初めて聞くものではあったが、記憶のどこかに覚えのあるような気がする。……つむった眼の裏に母親のおもかげが浮んだ、九つの年に亡くなった母の、いつも寝たり起きたりしていた病身らしい蒼白い顔、——その母が自分を抱いて、背中を叩きながら唄って呉れている。向う山に鳴く鳥は、ちゆうちゆう鳥かみい鳥か。おせんは切窓に倚よりかかって両手で面おもてを掩おおいながら噎むせびあげた、外ではなお暫く松造の唄うこえが聞えていた。

その夜また泊って明くる朝。松造は草鞋を穿いてから思いついたように、お常の風呂敷包にある物は使えたらおまえが使うがい

いと云つた。それから、おせんのごとは亡くなった勘十からも聞いていたし、こつちへ来て友助から聞いたこともある、いろいろ事情があるらしいが、自分はそれに就いてどんな意見も持つてはいない。だがお常がひき取つて世話をした、その氣持を亡くなつた者のために続けてやりたいのである。自分たちは三人兄妹であつたが、下の妹を火事でとられお常を水でとられて、とうとう自分ひとりになつてしまつた。これも約束ごとというようなものだろうが、——そういう意味のことを溜息ためいきまじりに、ぶあいそな調子で述懐していった。おせんはつよい感動を与えられた、今までわからなかつた松造の氣持がわかつたばかりではない、それは亡くなつたお常の親切が続いているのである、正氣を失くして道

に飢えていた自分を拾い、飲み食い着る物の面倒をいとわず、丈夫になるまで親身に世話をして呉れた、その妹の気持を続けて呉れるというのだ。……友助夫妻に離れられ、お地蔵さまの縁日の事があつてからは近所で口をきく者もない。自分はたった独りだと思つていた。松造の親切もどこまで眞実であるか、いつまで続くものかはわからない、しかしとにかく今は自分の味方である、自分のためになにかをして呉れようとしている。どんなに世間からみすてられても、生きていればやっぱり人間は独りではなかつた。——感動のあとの温あたたかい気持で、世の中や人間同志のつながりのふしぎさを、おせんはしみじみと思ひめぐらすのであつた。

おせんの物を着ていったまま、おもんはふつつりと姿をみせな

くなつた。おせんは彼女の泥まみれの着物を洗つて干し、ほころ綻びも縫いつくろつて置いた。自分の物が一枚なくなつたのは困るけれど、松造の云つたことを信じてよければお常の物が使えるので、そう慌てることはないと思つた。——おもんの来なくなつた代りのように、松造が六七日おいては泊りに来た。自分の畑のものばかりでなく、問屋から頼まれて定期的に荷を入れることになつたのだという。そしておせんにも必ず幾いろかの野菜と、米や麦などを持つて来るのだった。相変らずぶすつとして、あまり口もきかず苺ばかりふかしている、ときに幸太郎を抱いたりしても、なにやらぶきようで自分で当惑するという風であつた。……おせんはすなおにその親切を受けた、口にだしては礼もよく云わなかつ

だが、彼のほうでも遠慮のない調子で着て来た物の縫いつくろいを頼んだり、喰べ物の好みなども云うようになった。近所の口がうるさくなつたのは当然であろう、おもんでさえ「旦那か」などと云つたくらいで、なにも知らぬ者からみればあたりまえの関係でないと思うのが自然である。しかし、おせんはもうびくともしなかつた、お地藏さまの前で受けたような辱^{はずか}しめのためには、そんな蔭口や誹^{ひぼう}謗^{ぼう}くらいなんでもないことだ。それで気が済むのなら云いたいだけ云うがいい、そういった幾^{いく}らか昂^{こう}然^{ぜん}とした気持ちで、どの家の前をも臆^{おそ}せずに通つた。

花も見ずに三月も過ぎ、四月、五月と日が経つていった。松造との話で、七月の命日には勘十夫妻の供養をし、墓石へ名を入れ

ようということになっていた。そのまえ三月の中旬ころに松造が友助から聞いて本所四つ目にある宗念寺そうねんじという寺を訪ね、そこに勘十の家の墓があるのを慥たしかめて来た。そのときいちおう経をあげ、夫妻の戒名をつけて貰ったので、おせんは古道具の店からではあるが小さな仏壇を買い、二人の戒名をおさめて、朝夕、水と線香を絶やさなかつたのである。——命日といつても死んだ日がはつきりしないので、とにかく水の出た三日をその日ということにきめた。その前日の二日に、松造は妻のおいくと七つばかりになる女の子を伴れて来た。おいくは、背丈の低い固肥かたりの軀つきで、抜けあがった額から頬が赤くてらてら光っていた。良人おととに似たものか、どうか、こちらで気まずくなるほどの無口だが、子

供を叱るときは吃驚びつくりするほど邪見な早口で、しかもひそかにすばやく手足のどこかを捻つねったりりするようすは怖いようだった。：

：松造が自分のことをどう云つてあるか、またこれまでして貰っていることの礼を云つていいか、どうか、おせんにはちよつと見当がつきかねたので、向うが口をきかないのを幸い当らず触らずの挨拶をして済ませた。その夜は蚊遣かやりを焚きつきながら、狭いところへごたごたと寝て、明くる朝は日蔭のあるうちにと早くでかけた。友助夫妻にも案内をしたのだが、これは欠かせない用があるからと、なにがしかの香典を包んで断わりが来ていた。まだおせんのことにごだわっているのである、それにしてもあんなに親しかつた古い友達の法会ほうえなのにと、おせんは亡くなつた人た

ちに済まなく思ったが、そこに気がついたかどうか、松造はただ「それではあとで送り膳ぜんでも届けなければい」と云つただけであつた。

両国橋の脇から舟に乗つていったが、明日は回向院えこういんの川施餓鬼がきがあるそうで、たて川筋はどこでも精霊舟しょうろうぶねを作るのに賑わつていた。舟というものに乗つたことのない幸太郎は、初めのうちさも恐ろしそうで、固くおせんに抱きついたままだったが、暫くするうちに馴れたとみえ、しきりに水を覗いたり、移り変わる岸の風物に興じたりしはじめた。

「こうぼ、あんよしないよ、こうぼ、えんちやよ、おうち動くよ、おうちみんな動くよ」

自分が坐っているのに家並の移動してみえるのがふしぎらしい、松造は珍しくにつと笑った。母親のそばに、きちんと坐っていた、お鶴つるという女の子は、それを聞いてそつと母親のほうへ口を寄せ、「お家が動くんじゃないね、お舟が動くからそう見えるんだね、かあちゃん」

こう云った。おいくはするどい調子でよけいなことを云うんじゃないと叱りつけ、怒つてでもいるようにぐつとそつぽを向いた。——この家族も単純ではない、おせんは溜息をつくような気持でそう思った。まだ初対面で深いことはわからないが、夫婦のあいだも親子のあいだもしっくりいっていないようだ、良人であり妻であり子であるのに、それが一つにならないでばらばらに離れ

ている。どうかすると、他人よりも冷たいようすが感じられる、松造が自分に親切をつくして呉れるのも、そんなところに動機の一半があるのではなからうか。……北辻橋きたつじばしで舟をあがるまで、おせんはそうして鬱陶しいもの思いにとらわれていた。

宗念寺で法会をしたあと、すぐ近くにある支度茶屋で早めの食事をした。まわりは青々とうちわたした稲田や林が多く、武家の下屋敷らしい建物が、ところどころにあるばかりで、どんな片田舎へ来たかと疑われるほど、鄙ひなびた景色であった。おせんにはもちろん、幸太郎はたいそうなよろこびようで、ねえたんねえたんとお鶴にまつわりついては、外へ遊びにつれてゆけとせがんだ。その茶屋の裏庭のすぐ向うにかなり大きな沼があり、そのまわり

で子供たちが魚を掬^{すく}つて騒いでいる、幸太郎はそこへいつていっしよに遊びたいらしい。おせんもそうさせてやりたかつたのだが、松造は今日のうちに古河へ帰るといふことで、悠^{ゆう}くり休むひまもなく立上つた。

平右衛門町へ帰つたのは日盛りのいちばん暑い時刻だった。そして家へはいると、土間へ膝^{ひざ}をつき上り框^{がまち}に凭れかかつて、乞食のような姿でおもんが眠っていた。

六

それがいつかの女だと知ると、松造は入りかけた足を戻してこ

のまま帰ると云った。おいくの顔にも露骨な侮蔑ぶべつの色があらわれ、わざとらしく子供の手を取つてさつと先へ出ていった。まるでとりなしようもない、おせんは、やむなく夫婦の荷包を取つて来て渡した。松造は紙にくるんだ物をおせんに与え、——贅おごつたことはいらないからこれで友助のところへ送り膳を届けるように、また余つたのはその女にもやつて早く出てゆかせるように、さもないと幸太郎のためにもよくないから、そういうことを低く囁ささやいて去つていった。

おもんは病氣にかかつていた。汗と垢あかとで寄りつけけないほど臭い軀を、どうにか上へあげ、べとべとに汚れたぼろをぬがせて、ともかくも膚を拭いてやろうとしたが、余りに瘦やせ衰えたあさま

しい裸を見ると、おせんは総身にとりはだの立つほど慄然りっぜんとした。呼吸は激しく、軀は火のような熱である。そして両の乳房はどちらもひしやげて、どす黒い幾すじかの襞ひだになっていた。

「おせんちゃん、あんた見て呉れた」おもんはしゃがれた声でそう云った、「——ようよう家が持てたのよ、あんたに見て貰おうと思つて、……これでひと安心だわ、あんたも越して来なさいよ、いっしょに此処で暮そうじゃないの、ねえおせんちゃん、あたしもあんたも、ずいぶん苦労したんだもの、いいかげんにもう楽になつてもいい頃よ、ねえ、この家あんたに氣にいつて」

「ええ氣にいつたわ」おせんは自分の単衣ひとえを出して彼女の上へ掛けてやった、「——とてもいい家だわ、おもんちゃん、でも少し

じつとしていてね、あたしいまお医者を呼んで来るから、動かないで待っているのよ」

おせんは幸太郎を負つてとびだした。

三軒たずねて断わられ、四軒めに佐野正さのしょうからの口添えで、駒こ

形町まがたまちの和泉杏順いずみきょうじゆんという医者いが来て呉れた。診断はろうがい労咳と

いうことだった。それもひじょうに重くなつていたので、当分は絶対安静にしなければならぬ、話もさせてはならないと云われた。こちらの生活を察したものだらう、もし必要ならお救い小屋へ入れる手配をしてやってよい、そう云つて呉れたので、そこへゆけば充分な治療がして貰えるのであるかと訊いたが、病気がここまで進んではどんな名医でも手のつけようがない、あとはた

だ静かに死ぬるようにしてやるばかりだという。それなら自分にとつてはたつた一人の友達だから、ここで死ぬまでみとつてやりたいと思う。こう答えて医者を送り出した。

その月いっぱいおせんは満足に眠れない日を過した。もう高価な薬も、むだだといふので、ふりだしのような物を呉れるだけだったから、薬代やくだいはさしてかからなかったが、幾らかでも精のつくように卵とか鳥などを与えたいと思うので、毎日買物をするだけ詰めても、佐野正への借りが少しずつ殖えていった。

——松造は六七日おきぐらいに來たけれども、おもんの寝ているのを見ると、持って來た物を置いてすぐに歸つていった。あのとときあのように云つたにしては、かくべつ機嫌を悪くしたように

もみえず、却って持つて来て呉れる物のなかに卵や胡麻や榧かやの実などが殖えたくらいである。特に榧の実は労咳にいいそうで、日に三粒ずつそのたびに焼いて、熱いうち食うようにと念を押ししたりした。……医者はいくばくもないように云ったけれども、八月にはいると熱も下り、食欲もついて、眼の色なども活き活きとしてきた。それまで話は禁じられていたし自分でもそれだけの元気はなかつたらしいのが、少しずつ口をききはじめ、夜など寝つけないことがあると、静かな歌うような口ぶりによく昔のことを話したがった。年月にすれば僅か三年あまりのことだけれど、あの火事のまえ、二人が仲良くお針の師匠の家へかよっていたじぶんのことは、十年も十五年も昔のようにしか思えないのである。

「お花さんていうひとがいたわねえ、髪の毛の赭あかい、おでこの、お饒舌しゃべりばかりしていつもお師匠さんに叱ちられていた、——あのひとあんなにがらがらだし、齒を汚よごなくしていたんであたし嫌いだったけれど、いま思うと悪気のない可愛いひとだったのね」

「それからお喜多きたさんてひと覚おぼえている、おせんちゃん、意地が悪いのと蔭口ばかりきくのでみんなに厭いやがられていたでしょう、あたしも、お弁当の中へ虫を入れられたことがあるわ、でも考えてみるとあのひと寂さびしかったんだわ、誰も親おやしくして呉くれる者がないので、寂さびしいのと嫉ねたましいのであんな風になったのよ、あたしたちこそ思い遣やりがなかつたんだわね」

「おもとさんと絹さん、それからおようちゃんの三人はお嫁にい

つたの、お絹さんは向う両国の佃煮屋つくだにやへ行って、去年だかもう赤ちゃんが出来たわ、——みんないい人ばかりだったわねえ、いつかみんなでいっぺん会いたいわねえ、おせんちゃん」

そんなに話しては軀に障るからと注意するのだが、すぐにまたひきいられるような口ぶりで語りだすのである。その頃には頬のあたりが肉づいてきたためだろう、色こそ悪いが以前の顔だちをとり戻して、まなざし言葉つきなど、あの頃の明るい人なつっこいおもんがそのまま感じられるようになった。——その調子でゆけば或いは全快したかもしれない、全快はしなかったにしても、そう急にいけなくなるようなことはなかったに違いない、しかしそれから間もなく思いがけない出来事が起こって、おもんは悲し

い終りを遂げなければならなかつた。

八月の十五日、月見のしたくに団子を拵えたあと、柳原堤へいって供え物の芒すすきや、青柿などを買って帰る途中、同じ買い物帰りのおたかと偶然いっしょになった。挨拶しただけで別れようとすると、どういう積りでかいっしょについて歩きだし、例のとおりの気の好い話しぶりで、庄吉さんもこんど頭梁のところの婿むこになつてめでたい、花嫁は家付きだけれど、年は十七で気だても優しく、縹緖も十人なみ以上だそうである、これであのひと苦勞のしがいがあつたというものだ。こういうことを問わず語り云つた。

「庄さんがお婿さんになつたんですって」おせんは半ばうわのそ

らで訊き返した、「——頭梁つて、阿部川町の、住込みだつていうあの頭梁の家ですか」

「そうなんですつてよ、頭梁つてひとが庄吉さんの腕にすつかり惚れこんだんですつて、お加代かよつていう娘さんも庄吉さんが好きだつたつて話でね」

おせんはちよつと立停つた。しかしすぐ歩きだしながら、いま聞いた話がなにを意味するか考えてみた。うわのそらで聞いているたのである、もちろん言葉そのものはわかつているが、その意味は聞きながしていた。それはとうてい有り得ないことであつたら。

——が、おせんはとつぜん額から白くなり、おたかの腕を掴ん

で立停った、おたかは吃驚して声をあげた。

「庄さんが、お嫁を貰ったんですって」

「放してお呉れな、痛いじゃないかおせんちゃん」

「本当のこと云って頂戴、本当のこと」

「痛いってば、ここをお放しよ」

「お願いよ、おばさん」おせんは縋りつくように云った、「——
庄さんがお嫁を貰ったって、嘘でしょう、ねえ、そんなことがあ
る筈はないもの、嘘でしょうおばさん、ねえ云って、そんなこと
は嘘だって」

「いって自分で訊いてみれば、いいじゃないの、あたしは知って
ることしか知っちゃいないよ」

「そらごらんなきい嘘じゃないの」

こう云いながらおせんは歩きだした。きみ悪そうにおたかが去つていったことも、曲り角を通り越したことも知らず、茅町かやちよう

まで来てようやく我に返り、そこでなお暫く棒立ちになつていた。そんなことは、有るわけがない、きつとなにかの間違ひである、どう考えても本当とは思えない——だつてあたしがいるじゃないの、あたしはちゃんと待つていたんだもの、そしてあんなに固く約束したんだもの、あたしを措おいて庄さんがお嫁をよそから貰うわけがないじゃないの。同じことを繰り返ふし思い耽かつていたが、やがてほんやり立つている自分を人が見るのに気づき、慌てて引返して家へ歸つた。

「おもんちゃん、あんた済まないけれどそのままでもうちよつと幸坊の相手になつて呉れない、あたし急いでいつて来るところがあるんだけれど」

「ええいいわよ、このとおおとなり温和しく遊んでるわ」

「ここへあめ飴を出して置くからぐずつたらやつて頂戴、すぐ歸つて来るわね」

「こつちは構わないわよ、悠くりいつてらつしやいな」
おせんはそのまま家を出ていった。

七

森田町からはいつて三味線堀についてゆくのが、阿部川町へは
いちばん近い道である。秋とはいってもまだ日中は暑かった、乾
いた道は照り返してきらきらと輝き、あるかなきかの風にも埃が
舞立つので、おせんたちまの足は忽ち灰色になつてしまった。なにか口
のなかで呟いている、ときどきそう気がついたけれども、なにを
呟いているのか自分でもわからないし、頭が混乱して考えを纏まとめ
ることもできない。ただ追われるような不安と苛いらだ立たしき、息苦
しいほどの激しく強い動悸どうきだけが、今そこに自分の在ることを示
しているような気持だった。

頭梁は山形屋というのであつた。家は寺町へぬける中通りの四
つ角にあり、さして大きくはないが総二階で、白壁に黒い腰羽目

のがっちりした造りだった。大工の頭梁の家というより、てがたい問屋の店という感じである。おせんはその前を眺めながら通った、それから十間ばかり先にあるかもじ屋へはいつて、油元結を買いながら、庄吉のことを訊いた。店にいた老婆は少し耳が遠いようだったが、訊かれたことがわかると舌つたるい口でくどくど話しだした。おたかの云ったことは嘘ではなかったのである、庄吉は気性と腕をみこまれて山形屋の婿養子になった、六月の十幾日とかに祝言もして、夫婦仲も羨ましいうらやということであった。

「お加代さんも評判むすめだったけれどねえおまえさん、お婿さんもそれあよく出来たひとで、腕はいいしおまえさん、腰は低いしねえ、なにしろちよつとのま來ているうちに、職人衆みんなか

ら、兄哥あにいあにいつて立てられるしき、あたしみたいな者にもおまえさん、道で会うと向うから声をかけて呉れて——」

おせんはそこを出て、ちよつと考えたのち、戻つて四つ角を左へ曲り、みかけた筆屋へはいつてまた同じことを訊いた。そのあとでさらに二軒ばかり訊いたらしい。——幾たび訊いても事実に変りはなかつたが、おせんにはどうしても信じられないのである。

——だつてあたしという者がいるじゃないの、きつと待つて呉れつて、庄さんが自分の口からはつきり云つたじゃないの。

そして自分は待つていた。今でもこのとおりちゃんと待つているではないか、それなのにほかのひとを嫁に貰う筈があるだろうか。いやそんな筈は決してない、庄さんに限つてそんなひどいこ

とをする気遣いはない、どこかでなにかが間違っているんだ、その間違いをうつちやっておいてはたいへんなことになる。そういう気持で飽きずに訊きまわったのだ。——家へ帰ったのは日の傾いたじぶんで、幸太郎がひどく泣いていた。おもんは床の上に起き、あやし疲れたのだろう、前に玩具を並べたまま途方にくれたような顔をしていた。おせんは気ぬけのした者のように、おもんにはろくろくものも云わず、すぐに幸太郎を負って夕餉のしたくを始めた。

「おせんちゃんごめんなさいね、幸ちゃん泣かせて悪かったわ」
夕飯のときおもんはこう云った。

「——ずいぶんだましたんだけれど、しまいにはああちゃんああ

ちやんつて追つてきかないのよ、頼まれがいもなくつて済まなかつたわ」

「なんでもないので、そばにくつついてばかりいたから……」

無表情にこう答えたまま、おせんは黙つて箸を動かはししていた。いつもと人が違つたようである。顔色も悪いし眼が異様に光つていた。食事のあととぼんとして、おもんが注意するまで月見の飾りも忘れていた。

「あんたどこか悪いんじゃないやなくて、おせんちゃん、それともなにか厭なことでもあつたの」

「どうして、——あたしなんでもないわよ」

そう云つて振返る眼が、おもんを見るのではなくずっと遠いと

ころをみつめるような眼つきだった。あんまりおかしいので、寝るときももういちど訊いてみた、するとおせんは眉をしかめながら突っ放すようにこう云った。

「お願いだから黙っててよ、それでなくつても頭がくちやくちやなんだから」

そして夜中に幾たびも寝言を云った。

明くる日、朝の食事が終るとすぐ、あと片付けもせずにおせんは出ていった。石のように硬い顔つきで、幸太郎を負って、――
帰ったのはうす暗くなってからだだった。よほどなが歩きをした者のように、足から裾まで埃だらけになり、帰るといきなり上り框へ腰掛けたまま、暫くはなにをする力もないというようすだった、

幸太郎は首のもげそうな恰好で、くたくたになつて背中で眠つていた。……翌日も、その翌日も同じことが続いた。なにをしにどこへゆくかは知らなかったが、おもんは幸太郎が可愛そうになつたので、自分がみるから置いてゆくようにと云つた。するとおせんはすなおに置いていった。

「今日はすぐ帰るわね、もうあらまし用は済んでいるんだから、今日は早く帰つて来るわ」

そんな風に云つてゆくが、やっぱり帰るのは夕方になつた。あとから考えてみるのに、そのじぶんもうおせんは普通ではなかつたのである。いかに信じまいとしても、庄吉の結婚が事実だということ、山形屋の婿としてすでに六十日あまりも幸福に暮らしてい

ることがはつきりし始めた。——いいえ嘘だ、そんなことがある道理がない。こう思うあとから事實はますます慥たしかに、いよいよ動かし難くなるばかりだった。それはおせんを搾木しめぎにかけ、火にのせて炙あぶるのに似ていた。明らかに、おせんおせんの頭にはもう変調が起こつていた、あの火事のあとに患つた自意識の喪失、精神的の虚脱状態が始まつていたのである。……毎日かよい続けて七日めかの昏くれ方のことだ、いつものように山形屋のまわりを歩いていると、寺町のほうから来る庄吉に出会つた。法事にでもいつて来たものか、無地の紋の付いた着物で袴はかまをはいていた、そばに若い女がいつしよだった、まだ、むすめむすめした、小柄の愛くるしい顔だちで、眉の剃そり跡あとの青いのがいかにも初妻にいづまという感じで

ある。おそらくそれが加代というひとであろう。庄吉になにか云つて微笑するのを、おせんははつきりと見た。匂やかに、ややなまめいた微笑であつた、柔らかかそうな唇のあいだから黒く染めた齒のちらと覗くのを、おせんは痛いほどはつきりと見たのである。——二人はおせんの前を通つていった、庄吉は眼も動かさなかつた、そこにいるのが木か石でもあるように、まったく無関心に通りすぎ、やがて山形屋の格子戸の中へはいつていった。

「——庄さん、……庄さん」

おせんは口のなかでそつと呟いた。それからふらふらと寺町のほうへ歩きだした、——苦しい、頭が灼かれるようである、非常に重い物で前後から胸を押しつぶされそうだ。

「——庄さん、……庄さん」

とつぜんおせんは立停つて、道のまん中へ跼んで嘔吐おうとした。眼のまえが暗くなり、地面が波のように揺れだした。——あれはお嫁さんだわ。嘔吐しながらそんなことを思つた。あのひとが庄さんの嫁である、いま自分の見たあのひとが庄さんの嫁である、いま自分の見たあのひとが庄さんと御夫婦になつたのである、庄さんはあのひとと仕合せに暮しているのだ。……誰かがそばでなにか云っている、どうやら自分を介抱して呉れているらしい。立たなければならぬ。立つて家へ帰らなければ。——おせんは立上つた、そしてまたふらふらと歩きだした。耳の中でごうごうと、大きな音がし始めた、赤い恐ろしい焰ほのおが見える、街並の家がそこ

にちやんと見えているのにそれとは別に眩まぶしいような火焰がそこらいちめんのどに拡がってみえる、喉このを焦がすような、熱い噎いつぽい煙の渦、髪毛から青い火をたてながら、焰の中へとびこんでゆく女の姿、……そして巨大な釜戸かまどの咆ほえるような、凄すさまじい火の音をとおして、訴え嘆くようなあの声が聞えてきた。

——おせんちゃん、おらあ辛かった、おらあ苦しかった、本当におらあ苦しかったぜ。

おせんは悲鳴をあげながら道の上へ倒れた。

自分ではもちろん覚えがない。東本願寺の角のところで倒れたのを、いちど番所へ担かぎこまれたが、そこに佐野正へ出入りする人がいて、これは足袋屋の仕事をしている者だと知らせて呉れた。

それから佐野正の店の者が来て、医者も呼んだらしい、少しおちつくのを待つて平右衛門町まで送つて呉れたのだそうである。しかしそれらのことはもとより、それからのち半月ばかりの明け昏れは、まったく夢のようで記憶がなかつた。その期間はすべて幻視と幻聴で占められていた。なかでも鮮やかなのはあの訴えの声であつて、それだけは意識がかいふく恢復してからも、一語一語がはつきりと耳に遺つていた。

そういう状態であつたから煮炊きも出来なかつた。幸太郎の世話だけはするけれども、敷いてやらなければ夜具を出す気もつかず、眠くなると平気でごろ寝をしたという。またそのあいだに松造が二度来たけれども、おせんは氣違ひのように地だんだを踏み、

庄さんに疑われるから帰れと叫んできかなかつた。松造は、しかたなしに持って来た物を置き、なお幾らかの錢を預けて帰つたそのうである。——こうして前後二十日ほどのあいだ、おもんが起きてすべてをひきうけた、食事はもとより、買い物にもゆき洗濯もした。ゆだんしていると、おせんは夜中にも外へ出るので、おちおち眠ることも出来なかつたということだつた。

九月になつて^{あわせ}袷を着てから間もなく、おもんが幸太郎の肌着を洗つてみると、おせんがぼんやり近寄つて来て、今日はなん日だろうかと訊いた。

「今日は十一日、あさつてはお月見よ」

「——そう、九月なのね」

こう云つたと思うと、おせんの眼から涙がぼろぼろ落ちた。おもんが驚いて、どうしたのかと立上ると、おせんは手を振りながらおちついた声で云つた。

「いいのいいの、心配しないで頂戴、あたしよくなつたのよ」

「——おせんちゃん」

「二三日まえから少しずつはつきりしだしていたの、まだ本当じゃないかと思つてただけれど……今日はもう大丈夫だわ、まえにやったことがあるからわかるの、もう大丈夫よ、ながいこと世話をかけて済まなかつたわねえ」

「あたしなんにもしやしなくつてよ、それより具合がいいのはなによりだから、もう少し暢気のんきにしているんだわね」

「いいえもう本当にいいの、あたしのは病氣じゃないとこのまえのでわかつているんだから、あんたこそ休んで頂戴、折角もちなおしたのにまた悪くでもなったら申しわけがないわ、おもんちゃん、さあ、あたしと代つてよ」

八

九月十三日は後ののちの月である。その夜、おもんと幸太郎が熟睡するのを待って、おせんはそつと家をぬけだした。高いうろこ雲が月を隠していた。もう夜半を過ぎた時刻で、どの家も暗く雨戸を閉ざし、ほのかに明るい空の下でしんと寝しずまっていた。おせ

んは柳河岸へいった。地藏堂より少し下の、神田川のおち口に近い河岸へ、——そこは、あの火事の夜、お祖父^{じい}さんや幸太と火をよけていた場所である。あのときは石置場であつたが、今はとりはらつてなにもなく、岸に沿つて新しく柳が植えられていた。：

：おせんはあのとときのあの場所へいつて^{かが}踏み回想のなかへ身をしずめるようにそのまわりを眺めまわした。そこに石が積んであつたのだ、今ついそこの眼のまえにある石垣につかまつて川の中へはいった、石垣の端のその石へつかまつていたのである——ひき潮どきなのだろう、明るい空の雲をうつして、川波は岸を洗いながらかなり早く流れていた。

おせんは眼をつむり、両手で顔を掩いながらじつとあの声を聞

こうとした。幾たびも幻聴にあらわれ、今では言葉のはしから声の抑揚まで思いだすことのできるあの声を。——おれはおまえが欲しかった、その声はこう云いだす。ごうごうと焔の咆え狂うなかで、おせんのそばに踏み、その耳へ囁くささやように云うのである。

——おまえなしには生きている張合もないほど、おれはおせんちゃん欲しかった。十七の夏から五年、おれはどんなに苦しい日を送ったかしのれない、おまえはおれを好いては呉れない、それでも逢いにゆかずにはいられなかった、いつかは好きになつて呉れるかもしれないと思つて。

——だがとうとう、もう来て呉れるなど云われてしまつたつけ、……そう云われたときの気持がどんなに苦しかったか、おせんち

やんおまえにはわかるまい、おれは苦しかった、息もつけないほど苦しかった、……おせんちゃん、おれは本当に苦しかったぜ。

おせんは喉を絞るように噎びあげた。

「幸太さんわかつてよ、あんたがどんなに苦しかったか、あたしには、今ようくわかつてよ」

今はすべてが明らかにわかる、自分を本当に愛して呉れたのは幸太であった。少年の頃から向う気きのつよい性質で、そぶりも言葉つきもぶつきらぼうだった。もの詣もでとか芝居見物にゆくとかすると、必ずおせんになにかしら土産を買って来るが、それを呉れるときには「ほら取んな」などと云つて、わざと乱暴にふるまうのが常だった。せつかく呉れるのならもう少しやさしく云つて

呉れたらいいのに、そう思いながらおせんのうちでも、なにか頼むことがあればきつと幸太に頼んでいた。そしてどんな詰らない頼みでも、彼は必ず頼んだ以上のことをして呉れたではないか、

——お祖父さんに寝つかれてからのゆき届いた心づくし、こちらは嬉しそうな顔もせず、しまいには来て呉れるな、とさえ云った、男にとっては耐え難いあいそづかしだったろう。だが火事の夜はそんなことも忘れたように駆けつけて来て、お祖父さんを負って逃げて呉れた。あの恐ろしい火のなかで、おまえだけは死なせはしないきつと助けてみせると云い、云ったとおりおせんを助けたが、自分は死んでいった。……思い返すまでもない、これらのことはすべてひと筋につながっている、初めから終りまでひと筋に、

おせんを愛しているというただひと筋のおもいにつながっているのである。

これだけ深くつよい幸太の愛を、どうして自分は拒みとおしたのであろう。云うまでもなく自分が庄吉から愛されていたからだ、自分も庄吉を愛していたからである。しかし本当に庄吉と自分とは愛し合っていたのだろうか、いったい庄吉と自分とのあいだにどれだけのことがあつたらう。自分が彼に同情していたことは慥かだ、特に幸太が杉田屋の養子になってから、悄然とした彼のようすには同情を唆られた。けれどもそれは決して愛ではなかつた。彼が大阪へゆくまえにおせんを柳河岸へ呼びだして、帰つて来るまで待つていて呉れと、思いもかけぬことを囁かれたとき、ええ

待つていますと答えたのも、そういうことに疎い十七という年の若さと、それまでの同情にさそわれなれば夢中のことだったではないか。——庄吉が去つてしまつてから、いやいや、もつとはつきり思いだせば大阪から彼の手紙が来てから、その手紙を読んでから初めて自分は、彼を愛しだしたのである。どんなことがあつても待つていようと決心したのもそれからだ、彼は幸太が云い寄るに違いないと云い遺した、だからおせんはどこまでも幸太を拒みとおした。杉田屋へも義理の悪いことをし、幸太の親切も断わり、病気で倒れたお祖父さんを抱えて、乏しい手内職で生きていたではないか。……もちろんそれは彼を愛していたからである、庄吉が自分を愛し自分が庄吉を愛していると信じたからである、

けれど庄吉は本当に自分を愛していたのだろうか、たまたま悪い条件が重なって、解けにくい誤解がうまれたのは事実だ、しかしそれはどこまでも誤解である、彼の疑うようなことはまったく無かった、自分は待つて呉れと云ったではないか、いつかきつと本当のことがわかる筈だ、待つていますよと云ったではないか。――だが庄吉は待つて呉れなかつた、眼と鼻のさきについて結婚したりつばな頭梁の婿になり可愛い娘を嫁にした、それは同時に、おせんがいたずら女であることを証明する結果になるのに、……それでも彼はおせんを愛していたのだろうか、それがおせんに、あれほどの代償を払わせた愛だったのだろうか。

「よくわかるわ、幸太さん、あなたは本当におせんを想つて呉れ

たのね、——庄さんがお嫁さんと歩いているのを見たとき、あたしからだをずたずたにされるような気持だったの、苦しくって苦しくって息もつけなかった、……胸が潰つぶれてしまいそうな苦しい辛い気持だったわ、幸太さん、あなたの云って呉れたことが、そのときはじめてわかったのよ、——あなたの苦しいといった気持が、辛かったと云った気持がどんなものだったか、そのときはじめてあたしにわかったのよ」

おせんは噎なげびあげながらそう云った。高く高く、月を孕はらんだ雲の表を渡る鳥があつた。なにか秘めごとでも囁くように、岸を洗う水の音が微かすかに聞えていた。

「かんにんして頂戴、幸太さん、あたしが悪かった、あたしがば

かだつたのよ、——庄さんにあんなことを云われるまで、あたしあなたが好きだったと思うの、だってあなたには遠慮なしに話ができたし、ずいぶん失礼なことも頼んだりしたじゃないの、あなたならなにを頼んでもして貰える、頼んだ以上のことがして貰えるって、ちゃんと知っていたんだわ、……幸太さん、あんなことさえなければ、おせんはあなたの嫁になつていたかもしれないわね、杉田屋さんのおじさんもおばさんもそのお積りだったんですもの、そうすればいまごろは……」

おせんの声は激しい嗚咽おえつのためにとぎれた、それからやや暫くして次のように続けられた、

「——たったひと言、あの河岸の柳の下で聞いたたったひと言の

ために、なにもかもが違ってしまった、なにもかもが取返しのこと
かないほうへ曲ってしまったのよ、あなたは死んでしまい、おせ
んはこんなみじめなことになって、そうして初めてわかった、な
にが真実だったかということ、ほんとうの愛がどんなものかとい
うことが、……幸太さん、それでもあたしうれしい、あなたには
お詫^わびのしようもないけれど、あれほど深く、幸太さんに愛して
貰ったということ、それがこんなにはつきりよくわかったことが
うれしいの、——あたしうれしいのよ、幸太さん、いま考えると
あの晩ひろった子に幸太郎という名がついたのもふしぎではなか
ったのね、あの子は幸太さんとおせんの子だわ、あたし今から誰
にでも云ってやってよ、おせんは幸太さんと夫婦だったって、こ

の子は幸太さんとあたしの子だつて、……怒らないわねえ、幸太さん」

そこにその人がいるかのように、おせんはこう云いながらまたひとしきり泣いた。眼のまえの灰ほのあか明るい川波の中から、幸太がうかびあがつてこつちへ来るようだ、ぶつきらぼうなようすで、しかしかなしいほど愛情のこもった眼で、おせんをみつめながら、——そうだ、幸太とおせんとは今こそ結びつくことができる、そしてもう二度と離れることはないだろう。おせんの嗚咽はなお暫く続いていた。

その翌朝おもんは血を吐いた。柳河岸から帰ったおせんがなかなか寝つかれず、明け方の光がさしはじめて、ようやくまどろみ

かけたときのことだ、異様な声でとつぜん呼び起こして、半挿はんぞうに三分の一も吐き、そのまま失神してしまった。もちろん二十余日の過労が祟ったのである、——医者はすぐに来て呉れたが、どう手の出しようもなかったし、むしろそうなるのが当然だという態度で、二三の手当となにやら知れぬ粉薬を置いて帰った。おもんは二度と起きられない病床についたのであった。

九

松造が来て八百屋の店を出さないかとすすめたのは、おもんが倒れて十日ほどのちのことであつた。考えるまでもなく、重い病

人を抱えてそんなことは出来ない、いずれおちついてからと云つて断わつた。——おもんはそれから三十日あまり寝て亡くなつた、病氣してからひとがらの変つたおもんは、顔つきも穏やかに美しくなり、いつも眼や唇のあたりに微笑をうかべていた。

「あたしは仕合せだわ、おせんちゃん、本当ならどこかの空地か草原でも死ぬところなのに、仲良しのあんたに介抱されて、わがままの云いたいだけ云つて死ぬるんだもの、考えると勿^{もったい}体なくて罰^{ばち}が当るような気がするわ」

そんな風にしみじみと繰り返して云つた。少しも誇張のない、すなおな諦^{あきら}めのこもつた調子である。——死ぬなどと云つてはいけない、治つて貰おうと思えばこそ出来ないながらしてあげるので、

石にかじりついてても治つて呉れなければ。おせんがそう云うと、きれいに澄んだ眼で領うなずきはするが、心ではもう自分の死ぬこと、それは間もなくだということを知っていたようである。

「わたしずいぶん苦勞したわ、思いだすと今でも身ぶるいの出るような、苦しい、みじめなことがあつたわ、——でもこれでようやくおしまいになるの、死ぬことは楽になることだわ、あの世といたところは静かで、いつもきれいな光があたりを照らし、いろいろな花がいつぱい咲いているように思うの、そこへゆけばもう憎むことも騙だますこともない、なにかも忘れて悠くり休むことが出来る、決してもう苦しんだり悲しんだりすることはないの、：あなたにわかるかしら、おせんちゃん、あかし待ち遠しいくら

いな のよ」

おもんが亡くなつたのは十月下旬の、すさまじく野分の吹きわたる夜だった。彼女はおせんを枕まくらもと許もとに坐らせ、その手を握つて、じつとなにかを待つようにみえた。

「あたしおせんちゃんを護つていてよ、おせんちゃんと幸坊が仕合せになるように、あの世からきつと護つていてよ、——お世話になつて済まなかつたわね、ごめんなさいね」

風は雨戸を揺すり屋根を叩いた。おもんは暫くしてふつと眼をあき、戸口のほうを見やりながらはつきりと云つた。

「表をあけてよ、おせんちゃん、誰かあたしを迎えに来ているじゃないの」

それから半ほんとき刻ほどのちにおもんは死んだ。

振返つてみるとそのときからおせんの新しい日が始まっているようだ。おもんの葬いを済ましてから後のおせんは、もうそのまえの彼女ではなかった。世を憚はばかったり怖おそれたりするいじけた気持ちもなくなり、「生きよう」という心の張とちからが出てきた。――なに怖れたり憚ることがあろう、こんどは誰に向つてもはつきり云えるのだ、ええこの子はあたしの産んだ子です。この子の父親は幸太というひとです、あたしは良人の遺したこの子をりっぱに育ててみせます。……そうだ、おせんの新しい日はそこから始まったのである。その年の暮にせまつてから、松造の好意をうけて八百屋の店をひらいた。まえにも云つたようなわけで近所とは

つきあいがないから、そんな店を出しても商売にはなるまいと云ったが、松造は例のぶあいそな口ぶりで、なによその半値で売れば必ずお客がつく、近所の者より隣り町から買いに来るからやってみるがいい。こう云つてすすめた。家の表を作り変えて店にし、古河から十五になる小僧もつれて来て呉れた。古い車を一台、籠を五つ、^{はかり}秤だの帳面だの筆矢立など、こまごました物もすべて松造が心配した。荷のほうは千住の間屋に話してあるので、小僧がゆけばその日その日の物を揃^{そろ}えて呉れる、値段も松造との取引をみかえりに元値ということになった。これはのちに問屋の主人がおせんの身の上を聞いてから、さらに好い条件になったのであるが。——心配したほどではなく商売はうまくいった、元の値が値

であるのと、初めのうち松造が付いていて思いきり安く売るようにしたため、新店は半月繁昌といわれているに拘かからず、客足はずっと続いて離れなかった。近所の人たちもさいしよのうちこそ妙な顔をしていたが、八百屋物は毎日のことであるし、切詰めた生活をしている者には一文でも安いということは、大きいので、ひとり来、ふたり来するうちに、いつかしまわりの者はたいがい客になってしまった。その中でお勘だけは別であった、お地蔵さまの縁日のことがあってから、お勘は町内を背負って立つようにおせんの悪口を云いちらしていたが、おせんの店の安いことを聞くとまっ先にやって来たのも彼女であった。そして五六たびも来たと思うと、いちどきに店の荷を半分も買ってゆこうとした、

彼女の良人は舟八百屋をしているが、おせんの店のほうが問屋で卸すより安いので、こつちから買って商売をしようという積りである。気の毒ではあるがおせんは断わった。——こんな売り方をしてるのは一人でもよけいに安く買って貰いたいからである、又売りをされるためではないのだから、はつきりそう云った。お勘はそれなり寄りつかず、もつとひどい悪口を云いまわったらしいが、どうやらこんどは近所が相手にしなくなったようであつた。

店が順調になると松造はまた五六日おきにしか来なくなつた。相変らずぶすつとした顔で蓬臭いよもぎ苳たばこをふかし、怖いような眼で家の中を眺めまわしたり、おせんの付けている絵解きのような帳面を退屈そうにめくつてみたりする。ごく稀まれには幸太郎をつれて、

浅草寺などへゆくこともあつたが、ひと晩泊るときまつて朝早く帰つていった。——古河から来た小僧の云うところによると、松造夫婦は気が合わず、お鶴というあの子は親類から貰つたのだそうで、それがまたどうしても夫婦になつかないため、そのうち親元へ返すことになるだろう。そういう話であつた。……おせんはいつかの法事のときを思ひだした、おいくという人の冷たいそつけないようすや、女の子の寂しそうな顔つきには、そういう蔭の理由があつたのである。誰が悪いのでもなく不運なめぐりあわせだろうが、世の中にちようど善いということは少ないものだ、いつとき溜息をつくような気持であつた。

店をはじめた明くる年の春の彼岸に、宗念寺へ墓まいりにいつ

たとき、別にきょうりよう経料を納めてお祖父さんと幸太の戒名をつけて貰った。そして位牌いはいを二つ拵こしらえ、幸太のには彼の戒名に並べて自分の俗名を朱で入れた。自分のも戒名にすればよいのだが、いっそおせんと入れるほうが情が届くように思えたからである。——
こうして時が経つていった。変わった事といえ、飛脚屋ごんじろの権二郎けんじろうが酒のうへの喧嘩けんかで人を斬り、牢ろうへはいつて一年ばかりするうちに牢死したということ、友助夫婦が梶平のあと押しで、本所のほうへ小さな材木屋を始めたこと、そして浅草橋の川下に新しく橋が架けられ、柳橋やなぎばしと名付けられたことくらいのものであらう。柳橋はあの火事のあとで地元から願い出ていたのが、ようやく許しが下つて出来たわけで、渡り初めから三日のあいだ祭り

のような祝いが催された。……その祝いの三日めのことである、店を早くしまつて、幸太郎に小僧をつけて出してやり、自分も新しい橋を見にゆくつもりで、着替えをしていると客が来た。土間が暗くなつていたのでちよつとわからなかつたが、立つていってみると庄吉であつた。

「ひとこと詫びが云いたくつて来たんだ」

彼は、こう云つて、こちらを見上げた。一年まえに、見たきりだが、彼はあるときより少し肥り、酒を飲んでいるのだろう、顔が赭^{あか}く膏^{あぶら}ぎつていた。おせんは、平気で彼を眺めることができた。ふしぎなくらい感情が動かなかつた、そうしたいと思えば笑うこともできそうであつた。

「あたしこれから出るところですけれど」

「ひとことでいいんだ、おせんさん」庄吉は慌てた口つきで云つた、「——おれは去年の暮に水戸へいつてきた、杉田屋の頭梁が亡くなつたんでね」

「杉田屋のおじさんが、——おじさんが亡くなつたんですって、……」

「いまいる山形屋とは手紙の遣り取りが続いていたんだ、それでおれが名代みょうだいでくやみにいつて来たんだが火事するとき傷めた腰が治らず、その骨から余病が出て、とうとういけなくなつたということだ」

「おばさんは、お蝶おばさんは」

「お神かみさんは達者でおいでなすった、ひと晩いろいろ話をしたが、その話で、——すっかりわかつたんだよ、すっかり、……幸太とおせんさんとなんでもなかつたっていうことが、おまえが幸太をしまいまで嫌いぬいていたということが、お神さんの話でよくわかつたんだ、おせんさん」

「いいえ違うわ、それは違つてますよ」

「——違うつて、なにがどう違うんだ」

「お神さんの云うことがよ、お神さんはなにも御存じないんだわ、幸さんとあたしがなんでもなかつたなんて」おせんは声をたてて笑つた、「——そんなこと貴方あなたほんとなさるんですか」

「——おせんさん」

「いつか貴方の云つたとおりよ、あたし幸さんとわけがあつたの、あの子は幸さんとあたしのあいだに出来た子だわ、もしも証拠をごろんになりたければ、ごろんにいれるからあがつて下さい」

こう云つておせんは部屋の隅へいった。仏壇をあけて燈明をつけ、香をあげて振返つた。庄吉はあがつて来た、そして示されるままに仏壇の中を見た。

「それが幸さんの位牌です、そばに並べて朱で入れてある名を読んで下さいな、おせんと書いてあるでしょう、——戒名だけで疑わしければ裏をごろんなさいまし、俗名幸太とあのひとのも書いてありますから」

庄吉はなにも云わずに頭を垂れ、肩をすぼめるようにして出て

いった。——おせんは独りになると、位牌をじつとみつめながら、小さな低いこえで囁いた。

「これでいいわね、幸さん、お蝶おばさんにだつて悪くはないわね、——これでようやく、はつきり幸さんと御夫婦になつたような氣持よ、あんたもそう思つて呉れるわね、幸さん」

^{まぶた} 瞼の裏が熱くなり涙が溢^{あふ}れてきた、ぼうとかすみだした燈明の光のかなたに、幸太の顔が頷いている、よしよしそれで結構、そういう声まで聞えてくるようだ。——柳橋の祝いに集まる人たちだろう、表は浮き立つようなざわめきで賑^{にぎ}わっていた。

青空文庫情報

底本：「山本周五郎全集第二巻 日本婦道記・柳橋物語」新潮社

1981（昭和56）年9月15日発行

1981（昭和56）年10月25日2刷

初出：前編「椿 創刊号」山本周五郎一人雑誌

1946（昭和21）年7月

中・後編「新青年」

1949（昭和24）年1月～3月

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：Butami

2020年5月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

柳橋物語

山本周五郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>